秋田県文化財調査報告書第360集

西　野　遺　跡

―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVII―

２００３・３

秋田県教育委員会

秋田県文化財調査報告書第360集
西　野　遺　跡
２００３・３　秋田県教育委員会

西野遺跡

—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVII—

２００３・３

秋田県教育委員会

遺跡近景

竪穴住居群

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和をはかりながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設に先立って、平成12年度に昭和町で実施した西野遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では縄文時代の竪穴住居跡や、古代の竪穴住居跡、建物跡、溝跡、鍛冶炉が発見され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました日本道路公団東北支社秋田工事事務所、昭和町、昭和町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　清

例　　言

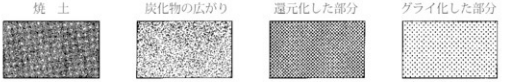
1．本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書は、2000(平成12)年度に調査された秋田県南秋田郡昭和町に所在する西野遺跡の調査結果を収めたもので、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財報告書としては17冊目にあたる。
3．調査内容については、秋田県埋蔵文化財報告会資料等などでも公表しているが、本報告書を正式なものとする。
4．本報告書の執筆・編集は半田あきほが行い、一部加筆・訂正を高橋忠彦が行った。
5．本報告書の挿図中に使用した土層表記法は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1997年版』を使用した。
6．本報告書に使用した航空写真は、株式会社シン技術コンサルに依託し、撮影したものである。
7．第５章「自然化学分析」は、株式会社古環境研究所に依託した報告であるが、遺構の名称など一部を補訂している。
8．本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行50,000分の１「五城目」と日本道路公団東北支社秋田工事事務所提供の1,000分の１工事用図面である。
9．本遺跡の調査ならびに報告書刊行にあたり、次の方々よりご指導、ご教示を賜った。記して感謝申し上げます(敬称略、五十音順)。
穴澤義功、瀬下司、手塚　均、秋元信夫、藤井安正

凡　　例

1．本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は座標北である。
2．土層注記は基本層位にローマ数字を用いた。
3．遺構にはその種類ごとに略記号を付し、柱穴様ピットと他の遺構を区別してそれぞれ検出順に通し番号を付したが、遺構ではないと判断したものは欠番とした。なお遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＩ …… 竪穴住居跡	ＳＫＩ …… 竪穴状遺構	ＳＢ …… 掘立柱建物跡
ＳＳ …… 製鉄関連遺構	ＳＫ　…… 土坑	ＳＮ …… 焼土遺構
ＳＤ …… 溝跡	ＳＫＰ …… 柱穴様ピット	ＳＸ …… 性格不明遺構

4．遺物には遺構内外を区別して各種類ごとに通し番号を付した。鉄関連遺物は通し番号とした。
5．挿図中に用いたスクリーントーンは以下の通りである。



目　　次

序
例言・凡例 iii
目次 iv
挿図目次 v
図版目次 vi
第１章　はじめに
第１節　調査に至る経過…… 1
第２節　調査要項…… 1
第２章　遺跡の環境
第１節　遺跡の位置と立地…… 5
第２節　歴史的環境…… 5
第３章　発掘調査の概要
第１節　遺跡の概観……11
第２節　調査の方法……11
第３節　調査の経過……12
第４章　調査の記録
第１節　基本層位……16
第２節　検出遺構と出土遺物……17
第３節　遺構外出土遺物……80
第４節　鉄関連遺物……95
第５章　自然科学分析
第１節　放射性炭素年代測定 ……108
第２節　西野遺跡出土炭化材の樹種同定 ……110
第６章　まとめ ……113
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　日本海沿岸自動車道と関連遺跡……２
第２図　工事計画と調査範囲……３
第３図　遺跡位置図……５
第４図　地形区分図……６
第５図　周辺遺跡位置図……８
第６図　遺構配置図……13・14
第７図　グリッド設定図……15
第８図　基本土層図……16
第９図　ＳＩ61竪穴住居跡……18
第10図　ＳＩ14・92竪穴住居跡（１）……20
第11図　ＳＩ14・92竪穴住居跡（２）……21
第12図　ＳＩ17竪穴住居跡……22
第13図　ＳＩ20竪穴住居跡……23
第14図　ＳＩ30竪穴住居跡（１）……25
第15図　ＳＩ30竪穴住居跡（２）……26
第16図　ＳＩ35竪穴住居跡（１）……28
第17図　ＳＩ35竪穴住居跡（２）……29
第18図　ＳＩ36竪穴住居跡（１）……30
第19図　ＳＩ36竪穴住居跡（２）……31
第20図　ＳＩ62竪穴住居跡（１）
　　ＳＫ94土坑……32
第21図　ＳＩ62竪穴住居跡（２）……33
第22図　ＳＩ64・82竪穴住居跡（１）
　　ＳＫ103土坑……34
第23図　ＳＩ64・82竪穴住居跡（２）……35
第24図　ＳＩ67竪穴住居跡
　　ＳＫ101・102土坑……36
第25図　ＳＩ78竪穴住居跡……37
第26図　ＳＩ88・89・90・91竪穴住居跡（１）
　　ＳＫ92・93土坑……38
第27図　ＳＩ62・64・82・88・89・90・91
　　竪穴住居跡（２）……39
第28図　竪穴住居跡集中区……39
第29図　ＳＢ96掘立柱建物跡……41
第30図　ＳＢ98掘立柱建物跡（１）……42
第31図　ＳＢ98掘立柱建物跡（２）……43
第32図　ＳＫＩ42竪穴状遺構……43
第33図　ＳＳ25鍛冶炉（１）……44
第34図　ＳＳ25鍛冶炉（２）……45
第35図　ＳＫ01・02・05・23・26土坑……47
第36図　ＳＫ08・10・13・31・33・34・37土坑……49
第37図　ＳＫ43・44土坑……51
第38図　ＳＫ45・47・48・50・51土坑……52
第39図　ＳＫ69・71・85・86・87土坑……55
第40図　ＳＮ04・32・59・74・79焼土遺構……57
第41図　ＳＤ19・18溝跡……58
第42図　ＳＤ39・100溝跡（１）……60
第43図　ＳＤ39溝跡（２）……61
第44図　ＳＤ46溝跡……61
第45図　ＳＤ41・70溝跡……62
第46図　ＳＤ80・83溝跡……63
第47図　遺構内出土石器（１）……69
第48図　遺構内出土石器（２）……70
第49図　遺構内出土石器（３）……71
第50図　遺構内出土土器(縄文・弥生)(１)…72
第51図　遺構内出土土器(縄文・弥生)(２)…73
第52図　遺構内出土遺物(古代)(１)……74
第53図　遺構内出土遺物(古代)(２)……75
第54図　遺構内出土遺物(古代)(３)……76
第55図　遺構内出土遺物(古代)(４)……77
第56図　遺構外出土石器（１）……82
第57図　遺構外出土石器（２）……83
第58図　遺構外出土石器（３）……84
第59図　遺構外出土土器(縄文・弥生)(１)…85
第60図　遺構外出土土器(縄文・弥生)(２)…86
第61図　遺構外出土土器(縄文・弥生)(３)…87
第62図　遺構外出土土器(縄文・弥生)(４)…88
第63図　遺構外出土遺物(古代)(１)……89
第64図　遺構外出土遺物(古代)(２)……90
第65図　遺構外出土遺物(古代)(３)……91

第66図　遺構外出土遺物(古代)(４)　……92
第67図　鉄関連遺物構成図(遺構内)……96
第68図　鉄関連遺物構成図(遺構外)……97
第69図　鉄関連遺物（１）……98
第70図　鉄関連遺物（２）……99
第71図　鉄関連遺物（３）……100
第72図　鉄関連遺物（４）……101
第73図　鉄関連遺物（５）……102
第74図　鉄関連遺物（６）……103
第75図　鉄関連遺物（７）……104
第76図　鉄関連遺物（８）……105
第77図　鉄関連遺物（９）……106
第78図　鉄関連遺物（10）……107

図　版　目　次

巻頭図版１　遺跡近景
巻頭図版２　竪穴住居群
図版１　調査前(南▷北)
　　調査風景(北▷南)
図版２　ＳＩ61竪穴住居跡(北▷南)
　　ＳＩ30竪穴住居跡(東▷西)
図版３　ＳＩ35竪穴住居跡(南▷北)
　　ＳＩ35竪穴住居跡(北▷南)
図版４　ＳＩ14竪穴住居跡(南▷北)
　　ＳＩ36竪穴住居跡(南▷北)
図版５　ＳＩ78竪穴住居跡(北▷南)
　　ＳＫＩ42竪穴状遺構(西▷東)
図版６　ＳＳ25鍛冶炉(西▷東)
　　ＳＫ85土坑(東▷西)
図版７　遺構内出土土器（１）
図版８　遺構内出土土器（２）
　　遺構外出土石器（２）
図版９　遺構外出土石器（１）
図版10　遺構外出土縄文土器
　　遺構外出土弥生土器
図版11　遺構外出土須恵器
　　遺構外出土土師器
図版12　椀形鍛冶滓
　　鍛冶滓
図版13　鉄製品
　　羽口・砥石
図版14　西野遺跡の木材Ⅰ
図版15　西野遺跡の木材Ⅱ

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市にかけての日本海沿岸や県内の高速交通体系の改善など、地域の生産活動と県民生活に必要な情報や物資の交流を促進することを目的として計画された総延長340kmの高速道路である。このうち、秋田県内では、国土交通省によって一部事業化されている象潟仁賀保道路及び仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、大館西道路と連結して、小坂ＪＣＴで東北自動車道に接続する。1997(平成９)年２月に新潟市～青森市までが日本海沿岸東北自動車道として路線指定され、このうちの秋田南Ｉ・Ｃ～昭和男鹿半島Ｉ・Ｃ間の25.7kmについては、同年11月13日に開通している。

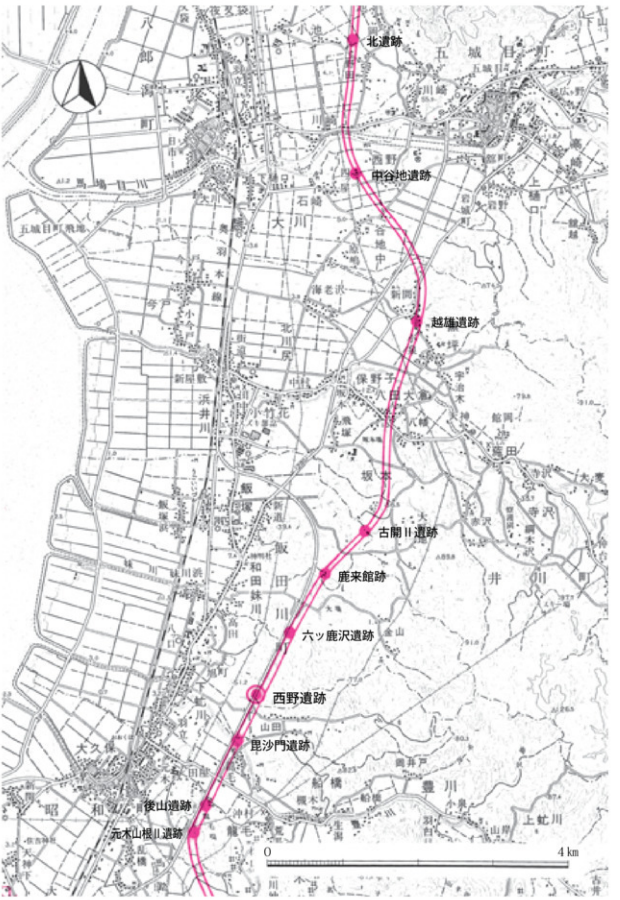
西野遺跡に係る昭和～琴丘間の20.7kmについては、1991(平成３)年12月に整備計画区間に、1993(平成５)年12月には実施計画認可を経て1994(平成６)年11月に路線が発表された。

これを受けて県教育庁文化課では、路線上における埋蔵文化財の確認のため、1996(平成８)年９・12月に分布調査を実施し、その結果、西野遺跡を含む新たに発見した遺跡16箇所と、周知の遺跡３箇所の計19遺跡が予定路線内に存在することが明らかとなった。

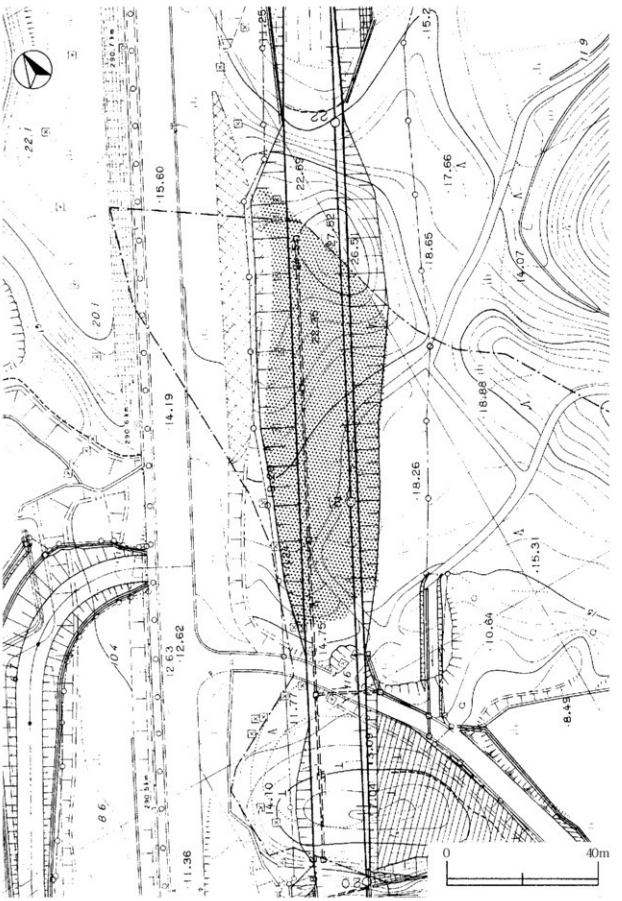
西野遺跡の確認調査は、5,660㎡を対象として平成10年５月11日から15日にかけて実施され、古代の集落跡を主体として、縄文・弥生時代の集落跡もある複合遺跡であり、工事区域内遺跡面積は3,900㎡であるとされた。なお、調査の対象となったのはこのうち２車線部分の2,900㎡で、調査は平成11・12年の２ヶ年にわたって行われた。

第2節　調査要項

遺跡名称　西野遺跡（にしのいせき）
遺跡略号　４ＮＮ
所在地　秋田県南秋田郡昭和町豊川山田字家ノ上117－１外
調査期間　平成11年６月４日～６月11日
　　平成12年５月15日～８月11日
調査目的　日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る事前発掘調査
調査面積　2,900㎡（平成11年度：150㎡　平成12年度：2,750㎡）
調査主体者　秋田県教育委員会
調査担当者　平成11年度　小山　有希（秋田県埋蔵文化財センター調査課文化財主事）
　　伊藤　　攻（同　調査課非常勤職員）
　　齋藤　浩志（同　調査課非常勤職員）
　　平成12年度　半田あきほ（同　調査課学芸主事）
　　小塚裕姫子（同　調査課非常勤職員）



第１図　日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡



第２図　工事計画と調査範囲

	佐々木公法（同　調査課非常勤職員）
	関　　友明（同　調査課非常勤職員）
総務担当者	菅原　　晃（同　総務課主査）
	佐々木敬隆（同　総務課主事）
	八文字　隆（同　総務課主事）
	成田　　誠（同　総務課主事）
	土橋　謙一（同　総務課主事）
調査協力機関	日本道路公団東北支社秋田工事事務所
	昭和町教育委員会

《参考文献》

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集　1997（平成９）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第281集　1998（平成10）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集　1999（平成11）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集　2000（平成12）年
秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅨ－古野遺跡－』秋田県文化財調査報告書第253集1995（平成７）年
秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅩ－蟹子沢遺跡－』秋田県文化財調査報告書第261集　1996（平成８）年
秋田県教育委員会　『戸平川遺跡－東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩⅣ－』秋田県文化財調査報告書第294集　2000（平成12）年
秋田県教育委員会　『兵ヶ沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』秋田県文化財調報告書第296集　2000（平成12）年
秋田県教育委員会　『元木山根Ⅱ遺跡・琵沙門遺跡・六ツ鹿沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』秋田県文化財調査報告書第309集　2000（平成12）年
秋田県教育委員会　『岱Ⅰ遺跡・岱Ⅱ遺跡・岱Ⅲ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』秋田県文化財調査報告書第314集　2001（平成13）年
秋田県教育委員会『北遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』秋田県文化財調査報告書第314集　2001（平成13）年
秋田県教育委員会『中谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』秋田県文化財調査報告書第316集　2001（平成13）年
秋田県教育委員会　『古間Ⅱ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』秋田県文化財調査報告書第317集　2001（平成13）年
秋田県教育委員会『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』秋田県文化財調査報告書第314集　2001（平成13）年
秋田県教育委員会　『鹿来館跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅠ－』秋田県文化財調査報告書第332集　2002（平成14）年
秋田県教育委員会　『後山遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』秋田県文化財調査報告書第340集　2002（平成14）年
秋田県教育委員会　『岱Ⅱ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ－』秋田県文化財調査報告書第341集　2002（平成14）年
秋田県教育委員会　『小林遺跡Ⅰ（縄文時代編）－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ－』秋田県文化財調査報告書第341集　2002（平成14）年

第２章　遺跡の環境

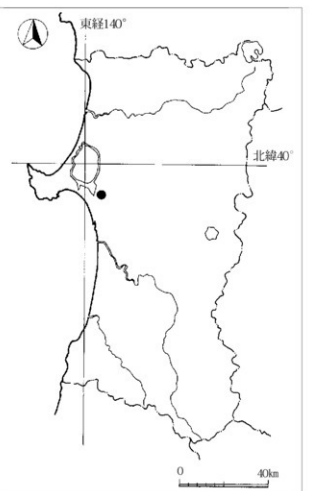
第１節　遺跡の位置と立地

遺跡はＪＲ奥羽線大久保駅から北東約1.6km、山田集落に隣接して飯田川町との町境、北緯35度52分21秒、東経140度６分５秒に位置し、井川丘陵の西側先端部の砂礫段丘上標高14～27mに立地する。

遺跡の所在する南秋田郡昭和町は、秋田市の北に隣接し、八郎潟残存湖岸の南東部、出羽丘陵西端部にある。出羽丘陵西部から八郎潟残存湖へは幾筋もの小河川が流れ込み、これら各水系により浸食を受けた丘陵地、河岸段丘が発達している。

昭和町は、出羽丘陵俎山に水源を発する豊川流域に位置し、八郎潟残存湖東岸に沿う形で並走する国道７号線、ＪＲ奥羽本線が町を縦断する。

遺跡周辺の地形は『土地分類基本調査　五城目』によると、出羽丘陵から西部に向けて山地、丘陵地、段丘(砂礫段丘)、低地(湖岸平野)に分けられる(第２図)。俎山を中心とする山地では俎山山地が広がり、その側辺では井川丘陵、豊川丘陵が見られる。豊川流域では、河岸段丘が一部発達し、谷底低地である豊川低地が形成される。八郎潟湖岸の沖積低地は、丘陵地と残存湖岸の間に広がる湖東沖積低地と馬踏川流域に形成された馬踏川低地から成る。

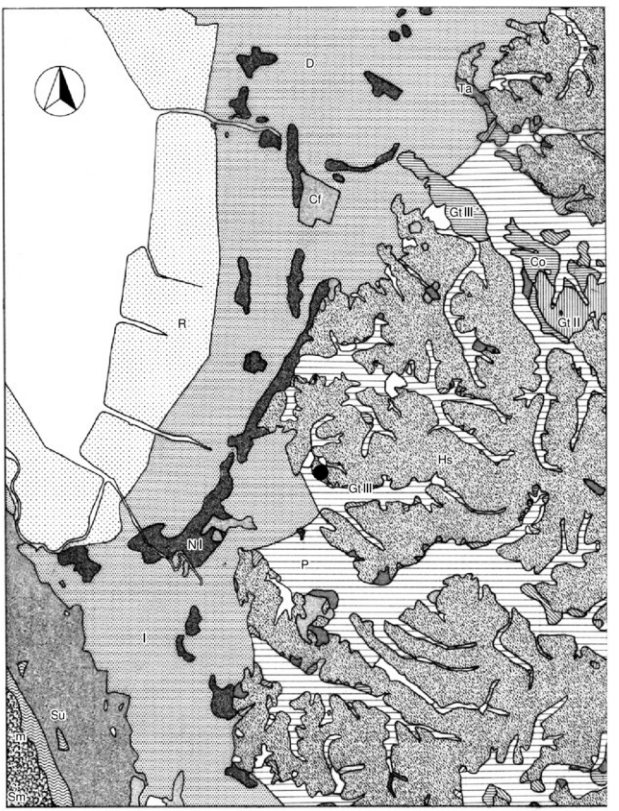


第３図　遺跡位置図

地質は、下位から新第三紀中新世の女川層、船川層、天徳寺層、鮮新世の笹岡層、第四紀更新世の潟西層、段丘堆積物、完新世の段丘堆積物、沖積低地堆積物から構成されている。山地から湖岸に向かって地質時代の古い地層から若い地層が順に重なっているが、地層が褶曲しているため、褶曲軸に沿って同一層が繰り返し露出する。このため沖積低地に接する丘陵地の一部では、船川層の泥岩、女川層の珪質頁岩がみられる。

第２節　歴史的環境

西野遺跡の所在する八郎潟町南東部においては、各時代にわたる数多くの遺跡がある。ここでは西



I（湖岸平野）　D（三角州）　R（干拓地）　NI（自然堤防）
Hs（丘陵地Ⅱ）　P（谷底平野）　Gt Ⅱ（砂礫段丘Ⅱ）
Gt Ⅲ（砂礫段丘Ⅲ）　Gt Ⅲ⁺（砂礫段丘Ⅲ⁺）　m（浜堤間湿地）
Ta（崖錐及び土石流）　Cf・Co（人工改変地）　Su・Sm（被覆砂丘）

0　3km

第４図　地形区分図

野遺跡の歴史的環境を探るため、八郎潟南東部の縄文時代から古代までの遺跡について概観する（第５図、第１・２表）。

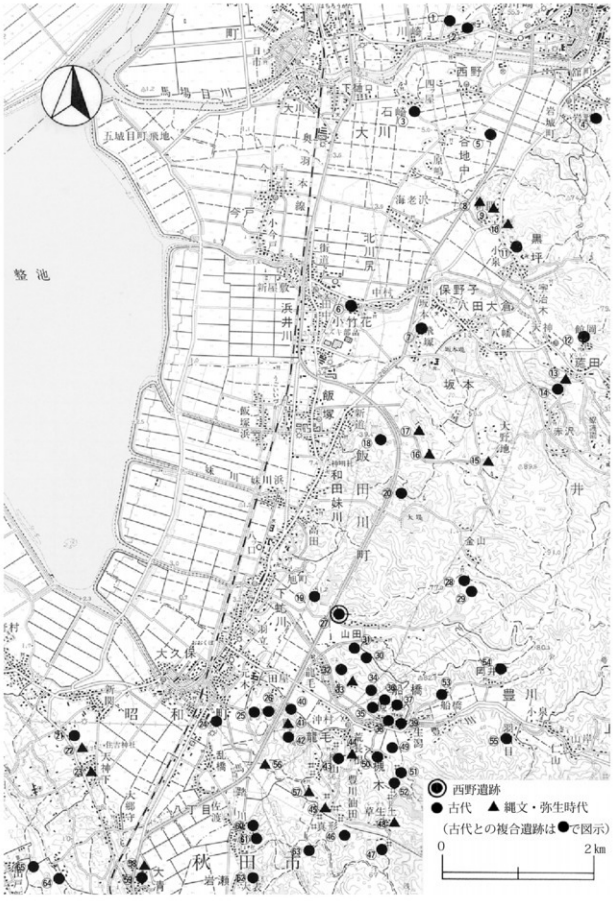
縄文時代では前期中葉で、井川町の大野地遺跡(15)が挙げられる。1984～86年に発掘調査が行われ、円筒下層ａ・ｂ式を中心とする土器が出土した。円筒下層ｂ式と大木３～４式とに共伴関係がみられ、遺跡内の土坑からはヤマトシジミ単一種からなる貝層が確認されている。後期～晩期の遺跡としては『秋田県遺跡地図(中央版)』に遺物包含地として登録されている、狐森遺跡(22)と七ツ森遺跡(23)が知られている。狐森遺跡からは、国指定重要文化財で後期後半の人面付環状注口土器が出土しており、七ツ森遺跡からは縄文時代後期の破片のほか貝殻も出土している。また、昭和町の槻木地区は天然のアスファルトの産地として知られている。

弥生時代の遺跡としては、井川町の新間Ａ・Ｂ遺跡(８・９)が挙げられる。新間Ａ遺跡からは籾痕のついた弥生土器が出土している。同町の越雄遺跡(10)は新発見の遺跡で2000年に発掘調査されており、弥生時代前期の竪穴住居跡や土器が出土している。

古代になると多くの遺跡が確認されていて、昭和町の羽白目遺跡(55)、五城目町の石崎遺跡(３)・岩野山古墳群(４)が知られている。羽白目遺跡は望烽跡とされており、1966・67年に発掘調査が実施されている。烽舎跡、柵跡、平窯跡が確認され、土師器・須恵器・刀子のほか「秋田」銘入りの瓦が出土している。石崎遺跡は1967年、1972・73年に発掘調査が行われている。櫓跡とされる柱痕と１辺400m以上と推定される柵列が確認されている。岩野山古墳群は1960年に発見され、61年から３回の発掘調査が行われている。多数の土坑と溝状の方形遺構が副葬品とともに確認され、８世紀から10世紀までの墓域と考えられている。豊川河岸の丘陵上にも古代の遺跡が分布する。右岸の丘陵には深田沢遺跡(30)、深田沢Ⅱ遺跡(31)、千刈田遺跡(32)、塔田Ⅰ～Ⅲ遺跡(34～36)、火葬墓として登録されている槻木盛土墳遺跡(37)、塔田Ⅳ遺跡(38)、大宮遺跡(39)、左岸には正戸尻Ⅰ・Ⅱ遺跡(49･50)、寸白沢遺跡(51)、高野遺跡(52)がある。近年発掘調査が実施された遺跡としては掘立柱建物跡と板材列、多数の土師器や須恵器、木製祭祀具が出土した中谷地遺跡(５)、掘立柱建物跡、製鉄炉が確認された開防遺跡(２)、古開Ⅱ遺跡(16)、後山遺跡(40)、元木山根Ⅱ遺跡(42)、1994年の調査で炭焼窯２基、1999年の調査で竪穴住居跡５軒が確認された大平遺跡(56)がある。

《参考文献》

秋田県『土地分類基本調査　五城目』1973（昭和48）年
秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（中央版）』1990（平成２）年
昭和町『昭和町史』1986（昭和61）年
五城目町『五城目町』1975（昭和50）年
井川町教育委員会『大野地遺跡発掘調査報告書』1988（昭和63）年
五城目町教育委員会『石崎遺跡発掘調査報告　第１－第３回合報』1975（昭和50）年
秋田県教育委員会『中谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』2001（平成13）年
秋田県教育委員会『秋田環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－大平遺跡－』1996（平成８）年
秋田県教育委員会『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』2001（平成13）年
秋田考古学協会『秋田考古学　昭和町特集号25』1965年（昭和40年）


西野遺跡
古代
縄文・弥生時代
（古代との複合遺跡は●で図示）
0
2 km
整池
大川
西野
石崎
谷地中
黒坪
保野子
八田大倉
坂本
飯田川
和田妹川
大久保
昭和
秋田市
豊川
井

第５図　周辺遺跡位置図

第１表　周辺遺跡一覧（１）

番号	遺跡名	所在地	種別	遺構、出土遺物等	時期
1	貝保	八郎潟町川崎字貝保89－３ほか	集落跡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、製鉄炉、土師器、須恵器、鉄製品	古代
2	開防	五城目町小池字開防49－２外	集落跡	井戸跡、土師器、須恵器、木製品	古代
3	石崎	五城目町大川下樋口字道ノ下10外	城柵跡	柵列、柱脚、陶硯、木製品等	古代
4	岩野山古墳群	五城目町上樋口字樽沢214外	古墳	鉄手太刀、毛抜太刀、円頭太刀、勾玉、石帯、刀子、鉄鏃、土師器、須恵器	古代
5	中谷地	五城目町大川谷地中字谷地６外	集落跡	堀立柱建物跡、板材列、河川跡、土師器、須恵器、木製品、板材、柱材ほか	古代
6	下村	井川町北川尻字下村24－１～24－３	遺物包含地	墨書須恵器	古代
7	飛塚Ⅰ	井川町坂本字飛塚24－１～24－50	遺物包含地	墨書土師器、土師器片、須恵器片	古代
8	新間Ａ	井川町黒坪字新間177、178	遺物包含地	縄文土器(晩期)、弥生式土器ほか	縄文・弥生
9	新間Ｂ	井川町黒坪字新間197	遺物包含地	縄文土器(晩期)、弥生式土器ほか	縄文・弥生
10	越雄	井川町黒坪字越雄16－１外	集落跡	竪穴住居跡、土器棺墓、弥生土器	弥生・古代
11	小泉	井川町黒坪字越雄３～５	遺物包含地	土師器片、須恵器片、丸玉	古代
12	羽根田	井川町蓬田字羽根田79－１、79－２	火葬墓	土師器壺(骨壺)、人骨	古代
13	野畑	井川町蓬田字野畑114－１～130	遺物包含地	縄文土器片、石鏃、石匙、石槌、石斧、石錘、石皿	縄文
14	南台	井川町八田大倉字南台	遺物包含地	骨鏃器(土師器、須恵器)	古代
15	大野地	井川町坂本字大野地300～305	遺物包含地	土坑、縄文土器(中期)、円筒下層式、石器、獣骨	縄文
16	古間Ⅱ	飯田川町和田妹川字古間241－１外	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器、土師器	縄文
17	鳥木沢	飯田川町飯塚字鳥木沢	遺物包含地	縄文土器(後期、晩期)	縄文
18	古間	飯田川町和田字古間250－１外	遺物包含地	須恵器杯	古代
19	松葉沢	飯田川町下虻川字松葉沢87、88	遺物包含地	縄文土器(中期、晩期)	古代・縄文
20	鹿来館	飯田川町和田妹川字鹿来20－１外	館跡	帯曲輪、空堀、竪穴住居跡、土師器陶磁器	縄文・古代中世・近世
21	大崎道添	昭和町大久保字北野大崎道添60～64	遺物包含地	土師器片	古代
22	狐森	昭和町大久保字北野大崎道添66	遺物包含地	縄文土器(後期・晩期)ほか	縄文
23	七ツ森	昭和町大久保字北野大崎道添23	遺物包含地	縄文土器(後期)、貝ほか	縄文
24	下畑	昭和町亀橋字下畑115	遺物包含地	須恵器片	古代
25	元木山Ⅰ	昭和町大久保字元木山根50	遺物包含地	縄文土器片(後期)、土師器、須恵器片	縄文・古代
26	元木山Ⅱ	昭和町豊川龍毛字開沢	遺物包含地	縄文土器片(後期)、土師器、須恵器片	縄文・古代
27	西野	昭和町豊川山田字家ノ上117－１外	集落跡	竪穴式住居、鍛冶炉、縄文土器片(後期)、石鏃、土師器、須恵器片、鉄滓	縄文・弥生古代
28	湯の沢Ⅰ	昭和町豊川山田字市の坪	遺物包含地	縄文土器片(前期)、須恵器片	縄文・古代
29	湯の沢Ⅱ	昭和町豊川山田字市の坪	遺物包含地	土師器片	古代
30	深田沢	昭和町豊川山田字深田沢	遺物包含地	須恵器片	古代
31	深田沢Ⅱ	昭和町豊川山田字深田沢	遺物包含地	土師器、須恵器	古代
32	千刈田	昭和町豊川龍毛字千刈田	遺物包含地	石鏃、須恵器片	縄文・古代
33	塩辛田	昭和町豊川龍毛字塩辛田５～８	遺物包含地	石刀	縄文
34	塔田Ⅰ	昭和町豊川槻木字塔田	遺物包含地	土師器、須恵器片	古代
35	塔田Ⅱ	昭和町豊川槻木字塔田60	遺物包含地	須恵器、土師器片	古代

第２表　周辺遺跡一覧（２）

番号	遺跡名	所在地	種別	遺構、出土遺物等	時期
36	塔田Ⅲ	昭和町豊川槻木字塔田12	遺物包含地	須恵器片	古代
37	槻木盛土墳	昭和町豊川槻木字塔田７	火葬墓	須恵器片、壺、葺石	古代
38	塔田Ⅳ	昭和町豊川槻木字塔田１～２	遺物包含地	土師器片、須恵器片	古代
39	大宮	昭和町豊川槻木字大富34	遺物包含地	須恵器壺	古代
40	後山	昭和町豊川龍毛字後山25－３外	集落跡	竪穴住居跡、溝跡、土器埋設遺構、縄文土器片（中期）、土師器、須恵器	縄文・古代
41	元木山根Ⅰ	昭和町大久保字元木山根	遺物包含地	剥片	縄文
42	元木山根Ⅱ	昭和町大久保字元木山根286外	遺物包含地	土師器、須恵器	古代
43	鳥巻Ⅰ	昭和町豊川槻木字鳥巻	遺物包含地	縄文土器片（前期、後期）、須恵器片	縄文・古代
44	鳥巻Ⅱ	昭和町豊川槻木字鳥巻35	遺物包含地	縄文土器片（中期、後期）、鉢、アスファルト付着、鉢型土器	縄文
45	真形尻	昭和町豊川槻木字真形尻31	遺物包含地	縄文土器片（中期）、鹿・鳥類骨	縄文
46	カラス沢	昭和町豊川槻木字カラス沢	遺物包含地	土師器片	古代
47	草生土沢Ⅰ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	土師器片	古代
48	草生土沢Ⅱ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	石匙	縄文
49	正戸尻Ⅰ	昭和町豊川槻木字正戸尻62	遺物包含地	須恵器片	古代
50	正戸尻Ⅱ	昭和町豊川槻木字正戸尻	遺物包含地	土師器、須恵器片	古代
51	寸白沢	昭和町豊川槻木字寸白沢	遺物包含地	須恵器片	古代
52	高野	昭和町豊川槻木字高野64	遺物包含地	須恵器片	古代
53	笛代沢	昭和町豊川岡井戸字中丸111他	遺物包含地	縄文土器片（晩期）、土師器、須恵器片	縄文・古代
54	アケビ沢台	昭和町豊川山田字市の坪	遺物包含地	縄文土器片（晩期）、土師器片	縄文・古代
55	羽白目	昭和町豊川上虻川字羽白目	望烽	烽舎跡、櫓跡、平窯跡、瓦、刀子、土師器須恵器、鉄器	古代
56	大平	秋田市金足岩瀬字松館大平28－５外	集落跡	竪穴住居跡、建物跡、土器埋設遺構、土器焼成遺構、炭焼窯跡、縄文土器、土師器、須恵器	縄文
57	上松館	秋田市金足岩瀬字上松館	遺物包含地	縄文土器	縄文
58	大清水台Ⅰ	秋田市金足大清水字大清水台73･74･75	遺物包含地	縄文土器	縄文
59	大清水台Ⅱ	秋田市金足大清水字大清水台63･64･65	遺物包含地	土師器、須恵器	古代
60	前山Ⅰ	秋田市金足岩瀬字前山７	遺物包含地	須恵器	古代
61	前山Ⅱ	秋田市金足岩瀬字前山	遺物包含地	須恵器	古代
62	北田	秋田市金足岩瀬字北田	遺物包含地	須恵器	古代
63	大沢	秋田市金足岩瀬字大沢	遺物包含地	縄文土器、赤褐色土器	縄文・古代
64	細長根Ⅰ	天王町天王字細長根	遺物包含地	土師器片	古代
65	細長根Ⅱ	天王町天王字細長根	遺物包含地	土師器片	古代

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

西野遺跡は八郎潟残存湖の南東岸、出羽丘陵の西部に位置する昭和町にあり、井川丘陵西部の末端部の南側緩斜面に立地する。南約500mには豊川が流れ、西側には国道７号線が、南側には町道が丘陵末端の段丘を分断して走っている。町道に接する南側は地山も含めて深く削平を受けている。

遺跡の現況は杉林である。調査区内の中央部には南から東へ農業用道路が走っている。

第２節　調査の方法

１．調査区の設定

調査区には４ｍ×４ｍの方眼を設定するグリット法を採用した。遺跡内に所在する工事用センター杭№21＋20を原点（ＭＡ50）とし、この原点から磁北方向に基準点を設定した。グリッド杭には東から西へ…ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ…というアルファベットと、南から北に向かって…49・50・51…の２桁の数字を付し、両者を組み合わせてグリット名称とした。

２．調査の方法及び記録作成

調査は確認調査の結果をうけて、表土除去を人力で行った。遺構は柱穴とその他の遺構を区別し、確認した順に番号を割り当て、精査の結果遺構でないと判断した場合はその番号を欠番とした。遺構の平面図・断面図はそれぞれ１／20の縮尺で作成し、遺構によっては１／10で作成した。遺跡全体の基本土層図はＭＡライン、46・55・60ラインで作成した。土層図は１／20の縮尺で作成し、色調・土質等の特徴を記載した。遺物は、遺構外出土についてはグリット内における位置を記録し、遺構内出土の遺物は番号を付けて取り上げた。鍛冶炉とその周辺遺構の微細な遺物は25㎝メッシュで土ごと取り上げた。

写真撮影は35㎜のモノクロおよびリバーサルフィルムを併用し、カラーネガフィルムも適宜使用した。

３．室内整理の方法

遺物は、縄文時代から平安時代にかけてのものが出土した。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土製品・石器・石製品および鉄製品・鉄滓等で55×34×15㎝のコンテナで54箱である。これらの遺物は洗浄し、グリット名・層位・出土年月日を注記した。土器は接合・復元作業を行い、実測図を作成した。鉄関連遺物は選別後、磁着度・メタル度・重量を測定した。鍛冶炉遺構付近の土は洗浄後0.8㎜・２㎜・４㎜のふるいで選別し、重量を測定した。

第３節　調査の経過

平成11年度

５月31日　テント設営。表土除去開始。

６月１日　表土除去。７日　遺構検出作業。９日　ＳＫ01検出、精査、完掘。10～11日遺構検出作業。調査終了。

平成12年度

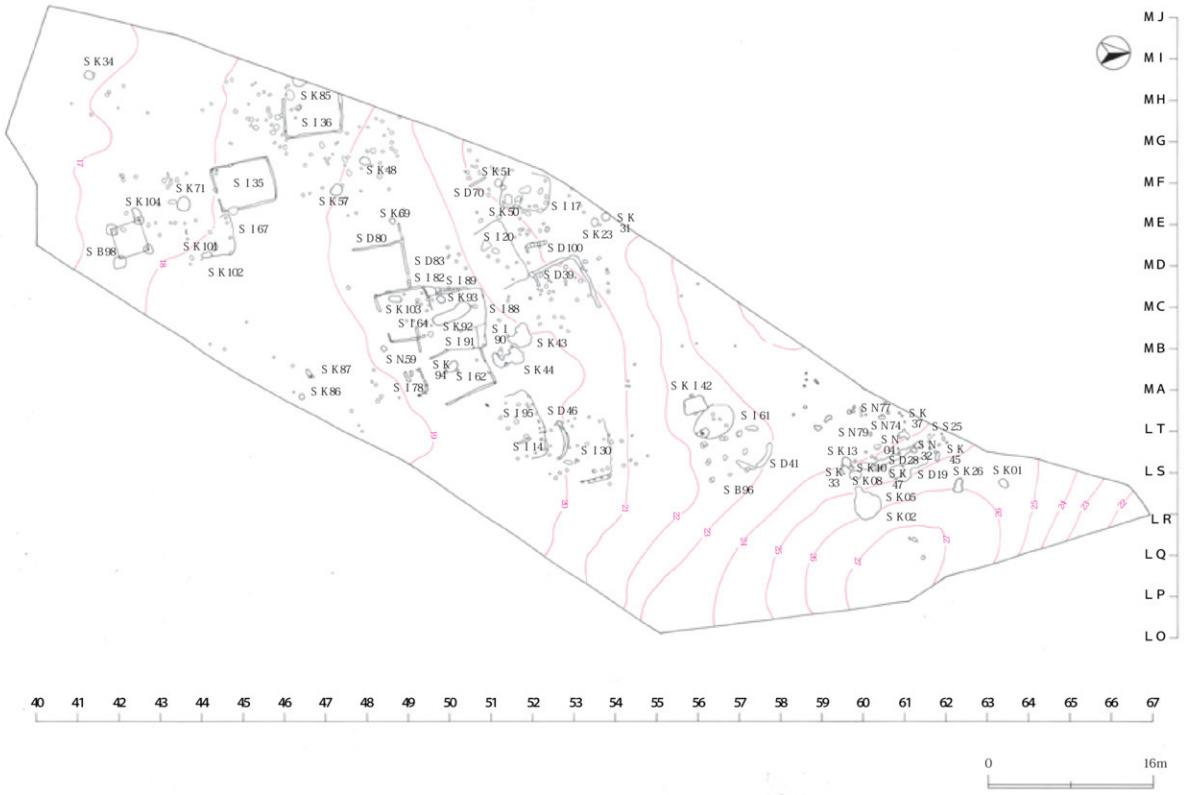
５月10日　昭和町公民館にて作業員説明会を行う。15日　機材搬入、資材の整理。16日　調査範囲内草刈り。17日　表土除去開始し、基本土層ベルト設定。18日　最北山頂部から精査を開始。ＬＴ58グリッドより鉄滓が出土。23日　調査区北西、遺物集中地域を精査開始。25日　ＭＢ48グリッドで焼土確認。26日　表土除去70％終了。

６月６日　作業員の健康診断を行う。７日　紡錘車が出土。ＳＩ17・18を確認。８日　羽口(内径約３㎝)が出土。９日　たたら研究会穴澤義功氏来跡。14日　ＳＳ25を検出。16日　昭和町教育委員会教育長桜庭次男氏来跡。22日　生涯学習センター「縄文ふれあい工房」の６名遺跡見学。
23日　ＳＳ25炉底部検出。

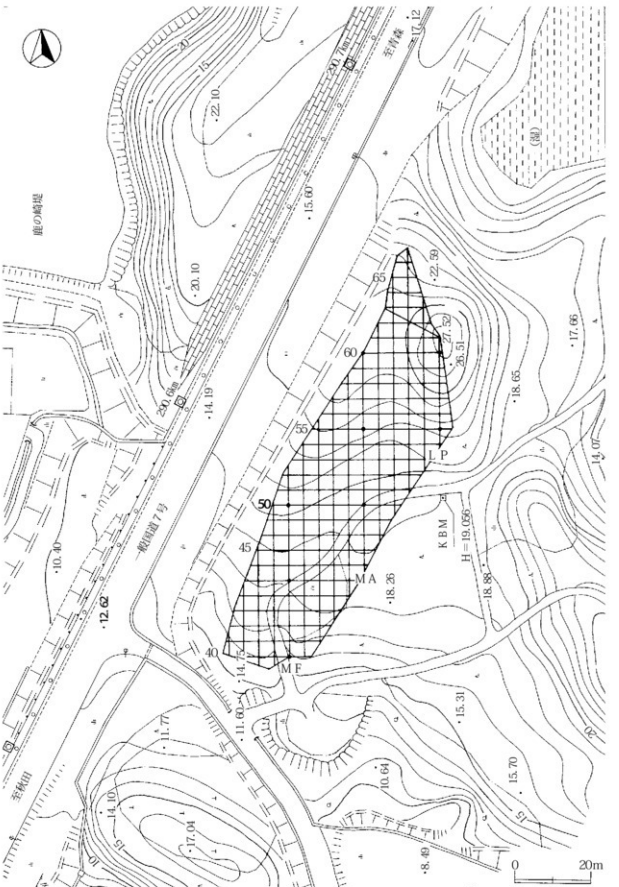
７月６日　ＳＩ20を完掘。７月14日　ＳＩ36の掘り下げ開始。17日　本日より小塚・佐々木非常勤職員調査参加。ＳＫＦ47完掘。21日　ＳＩ36のカマド、ＳＩ14の焼土、ＳＩ62・63・64を確認した。
24日　ＳＤ39完掘。26日　午前、羽城中学校１年生見学。27日　ＳＩ67確認、掘り下げ開始。
28日　ＳＫＩ42完掘。

８月３日　ＳＩ61は南側に土器埋設炉をもつ竪穴住居跡であることがわかる。８日　ＳＩ36完掘。調査区北部の全景写真撮影。９日　ラジコンヘリによる遺跡全景写真の空撮。ＳＳ25・ＳＤ39・ＳＩ64・78を完掘。８月10日　ＳＩ82・88・89・90の断面図作成。地形図作成。コンテナハウス整理。撤収作業を行う。

８月11日　ＳＩ82・88・89・90の平面図作成。地形図作成。調査を終了する。


MJ
MI
MH
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67
0
16m

第６図　遺構配置図



第７図　グリット設定図

第４章　調査の記録

第１節　基本層位

遺跡の基本層序は調査区南北のＭＡライン、東西の60・55・46ラインで確認した。

第Ⅰ層　黒褐色シルト質土(10Ｙ Ｒ2/3～10Ｙ Ｒ3/2)：調査区全体覆う旧表土である。

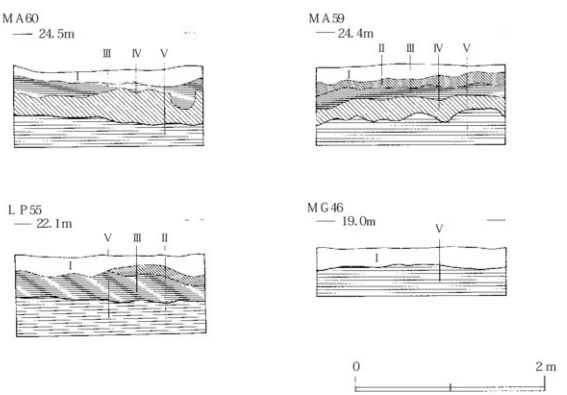
第Ⅱ層　黒褐色シルト質土(10Ｙ Ｒ2/2)～黒色土(10Ｙ Ｒ2/1)：土師器片、焼土ブロック、炭化物が混入。古代の生活面と遺物包含層である。

第Ⅲ層　暗褐色シルト質土(10Ｙ Ｒ3/3～10Ｙ Ｒ3/4)：北側の旧沢地形ではこの面で遺構を確認している。

第Ⅳ層　黒褐色シルト質土(10Ｙ Ｒ2/3)：出土密度は低いが縄文時代前期円筒下層様式の土器が出土しており、縄文前期の包含層である。

第Ⅴ層　褐色シルト質土(10Ｙ Ｒ4/6)～明黄褐色粘土質(10Ｙ Ｒ6/8)：地山である。

第Ⅱ～第Ⅳ層は旧沢地形部分でのみ確認される。深いところでは第Ⅰ～Ⅴ層まで60㎝である。そのほかでは60ライン以北は第Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ層、第Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ層、または第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層で、第Ⅱ層が堆積していない地区もある。55ライン以南の沢地形以外では第Ⅰ・Ⅴ層が確認され、約10～20㎝の厚さである。南側の平地では第Ⅰ層の旧耕作土のみで、縄文土器片・弥生土器片・土師器片・須恵器片が混在して出土している。



第８図　基本土層図

第２節　検出遺構と出土遺物

本調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１軒、古代の竪穴住居跡16軒、竪穴状遺構１基、掘立柱建物跡２棟、柱穴様ピット270基、鍛冶炉１基、土坑33基(このうち土器焼成遺構の可能性があるもの１基)、焼土遺構６基、溝10条を数える。

なお、竪穴住居跡の中でカマドを確認できなかったものについては切り合いの関係やその後の削平によると判断した場合竪穴住居跡として扱っている。また、柱穴様ピットは、建物跡に伴うと判断できなかったものについては一覧表で示している(第２表)。

出土した遺構の属する時期は不明確なものも多く含まれているため、竪穴住居跡以外は時代別ではなく、竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、柱穴様ピット、鍛冶炉、土坑、焼土遺構、溝跡の順番で、遺構の種別毎に掲載した。

１．竪穴住居跡

（１）縄文時代の竪穴住居跡

ＳＩ61(第９図、図版２)

調査区北側ＬＳ・ＬＴ55・56グリットに位置する。ＳＫＩ42の精査中に暗褐色土の円形の広がりとして確認した。上面で４×３ｍ、底面で3.6×2.3ｍの楕円形を呈する。壁は北側で高さ0.5ｍで外反して立ち上がるが、東側の壁はＳＫＩ42によって切られ、西側ではＳＢ96のＰ１の影響を受けている。

覆土は全体にしまりがあり、１・２層は基本層序のⅢ・Ⅳ層にそれぞれ由来し、３層は住居廃棄直後に当時の生活面であった表土が堆積したものと考えられる。底面は平坦で堅くしまる。柱穴はＰ１とＰ４が考えられ、Ｐ１は底面で直径20㎝、床面からの深さ29㎝、Ｐ４は直径17㎝、深さ17㎝で覆土はいずれも暗褐色土である。

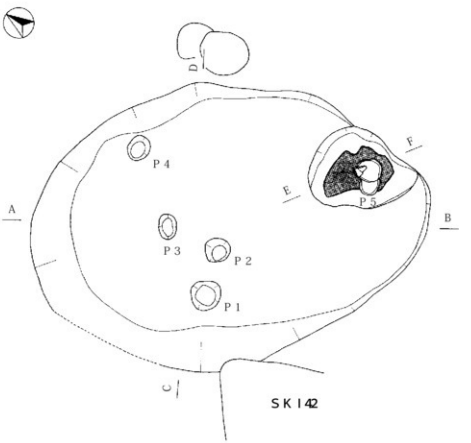
炉は南壁に接して設けられ、径１ｍほどの浅い掘り込みの中央に体部下半を欠く深鉢形土器(第50図12)を正立させた土器埋設炉で、掘り込みの底面は埋設土器を中心に径80㎝ほどの範囲に赤変硬化している。遺物は２層から縄文土器片32点、石器及び剥片が33点出土している。土器は器面の風化が激しいため時期を明らかにできないが、胎土中に繊維を混入したものもある。炉の埋設土器は体部上半が僅かにくびれ、体部中央に膨らみのある深鉢形土器で、結節のＬＲ＋ＲＬ原体による羽状縄文が施されてる。石器及び剥片の石質は頁岩が多いが、黒曜石の剥片も４点ある。石器(第49図31～34)には、石錐・掻器などがあり、いずれも素材剥片の先行剥離面を広く残している。

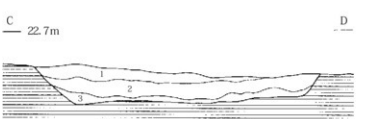
本住居の時期は炉の埋設土器から、縄文時代中期の大木８ｂ式期と考えられる。

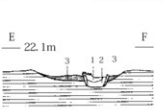
（２）古代の竪穴住居跡

ＳＩ14(第10・11図、図版４)

ＬＳ・ＬＴ51・52グリットに位置する。地山面で黒褐色土の長方形の落ち込みを確認した。ＳＩ92と切り合うが、覆土の状況と北壁検出状況から本住居跡が新しいと判断した。規模は、北西－西、南東－南の壁が失われているため確定できないが、本住居の柱穴(Ｐ２～Ｐ７・Ｐ12～Ｐ14・Ｐ17・Ｐ19)配置から、南北４ｍ以上、東西７ｍほどの方形を呈すると推定される。壁は緩やかに外傾して立







S 161
1　暗褐色土（10Y R3/4）炭化物粒１％混入
2　黒褐色土（10Y R2/3）地山粒１％混入
3　暗褐色土（10Y R3/3）地山粒１％混入
4　褐色土（10Y R4/4）壁崩壊土

S 161炉
1　にぶい赤褐色土（５Y R4/3）焼土
2　極暗褐色土（7.5Y R2/3）炭化物粒極小、焼土粒混入
3　暗赤褐色土（５Y R3/4）焼土

第９図　Ｓ 161竪穴住居跡

ち上がり、床面は平坦で堅くしまり、北壁に沿って長さ80cm、上面幅４～10cm、底面幅２～８cm、床面からの深さ５cmの壁溝がある。なお床面ほぼ中央のＰ８は形態から轆轤ピットの可能性が考えられる。覆土の堆積状況から本住居跡は焼失家屋と判断される。

遺物は土師器片、須恵器片、鉄製紡錘車(第67図12)、フイゴ羽口片(第67図13)、鍛冶滓(第67図９)、石器(第47図２・３)、弥生時代の甕形土器・浅鉢形土器の破片(第50図２・３)が出土している。

ＳＩ17(第12図)

ＭＥ・ＭＦ51・52グリッドに位置し、南側でＳＫ51に切られている。平坦な地山面で暗褐色土の長方形の落ち込みとして確認した。東西壁4.6m、南北壁3.6mほどの規模で、長方形を呈する住居跡である。確認面からの深さは20cmほどで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で堅くしまっており、床面中央から東壁の間に焼土や炭化物が広い範囲に確認された。壁に沿う直径20cm前後のピット(Ｐ１～Ｐ５)が柱穴と考えられるが、西壁に沿う床面では１個しか検出できなかった。また、北側床面にある直径25cm、深さ30cmのピット(Ｐ６)は周辺とピット壁が強く焼けて赤色硬化しており、検出当初、柱穴や轆轤ピット、あるいは鍛冶炉とも考えられたが、深さはや被熱状況からはいずれとも判断できなかった。

カマドは、東壁中央部に広がる焼土下で検出した直径0.65mほどの落ち込みが主体部で、４個の焼けた礫は、カマドの構築材と判断した。覆土の１層は基本層のⅡ層に由来する暗褐色土で土師器などの遺物が出土しており、２層と４層は住居周辺の地山土である褐色土を主体とし、床面直上の３層もⅡ層由来と考えられる暗褐色土である。覆土の堆積状況からは、本住居跡はⅡ層中から掘り込まれ、廃棄された後に当時の生活面である３層が堆積し、その後人為的に地山土で埋め戻されたものと考えられる。

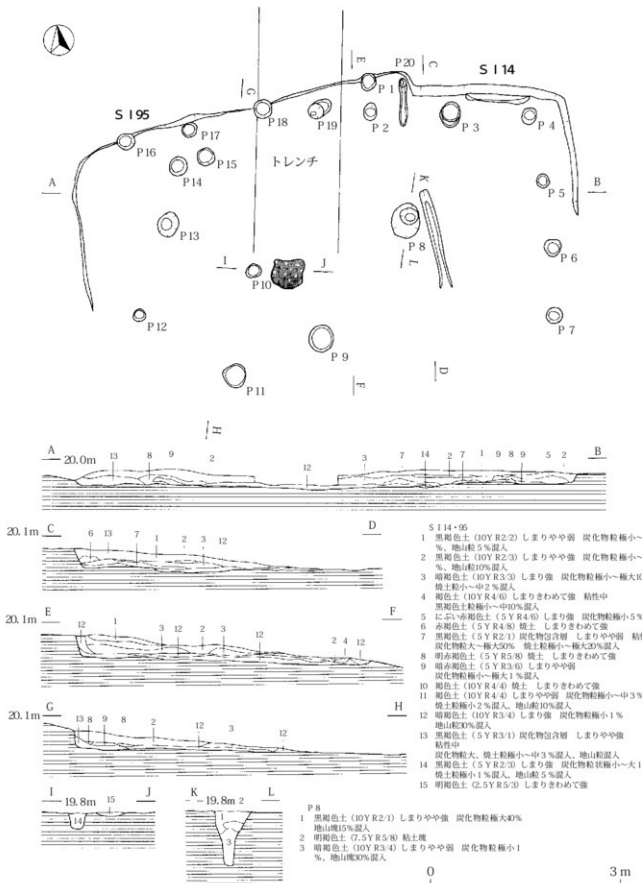
遺物は１層を中心に土師器24点、須恵器２点が出土しているが、いずれも破片である。

本住居跡の時期は覆土の堆積状況から古代で、さらに、床面採取の炭化物の年代測定で西暦1,020年の測定値が提示されていることから、平安時代中頃と判断される。

ＳＩ20(第13図)

ＭＣ・ＭＤ・ＭＥ50・51グリッドに位置する。地山面で長方形の暗褐色土のプランを確認した。南西部分が削平されているが東西6.14×南北３m以上の隅丸長方形を呈するものと推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦で堅くしまっている。ピットは５個(Ｐ１～Ｐ５)確認したが、平面的な位置からは本住居跡の柱穴とは考えがたい。カマドは確認できなかったが、中央西側に焼土を含む炭化物が入った落ち込みある。住居覆土は４層に分層し、堆積状況から人為的に埋め戻されたと判断した。

遺物は土師器破片、須恵器破片、鉄製品(第67図15)、鉄滓(第67図14)、石器(第47図７・８)、弥生土器片が出土している。



S I 14・95

1 黒褐色土（10Y R2/2）しまりやや弱　炭化物粒極小～中2％、地山粒５％混入
2 黒褐色土（10Y R2/3）しまりやや強　炭化物粒極小～中2％、地山粒10%混入
3 暗褐色土（10Y R3/3）しまり強　炭化物粒極小～極大10%、焼土粒小～中２％混入
4 褐色土（10Y R4/6）しまりきわめて強　粘性中
黒褐色土粒極小～中10%混入
5 にぶい赤褐色土（５Y R4/6）しまり強　炭化物粒極小５％混入
6 赤褐色土（５Y R4/8）焼土　しまりきわめて強
7 黒褐色土（５Y R2/1）炭化物包含層　しまりやや弱　粘性中
炭化物粒大～極大50%　焼土粒極小～極大20%混入
8 明赤褐色土（５Y R5/8）焼土　しまりきわめて強
9 暗赤褐色土（５Y R3/6）しまりやや弱
炭化物粒極小～極大１％混入
10 褐色土（10Y R4/4）焼土　しまりきわめて強
11 褐色土（10Y R4/4）しまりやや弱　炭化物粒極小～中３％混入
焼土粒極小２％混入、地山粒10%混入
12 暗褐色土（10Y R3/4）しまり強　炭化物粒極小１％
地山粒30%混入
13 黒褐色土（５Y R3/1）炭化物包含層　しまりやや強
粘性中
炭化物粒大、焼土粒極小～中３％混入、地山粒混入
14 黒褐色土（５Y R2/3）しまり強　炭化物粒状極小～大１％、焼土粒極小１％混入、地山粒５％混入
15 明褐色土（2.5Y R5/3）しまりきわめて強

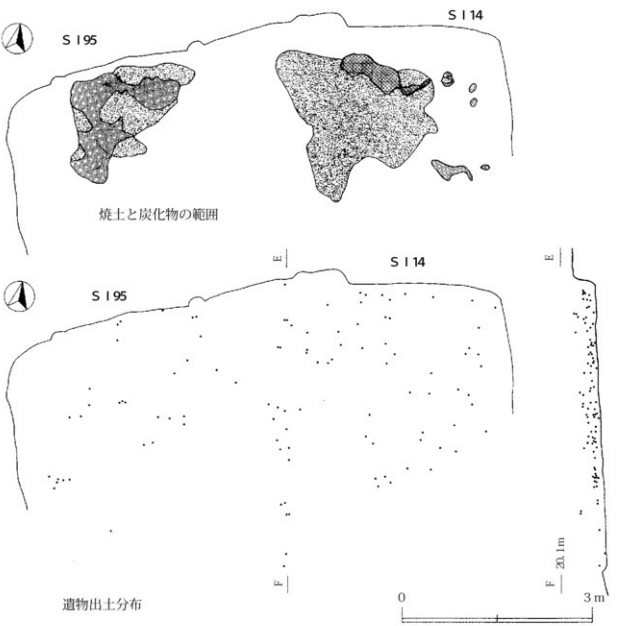
P 8
1 黒褐色土（10Y R2/1）しまりやや強　炭化物粒極大40%
地山塊15%混入
2 明褐色土（7.5Y R5/8）粘土塊
3 暗褐色土（10Y R3/4）しまりやや弱　炭化物粒極小１％、地山塊30%混入

0　3m

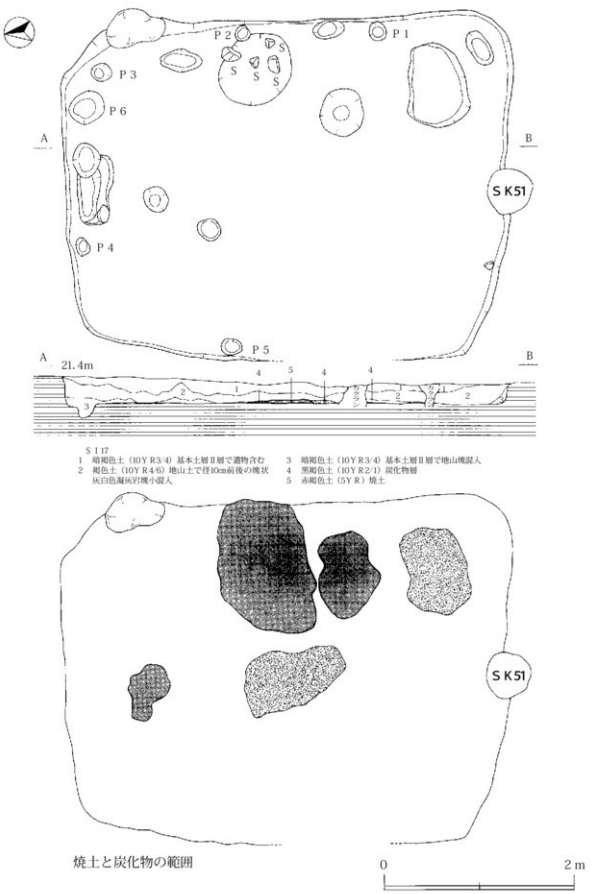
第10図　S I 14・95竪穴住居跡（１）

ＳＩ14・92柱穴一覧

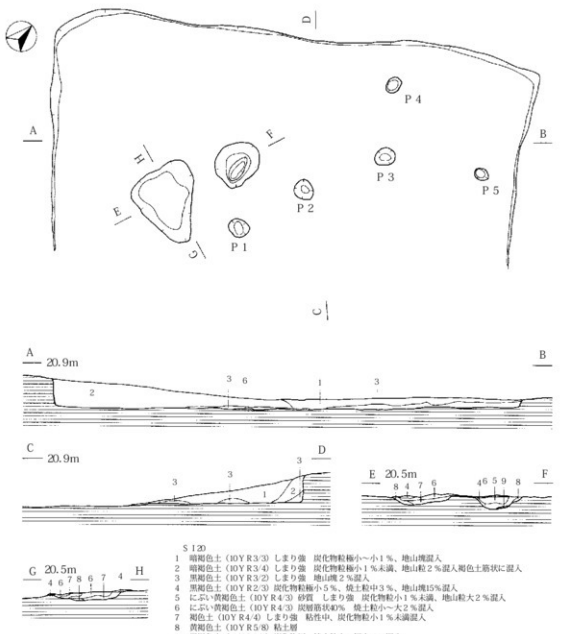
番号	開口部（cm）	底面径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	覆　土
P 1	22×20	18×16	47.2	19.34	黒褐色土（10Y R2/3）しまり強 炭化物粒極小1％　地山粒３％混入
P 2	22×16	12×10	36.7	19.30	黒褐色土（10Y R2/2）しまり中や強 炭化物粒極大１％混入
P 3	32×26	22×22	49.4	19.17	暗褐色土（10Y R3/4）しまり強 炭化物粒極小１％未満 焼土粒極小１％未満　地山粒10％混入
P 4	22×18	14×14	44.5	19.23	黒褐色土（10Y R2/2）しまり中や強 炭化物粒小１％　焼土粒極小１％ 地山粒10％混入
P 5	18×18	14×12	49.5	19.17	黒褐色土（10Y R2/2）しまり中や強 炭化物粒極小１％　焼土粒極小１％ 地山粒15％混入
P 6	22×22	14×14	44.6	19.20	黒褐色土（10Y R2/2）しまり中や強 炭化物粒極小１％　焼土粒極小１％ 地山粒20％混入
P 7	20×20	14×12	55.8	19.07	黒褐色土（10Y R2/3）しまり中や強 炭化物粒極小１％　地山粒25％混入
P 8	46×36	12×10	71.6	18.92	図中にあり
P 9	34×32	30×26	65.1	18.90	黒褐色土（10Y R2/3）しまり強 炭化物粒極大１％　地山粒10％混入
P10	22×20	16×14	20.6	19.44	黒褐色土（10Y R2/3）しまり強 炭化物粒大１％ 地山粒２％以下混入
P11	32×30	26×26	30.8	19.20	黒褐色土（10Y R3/4）しまり中や強 炭化物粒極小１％　焼土粒極小１％ 地山粒５％混入
P12	16×16	12×12	23.6	19.40	黒褐色土（10Y R2/3）しまり中や強 炭化物粒極小１％　地山粒20％混入
P13	32×26	16×16	31.6	19.33	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中や強 炭化物粒極大３％　焼土粒大３％ 地山粒１％以下混入
P14	26×24	16×16	34.6	19.26	黒褐色土（10Y R2/2）しまり中や強 炭化物粒３mm以下５％　焼土粒極小１％ 地山粒10％混入
P15	22×22	18×18	36.1	19.25	黒褐色土（10Y R2/2）しまり強 炭化物粒極小１％　焼土粒小１％ 地山粒２％混入
P16	22×22	18×16	44.3	19.28	黒褐色土（10Y R2/3）しまり強 炭化物粒極小１％　地山粒極大５％混入
P17	20×20	16×14	37.2	19.26	黒褐色土（10Y R2/3）しまり強 炭化物粒極小１％　焼土粒極小１％ 地山粒１％混入
P18	26×24	18×18	62.3	19.13	黒褐色土（10Y R2/2）しまり中や強 炭化物粒大１％　地山粒３％混入
P19	32×22	6×4	44.4	19.22	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中や強 炭化物粒極小１％
P20	40×40	6×4	41.6	19.49	黒褐色土（10Y R2/3）しまり強 炭化物粒極小１％混入　地山粒１％混入



第11図　ＳＩ14・95竪穴住居跡（２）



第12図　ＳＩ17竪穴住居跡



S I 20
1　暗褐色土（10Y R 3/3）しまり強　炭化物粒極小～小１％、地山塊混入
2　暗褐色土（10Y R 3/4）しまり強　炭化物粒極小１％未満、地山粒２％混入暗色土筋状に混入
3　黒褐色土（10Y R 3/2）しまり強　地山塊２％混入
4　黒褐色土（10Y R 2/3）炭化物粒極小５％、焼土粒中３％、地山塊15％混入
5　にぶい黄褐色土（10Y R 4/3）砂質　しまり強　炭化物粒小１％未満、地山粒大２％混入
6　にぶい黄褐色土（10Y R 4/3）炭層筋状40％　焼土粒小～大２％混入
7　褐色土（10Y R 4/4）しまり強　粘性中、炭化物粒小１％未満混入
8　黄褐色土（10Y R 5/8）粘土層
9　黒褐色土（10Y R 2/2）炭化物層　焼土粒大～極大５％混入

S I 20柱穴一覧

番号	開口部径（cm）	底部径（cm）	深さ（cm）	標高（m）	覆　　土
P 1	27×25	18×11	11.8	20.16	暗褐色土～褐色土（10Y R3/3～3/4）しまりあり 焼土粒極小１％　炭化物極小１％
P 2	28×24	13×8	12.9	20.18	暗褐色土～褐色土（10Y R3/3～3/4）しまりあり 焼土粒極小１％　炭化物極小１％　地山１％
P 3	27×22	14×10	5.0	20.26	暗褐色土（10Y R3/3）しまりあり　焼土粒極小５％ 炭化物極小１％
P 4	23×17	16×11	12.2	20.20	暗褐色土（10Y R3/3）しまりあり　炭化物極小１％
P 5	20×16	13×11	10.0	20.21	暗褐色土（10Y R3/3）しまりあり　炭化物極小１％ 地山２％

第13図　ＳＩ20竪穴住居跡

ＳＩ30(第14・15図、図版２)

ＬＲ・ＬＳ・ＬＴ52・53グリットに位置する。北から南に傾斜する地山面で、不整形の暗褐色土のプランを確認した。柱穴配置からは、Ｐ１～Ｐ６・Ｐ13・Ｐ20～Ｐ23・Ｐ25・Ｐ27・Ｐ28で構成される住居(ＳＩ30)と、Ｐ７～Ｐ９・Ｐ12を結ぶラインを東壁とする住居、Ｐ14～Ｐ17を結ぶラインを東壁とする住居の３軒が重複する可能性がある。ＳＩ30の規模と形態は、柱穴配置から、南北3.5m×東西3.5mの方形を呈する住居と推定される。覆土は北壁付近だけに確認されただけで、７層に分層したものの、複数の住居の新旧関係については、明確にできなかった。覆土４層は焼土、５～７層が炭化物を多量に含む層である。北側のみに残る壁はやや外傾して立ち上がり、床面はほぼ平坦で堅くしまる。カマドは検出できなかったが、南東の床面に焼土が確認され、南側に炭化物の入った楕円形の落ち込みがある。住居南側のＳＤ46との新旧関係も不明である。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、石器(第47図９)が出土している。

ＳＩ35(第16・17図、図版３)

ＭＥ・ＭＦ44・45グリットに位置する。地山面で方形の暗褐色土のプランとして確認した。ＳＫＰ280・297と切り合うが本住居跡が古い。規模は、南北5.8m×東西4.5mの隅丸方形を呈し、主軸方向はＮ－15°Ｗである。壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦で堅くしまっている。壁溝は、壁に沿って四方に巡るが、南側で空いている部分があり、住居の入り口と考えられる。柱穴は各コーナー(Ｐ１～Ｐ４)で確認したが、ほかに柱穴と考えられるピットは確認できなかった。カマドは無い。床面直上で炭化材や焼土の広がりが認められたことから、本住居跡は焼失家屋と判断される。

遺物は、底部に木葉痕が残る小形の土師器甕(第52・53図32～37)のほか須恵器蓋・坏・甕(第52図27～31)、石器(第47・48図10～22)、弥生土器が出土している。

ＳＩ36(第18・19図、図版４)

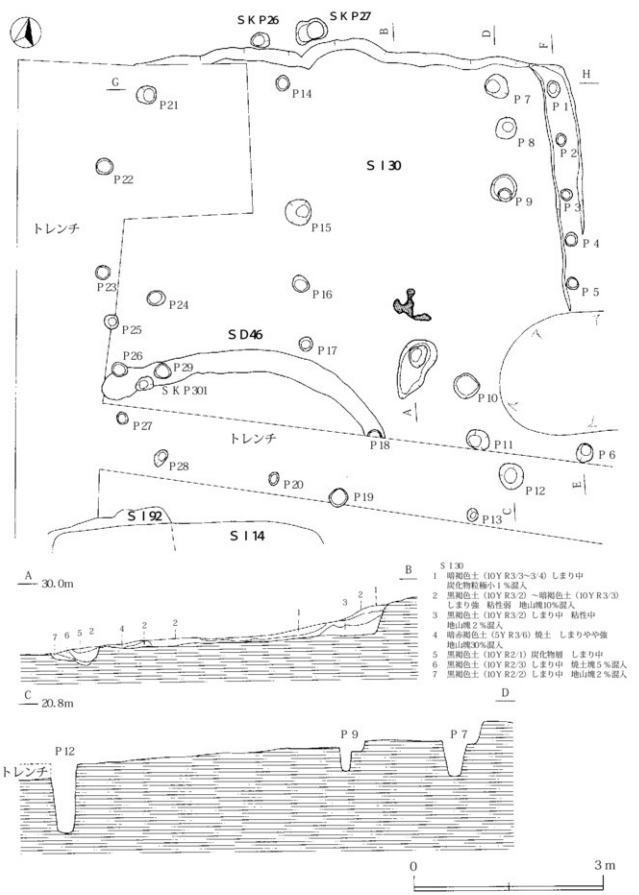
ＭＧ・ＭＨ46・47に位置し、地山面で黒褐色の方形プランとして確認し、ＳＫ85と切り合うが本住居が新しい。西側の一部は調査区外となっているが、規模は、北壁の柱穴位置(Ｐ１・Ｐ２)が壁のほぼ中央と考えると、一辺4.5mの方形を呈すると推定される。確認面からの深さは10～45cm、床面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。壁溝は、上面幅10～20cm、底面幅６～10cm、床面からの深さ４～17cmで、カマド付近で途切れる。柱穴は、北西隅(Ｐ３・Ｐ４)と南西隅(Ｐ５・Ｐ６)でそれぞれのコーナーを挟むように２個一組あり、北壁の中央部と考えられる位置にも２個の柱穴(Ｐ１・Ｐ２)がある。

カマドは南壁寄りにあり、径80cm、深さ30cmの落ち込みに、土師器甕が支脚として用いられている。床面中央部からやや南寄りで、径50～60cm、深さ30cmの底面が加熱により赤色硬化した落ち込みがあるが、性格は不明である。覆土１・２層の赤褐色焼土はカマド上部の崩壊土と考えられ、その他は人為的に埋めもどされたものと判断した。

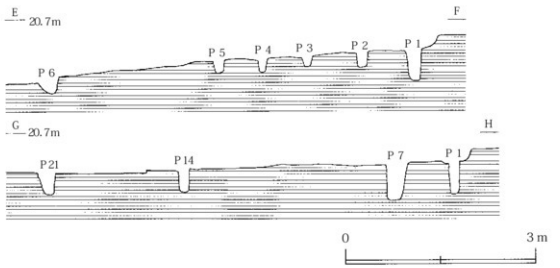
遺物は床面から、土師器甕(第53図40)、須恵器坏(第53図38・39)、炉壁・鍛冶滓・鉄製品(第67図16～18)が、覆土中からは縄文土器(第50図７)、弥生土器(第50図８・９)、石器が出土している。

ＳＩ62(第20・21・27図)

ＬＴ49・50、ＭＡ49・50・51、ＬＪ50に位置する。地山面で不整形な暗褐色土のプランを確認した。ＳＩ90・91、ＳＫ94と重複しており、覆土の堆積状況から本住居跡がＳＩ90・91より古く、ＳＫ94と



第14図　Ｓ１30竪穴住居跡（１）



ＳＩ30柱穴一覧

番号	開口部径（cm）	底面径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	覆　土
P 1	22×18	14×10	42.0	19.90	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒５％混入
P 2	18×14	12×10	20.9	20.07	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒５％混入
P 3	16×16	10×10	15.8	20.09	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　粘性中　地山粒５％混入
P 4	20×18	12×12	18.7	20.02	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　粘性中　地山粒５％混入
P 5	16×14	12×12	20.8	19.99	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　焼土粒極小１％未満　地山粒５％混入
P 6	26×22	14×14	17.2	19.74	黒褐色土（10Y R2/3）地山粒50％混入　根より撹乱を受けている
P 7	34×30	18×18	44.8	19.82	暗褐色土（10Y R3/3）しまり中　地山粒５％混入
P 8	28×28	14×14	32.8	19.96	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒１％混入
P 9	34×36	28×28	31.8	19.89	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒５％混入
P10	34×36	26×28	11.9	19.94	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　炭化物粒極小１％
P11	32×28	18×14	35.7	19.68	黒褐色土（10Y R2/3）しまり中　地山粒50％混入
P12	36×32	20×18	77.1	19.10	黒褐色土（10Y R2/3）しまり中　炭化物粒極小１％　地山粒25％混入
P13	16×16	8×8	14.1	19.66	暗褐色土（10Y R3/4）しまり強
P14	20×18	14×14	29.8	19.91	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒５％混入
P15	34×34	16×16	49.0	19.73	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒５％混入
P16	22×22	16×14	11.2	20.08	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒大30％混入
P17	18×18	12×12	12.9	20.01	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒大30％混入
P18	18×７	16×７	12.2	19.85	黒褐色土（10Y R3/4）しまりやや強　地山粒５％混入
P19	26×24	20×20	21.6	19.64	黒褐色土（10Y R2/3）しまりやや強　炭化物粒極小１％　地山粒30％混入
P20	18×12	12×８	8.8	19.79	暗褐色土（10Y R3/4）しまり強
P21	26×24	16×14	27.8	19.91	黒褐色土（10Y R2/3）しまりやや強　地山粒５％混入
P22	22×22	20×22	25.1	20.04	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒５％混入
P23	20×20	14×16	14.6	19.92	黒褐色土（10Y R2/3）しまり中　地山粒極５％混入
P24	24×20	18×14	15.5	19.97	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　地山粒５％混入
P25	20×18	10×10	25.7	19.84	黒褐色土（10Y R2/3）しまり中　地山粒25％混入
P26	20×20	14×14	23.0	19.79	黒褐色土（10Y R2/3）しまり中　地山粒25％混入
P27	16×16	12×10	9.2	19.85	暗褐色土（10Y R3/4）しまり中　炭化物粒中40％　地山粒小20％混入
P28	24×14	12×10	41.0	19.51	黒褐色土（10Y R2/3）しまり中　地山粒１％混入
P29	22×20	18×16	5.5	19.90	黒褐色土（10Y R2/2）しまり強　炭化物粒極小１％混入

第15図　ＳＩ30竪穴住居跡（２）

は同時期かもしくは新しいものと判断した。南と北西側の壁は削平されているが、壁や壁溝から南北5.2m以上×東西4.8mの方形を呈する住居と推定される。確認面からの深さは10cmほどで、壁は床面から垂直に立ち上がり、床面は平坦で堅くしまっている。壁溝は、東西と北側の一部で確認され、幅10～20cm、深さは30cmで、本来は壁に沿って巡っていたものと考えられる。柱穴は、北東隅（Ｐ１）と北壁のほぼ中央（Ｐ２）であるが、ほかには検出できなかった。カマドの位置も不明である。

北壁沿いに焼土・炭化物の堆積層があり、中央部の焼土層下には並列する炭化材が検出されたことから、本住居跡は消失家屋と考えられる。

遺物は、口縁部に沈線や段がみられる大形の土師器甕（第54図48～51）、須恵器坏・甕（第54図43～47）、砥石（第67図19）、石器（第49図35～38）、縄文土器、弥生土器（第51図13～22）が出土している。

ＳＩ64(第21・22・27図)

ＭＢ・ＭＣ48・49グリットに位置する。地山面で暗褐色土の不整形プランを確認した。ＳＩ82・90・ＳＤ83・ＳＫ103と重複するが、ＳＩ82・ＳＤ83より新しく、ＳＩ88より古い。規模は一辺4.8mで、方形を呈している。確認面からの深さは20cmほどで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。

壁溝は、幅４～６cm、床面からの深さ２～10cmで、壁に沿って巡るが、南側で空いている部分があり、入り口の可能性がある。柱穴は、北西隅(Ｐ10)、南西隅(Ｐ11・12)、南東隅(Ｐ13)にあるが、主柱穴は確認できない。床面の中央から南西にかけて焼土が広く堆積していることから、本住居跡は焼失したものと判断される。

遺物は土師器甕(第55図54)のほかボタン状のつまみを持つ須恵器蓋(第55図52・53)が出土している。

ＳＩ67(第23図)

ＭＤ・ＭＥ43・44に位置する。北側と西側の壁を確認したが、中央から南側にかかけては削平を受けている。ＳＫ101・102と重複しているが、本住居跡との新旧関係は確認できなかった。規模と平面形は、残存する北壁と西壁の一部と、柱穴配置(Ｐ５・Ｐ７～Ｐ11)から南北4.4m×東西４mの長方形を呈するものと推測される。確認面からの深さは北側で10cmほどで、壁は外傾しつつ立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝とカマドは検出されなかった。覆土は北側のみに黒褐色土が堆積していただけである。

遺物は出土していない。

ＳＩ78(第24図、図版５)

ＬＴ・ＭＡ48・49グリットに位置する。全面にわたって削平を受けており、わずかに北側の壁溝と焼土面を確認したにすぎず、規模と平面形などについては不明である。

ＳＩ82(第26・27図)

ＭＢ・ＭＣ48・49グリットに位置する。暗褐色土の落ち込みとして確認したが、ＳＩ64・88・89・90と複雑に重複し、ＳＩ89よりは新しく、ＳＩ64・88・90より古い。北西壁と南西壁の一部を認めただけで、規模や平面形などについては不明である。確認面からの深さは15cmほどで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。

遺物は出土していない。

ＳＩ88(第26・27図)

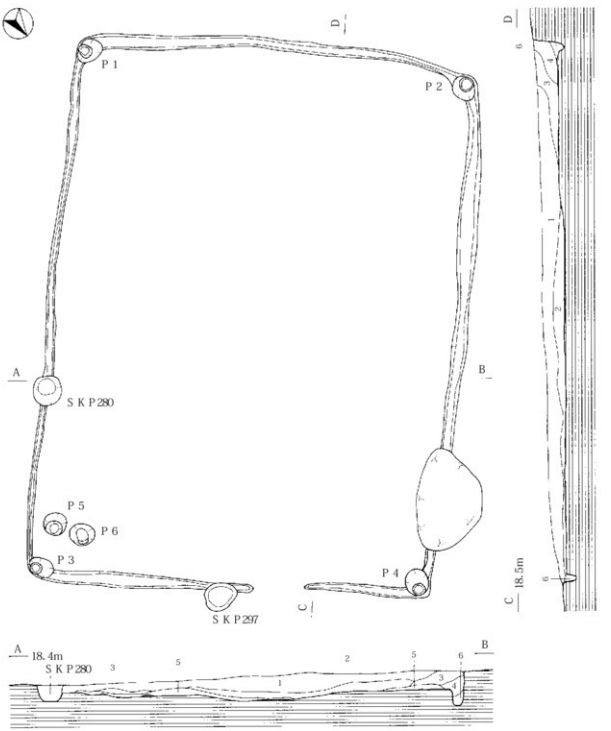
ＭＢ・ＭＣ49・50グリットに位置する。地山面で暗褐色土の落ち込みを確認し、ＳＩ64・82・89・90・91、ＳＫ92・93などと重複するが、本住居跡が最も新しい。規模と平面形は北壁と西壁から、南北5.3m×東西3.3mの長方形を呈するものと推測される。確認面からの深さは30cmで、現存する壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦で堅くしまっている。柱穴やカマドと壁溝は確認できなかった。

遺物は覆土から土師器・須恵器片や石器などが出土している。

ＳＩ89(第26・27図)

ＭＣ49・50グリットに位置する。ＳＩ88の精査中に西壁の一部を確認した。ＳＩ82・88と重複するが、本住居跡が古い。床面はほぼ平坦で堅くしまり、壁溝は幅12cm、底面からの深さは７cmほどである。

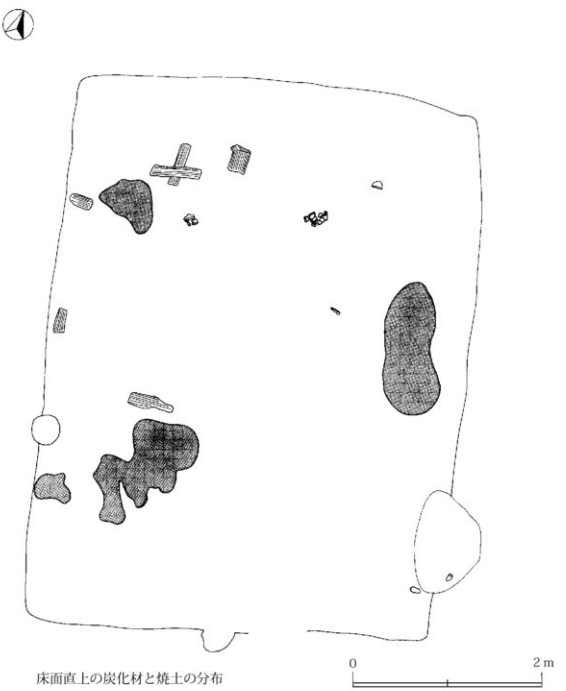
遺物は出土していない。



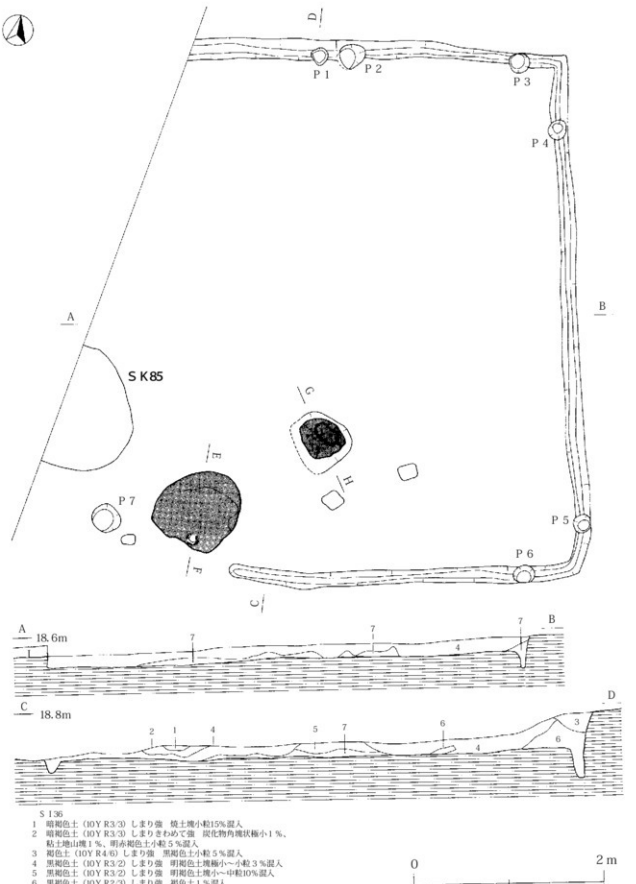
S I 35
1　暗褐色土（10Y R 3/3）しまりきわめて強　炭化物粒小量混入
2　褐色土（10Y R 4/4）しまり強　粘性弱　炭化物粒１％、地山粒１％混入
3　にぶい黄褐色土（10Y R 5/4）しまり中　炭化物粒極小　焼土粒１％混入
4　褐色土（10Y R 4/4）しまりやや強　粘性弱　炭化物粒１％、地山粒30％混入
5　黒褐色土（10Y R 2/1）しまりきわめて強　粘性中　炭化物粒極小１％　焼土粒１％混入
6　暗褐色土（7.5Y R 3/3）しまり強　粘性弱　炭化物粒１％未満、地山粒５％混入

0　2 m

第16図　ＳＩ35竪穴住居跡（１）



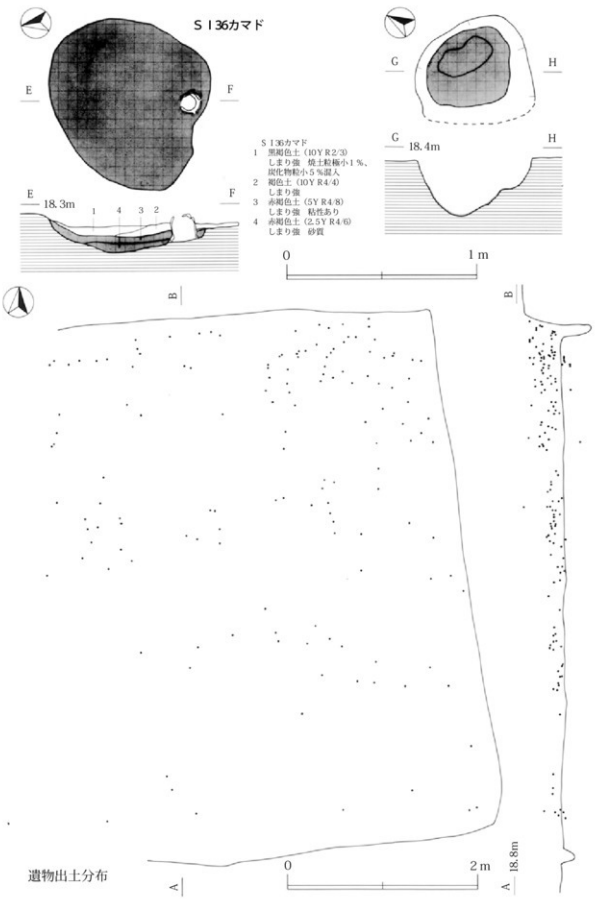
第17図　ＳＩ35竪穴住居跡（２）



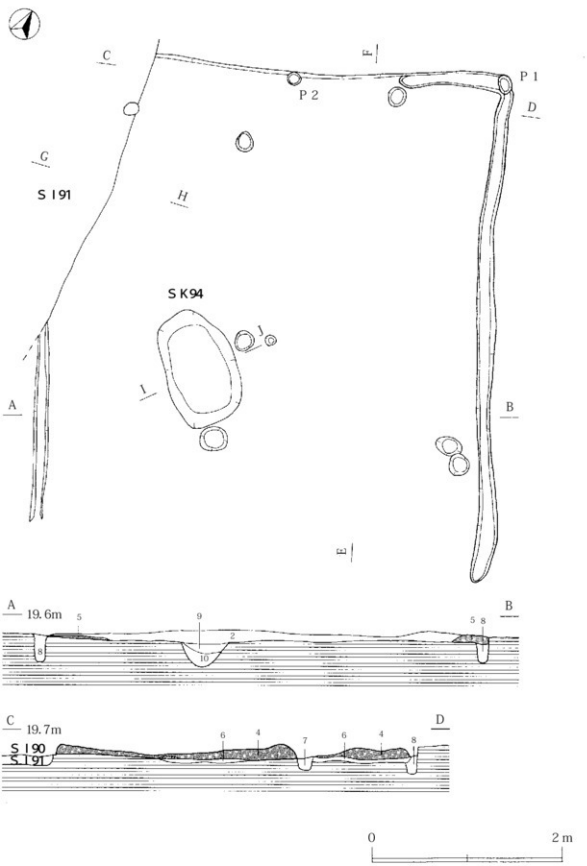
S I 36
1　暗褐色土（10Y R3/3）しまり強　焼土塊小粒15%混入
2　暗褐色土（10Y R3/3）しまりきわめて強　炭化物角塊状極小１%、
　粘土地山塊１%、明赤褐色土小粒５%混入
3　褐色土（10Y R4/6）しまり強　黒褐色土小粒５%混入
4　黒褐色土（10Y R3/2）しまり強　明褐色土塊極小～小粒３%混入
5　黒褐色土（10Y R3/2）しまり強　明褐色土塊小～中粒10%混入
6　黒褐色土（10Y R2/3）しまり強　褐色土１%混入
7　黒褐色土（10Y R3/2）しまり強　褐色土極小粒３%混入

0　2 m

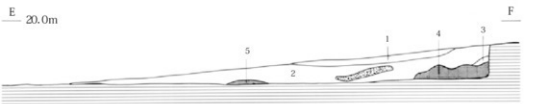
第18図　ＳＩ36竪穴住居跡（１）

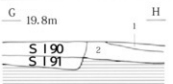


第19図　ＳＩ36竪穴住居跡（２）

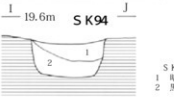


第20図　ＳＩ62竪穴住居跡（１）　ＳＫ94土坑





S I 62
1　黒褐色土（10Y R2/3）炭化物粒含（自然流入土）地山塊含
2　暗褐色土（10Y R3/3）しまり強　炭化物粒極小～小３％、焼土粒極小～小１％混入
3　暗褐色土（5Y R3/6）焼土　しまり強　炭化物粒極小２％、焼土粒20%混入
4　赤褐色土（5Y R4/8）・明赤褐色土（5Y R5/8）・暗赤褐色土（5Y R3/6）焼土　しまりきわめて強
5　明赤褐色土（5Y R5/8）焼土　しまり強　炭化物粒小10%混入
6　暗褐色土（7.5Y R3/3）しまりやや強　焼土塊極小～大15%混入
7　暗褐色土（10Y R3/4）しまりやや強
8　黒褐色土（10Y R2/2）しまりやや強　炭化物粒極小～小５％、地山塊大１％未満混入

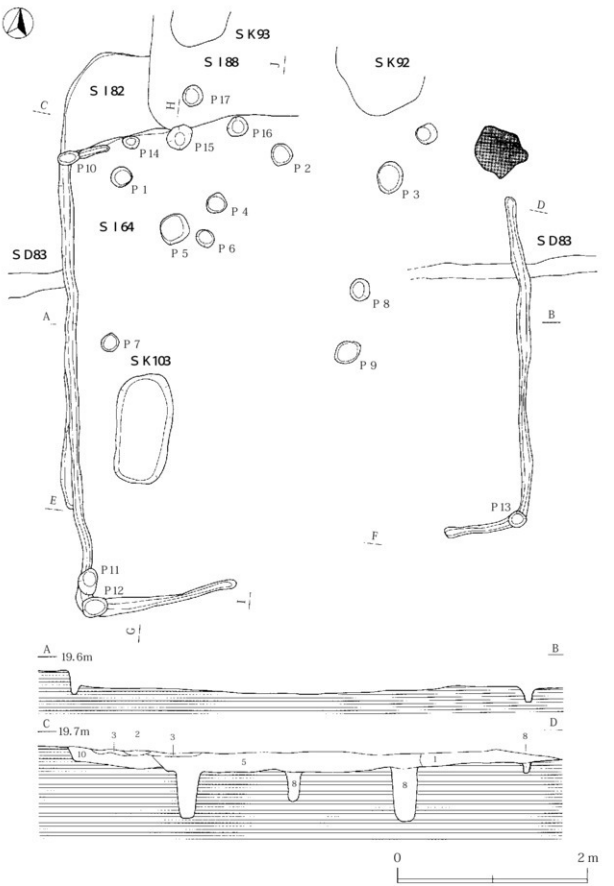


S K94
1　暗褐色土（10Y R3/3）しまり中　炭化物粒極小１％、焼土粒極小１％混入
2　黒褐色土（10Y R2/2）しまり強　炭化物粒小１％、焼土粒極小１％、地山粒15%混入

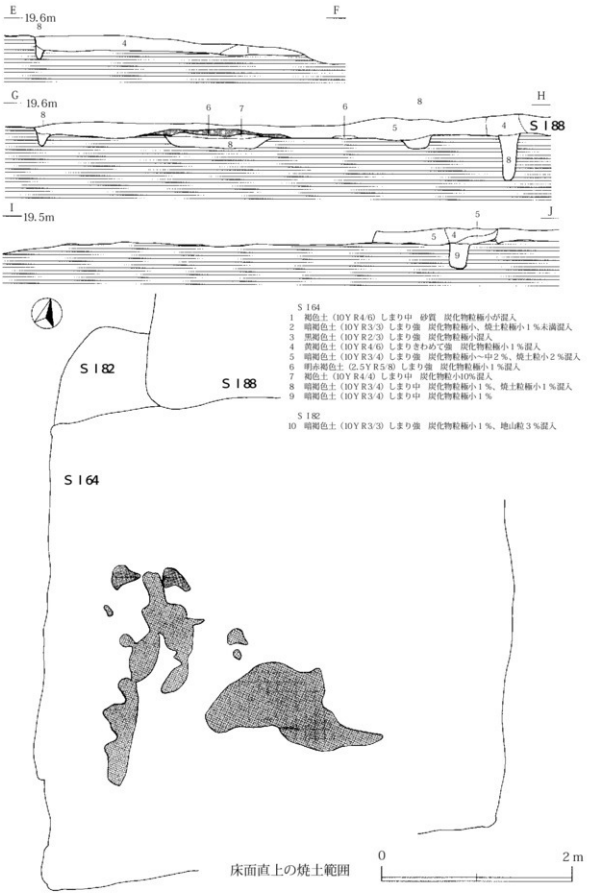
床面直上の炭化材と焼土の分布

0　2m

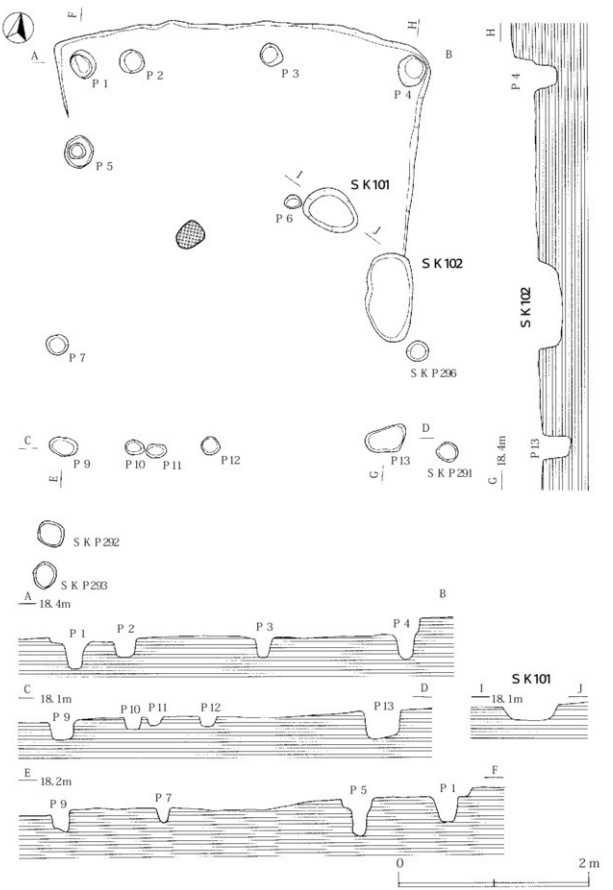
第21図　S I 62竪穴住居跡（２）



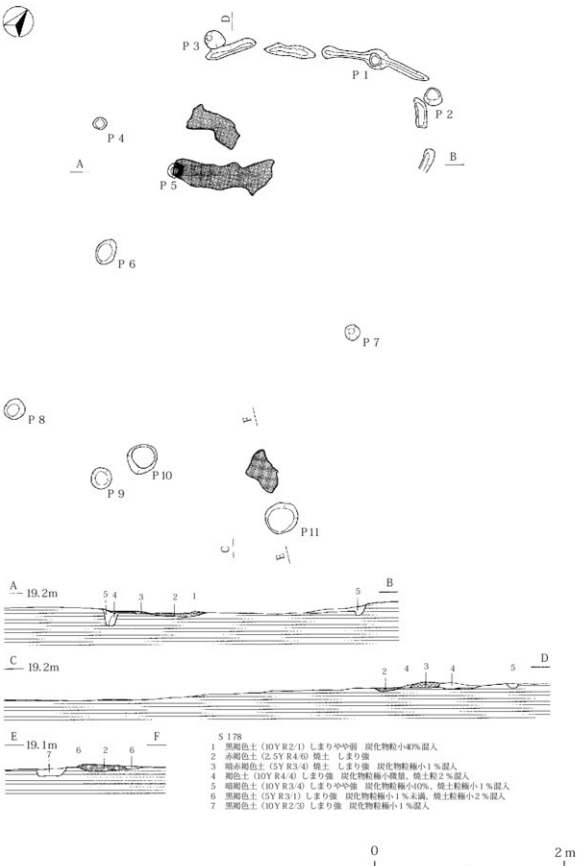
第22図　ＳＩ64・82竪穴住居跡（１）　ＳＫ103土坑



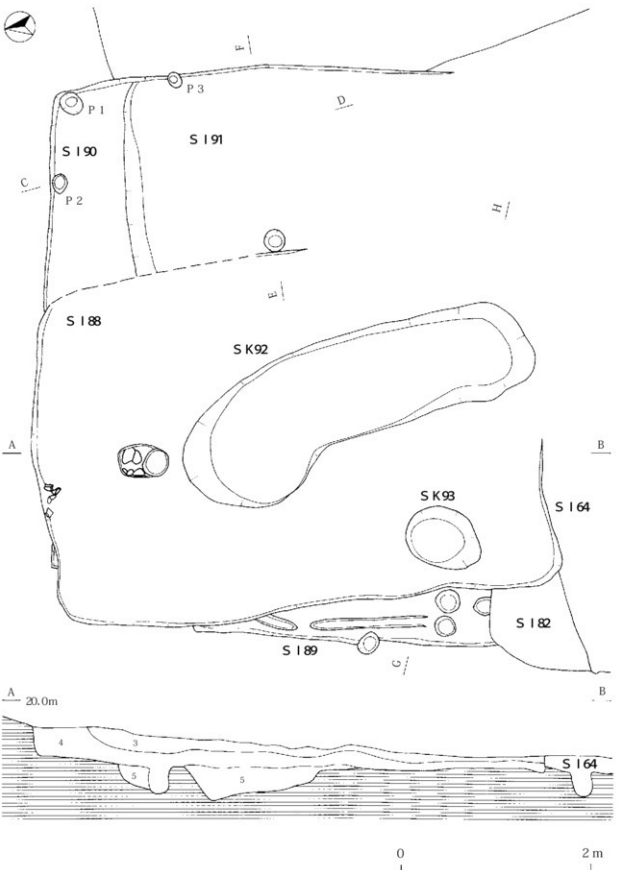
第23図　S164・82竪穴住居跡（２）



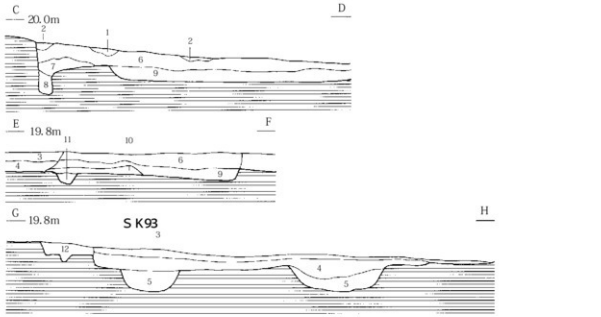
第24図　ＳＩ67竪穴住居跡　ＳＫ101・102土坑



第25図　ＳＩ78竪穴住居跡

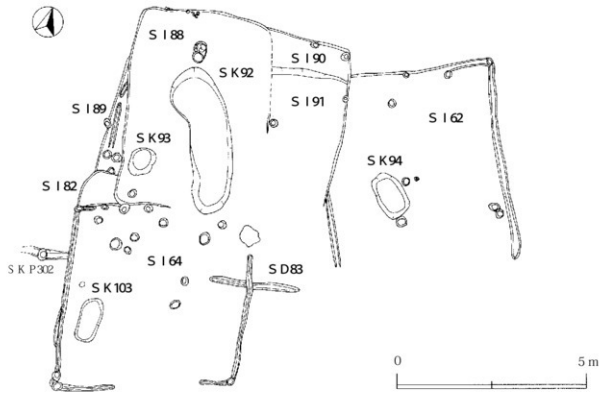


第26図　ＳＩ88・89・90・91竪穴住居跡（１）　ＳＫ92・93土坑



S188・89・90・91SK92・93
1　褐色土（10Y R4/4）
2　黒褐色土（10Y R2/2）しまり強　炭化物粒小地山塊含
3　黒褐色土（10Y R2/3）しまり強　炭化物粒焼土粒極小１％、地山塊１％混入（S188覆土）
4　暗褐色土（10Y R3/3）しまり強　炭化物粒焼土粒、地山塊多量に含む（S188覆土）
5　暗褐色土（10Y R3/4）しまり強　炭化物粒大１％、地山塊20%混入（SK92・93覆土）
6　暗褐色土（7.5Y R3/3）しまり強　炭化物粒極小１％、地山塊10%混入（S190覆土）
7　黒褐色土（10Y R2/3）しまり中　炭化物粒・地山粒多量に混入（S190覆土）
8　黒褐色土（10Y R2/3）＋褐色土（10Y R4/6）しまりなし、炭化物粒多量に混入（S190柱穴覆土）
9　黒褐色土（10Y R2/3）しまり強　地山塊小20%混入（S191覆土）
10　黒色土（10Y R2/1）しまり強　炭化材多量に含む（S191覆土）
11　黒褐色土（10Y R2/3）＋褐色土（10Y R4/6）（S191柱穴覆土）
12　黒褐色土（7.5Y R3/2）しまり強　炭化物粒極小１％、地山塊１％（S188覆土）

第27図　S188・89・90・91竪穴住居跡（２）



第28図　竪穴住居跡集中区

ＳＩ90（第26・27図）

ＭＡ・ＭＢ49・50グリッドに位置する。ＳＩ62・91の精査中に、北東隅を中心として北壁・東壁の一部と、ＳＩ88北壁の西側に北西隅を確認した。ＳＩ62・88・91と重複し、ＳＩ62・91より新しく、ＳＩ88より古い。規模は、南北4.2m以上×東西５mの方形を呈するものと推定される。北側での確認面からの深さは30cmほどで、壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦で堅くしまっている。柱穴は、北東隅（Ｐ１）、北壁（Ｐ２）と東壁（Ｐ３）にある。

遺物は土師器・須恵器片、石器剥片が出土している。

ＳＩ91（第26・27図）

ＭＢ49・50グリットに位置する。ＳＩ90の床面を精査中に地山塊を多量に含む黒褐色土の落ち込みを確認した。ＳＩ62・88・90、ＳＫ92と重複し、ＳＩ62より新しく、ＳＩ88・90より古い。ＳＫ92との新旧関係は確認できなかった。北壁と東壁の一部を検出しただけで、規模は明確でないが方形を呈するものと推定される。覆土は２層に分層され、いずれもＳＩ90構築の際に埋められたものと考えられる。

本住居の規模と平面形は不明である。

ＳＩ92（第10・11図）

ＬＳ51・52、ＬＴ51・52グリットに位置し、ＳＩ14と重複しているが本住居跡が古い。規模は東西4.78m×南北2.4m以上で、確認面からの深さは北側で24cmである。底面はほぼ平坦で堅くしまり、北壁は外傾して立ち上がる。柱穴は北壁に沿うＰ１・Ｐ18・Ｐ16を確認した。カマドは確認していない。

２．掘立柱建物跡

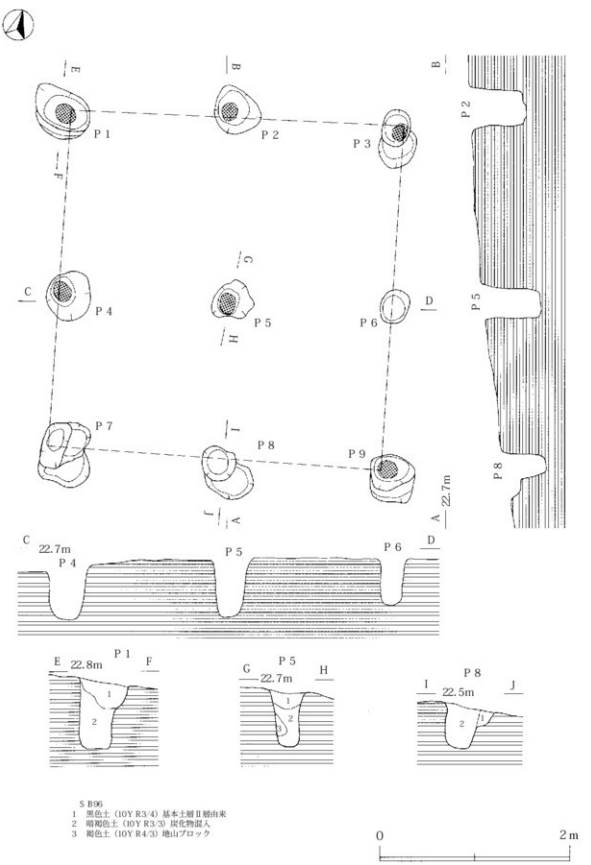
ＳＢ96（第28図）

ＬＴ・ＬＳ56・57グリッドに位置している。北から南に傾斜する地山面で９基の柱穴プランを確認した。桁行２間、梁行２間の総柱の掘立柱建物跡で、建物規模は3.6m×3.6mの正方形を呈し、柱間距離は1.8mである。柱穴掘形は北西隅柱では、40cm×60cmほどの楕円形、他は直径40cmの円形である。確認面からの深さは50～70cmで、６基で直径20cmほどの柱アタリが認められたが、柱痕跡は無く、全て柱が抜き取られている。掘形内覆土は２層に分層され、１層は地山である褐色土のブロックが混入し、しまりがあり、いずれも柱抜き取り後に埋め戻されたものと判断される。２層は、古代の遺物包含層である基本層位のⅡ層が自然流入したものである。

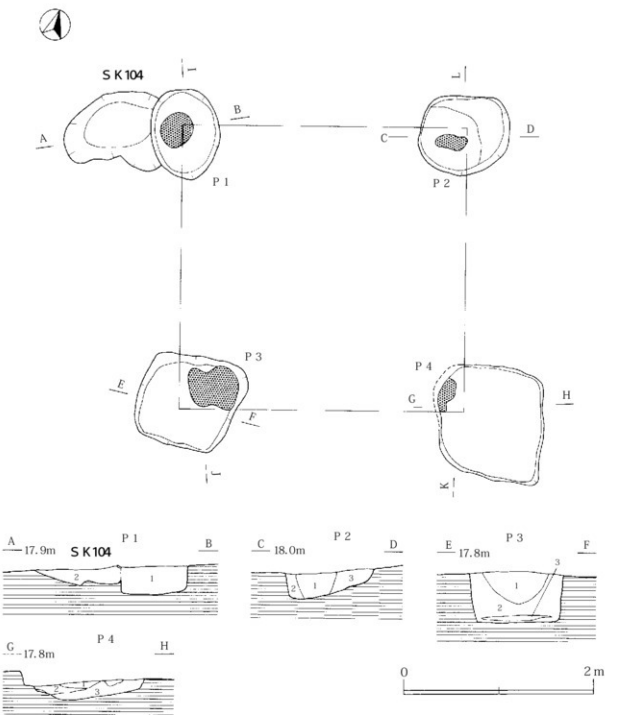
本掘立柱建物跡は、覆土の堆積状況から古代と考えられる。

ＳＢ98（第29図）

ＭＤ41・42、ＭＥ42グリットに位置する。調査区南端の地山面で４基の柱穴プランを確認した。１間×１間の掘立柱建物跡で、建物規模は東西（Ｐ１－Ｐ３）2.85m×南北（Ｐ１－Ｐ３）2.7mのほぼ正方形を呈している。柱穴掘形は、北西隅柱と北東隅柱では楕円形で、南西隅柱と南東隅柱は方形を呈している。各柱穴底面では、柱アタリが認められた。覆土から須恵器坏（第55図60・61）が出土している。

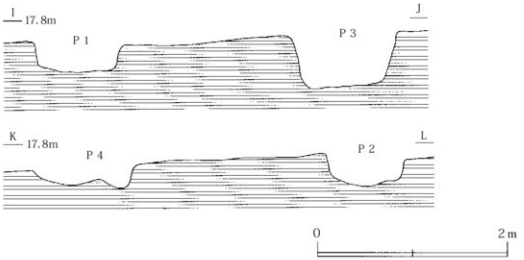


第29図　ＳＢ96掘立柱建物跡



S B98
P 1・S K 104
1　黒褐色土（10Y R2/2）しまり弱　粘性中　焼土塊20%、炭化物粒小10%混入
2　黒褐色土（10Y R3/2）しまり弱　粘性強　焼土粒中２%混入（S K104）
P 2
1　暗褐色土（10Y R3/3）しまり弱　粘性中　炭化物１%未満、地山粒２%混入
2　褐色土（10Y R4/6）しまり強　粘性強　地山粒20%混入、炭化物粒１層よりさらに少量混入
3　暗褐色土（10Y R3/4）しまり強　粘性強　地山塊30%混入
P 3
1　暗褐色土（10Y R3/3）しまり中　粘性弱　炭化物粒極小１%未満、焼土粒１%、地山粒２%混入
2　暗褐色土（10Y R3/3）しまり中　粘性弱　炭化物粒極小１%、焼土粒１%、地山塊40%混入
3　にぶい黄褐色土（10Y R4/3）しまり中　粘性中　炭化物粒極小１%、地山粒２%混入
P 4
1　褐色土（10Y R4/4）しまりやや強　粘性弱　炭化物粒極小１%未満、地山粒１%混入
2　にぶい黄褐色土（10Y R4/3）しまり中　粘性弱　地山粒１%混入
3　黒褐色土（10Y R3/2）しまりやや強　粘性弱　炭化物粒極小１%、地山粒25%混入

第30図　ＳＢ98掘立柱建物跡（１）

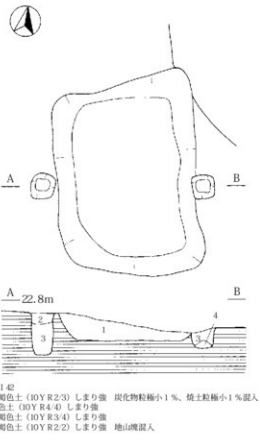


第31図　ＳＢ98掘立柱建物跡（２）

３．竪穴状遺構

ＳＫＩ42(第30図、図版５)

ＬＴ55・56グリッドに位置している。北から南に傾斜する地山面で、黒褐色の方形の落ち込みをＳＩ61を切った状態で確認した。規模は東西壁がおよそ1.8m、南北壁が約1.5mの長方形を呈する竪穴状遺構である。確認面からの深さは北側で30cmで、壁は緩く外反して立ち上がり、床面は堅く平坦である。覆土は、炭化物・焼土粒を含むⅡ層由来の黒褐色土(10ＹＲ２／３)で、土師器破片が出土している。東と西壁のほぼ中央外側には、一辺が25cm四方の柱穴が認められた。柱穴の覆土は、暗褐色土(10ＹＲ３／４)が主体である。本遺構の時期は、覆土の堆積状況と出土遺物から古代と考えられ、規模と形態は脇神館跡(鷹巣町)で確認されている竪穴状遺構のＳＫＩ126、ＳＫＩ267などに共通する。

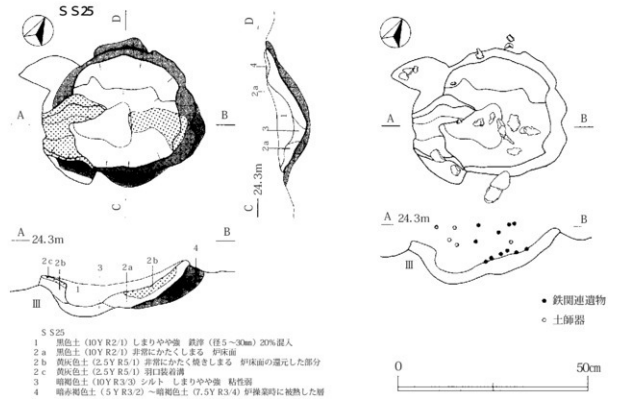


第32図　ＳＫＩ42竪穴状遺構

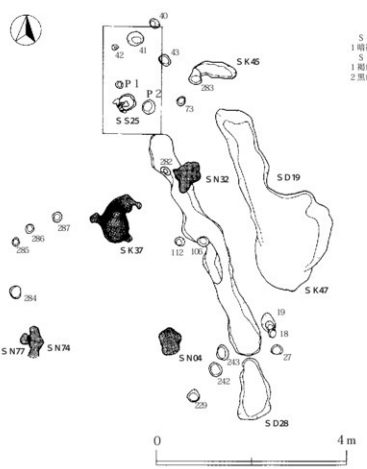
４．鍛冶炉

ＳＳ25(第31・32図、図版６)

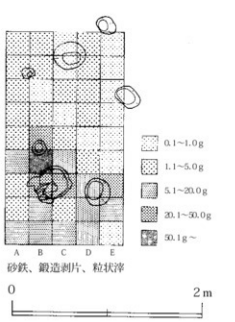
ＬＳ61グリットに位置する。Ⅲ層で微細な鉄滓を含む不整円形をした黒褐色土を確認した。周辺を精査した結果プランの縁をめぐるように焼土と硬化した粘土部分が確認された。基本層Ⅲ層を約40×30cmの楕円形に掘りくぼめ、内面に粘土を張り付けて炉床を構築している。炉床の粘土は熱を受けて黄灰色に硬化しており、確認面からの深さは６cmを測る。南西側にフイゴの羽口装着溝が認められ、



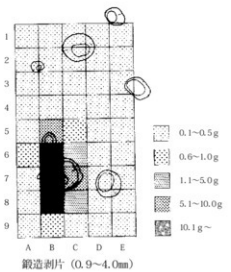
ＳＳ25
1　黒色土（10Y R2/1）しまりやや強　鉄滓（径５～30mm）20%混入
2ａ　黒色土（10Y R2/1）非常にかたくしまる　炉床面
2ｂ　黄灰色土（2.5Y R5/1）非常にかたく焼きしまる　炉床面の還元した部分
2ｃ　黄灰色土（2.5Y R5/1）羽口接着層
3　暗褐色土（10Y R3/3）シルト　しまりやや強　粘性弱
4　暗赤褐色土（５Y R3/2）～暗褐色土（7.5Y R3/4）炉操業時に被熱した層



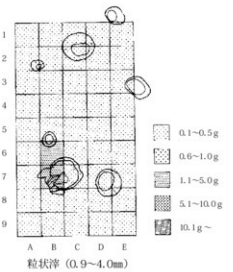
ＳＳ25Ｐ１
1 暗褐色土（10Y R3/3）しまり強粘性弱
ＳＳ25Ｐ２
1 褐色土（10Y R4/4）しまり強焼土粒、炭化物粒微小１%混入
2 黒色土（10Y R2/1）しまりやや強粘性弱



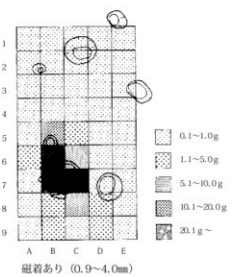
第33図　ＳＳ25鍛冶炉（１）



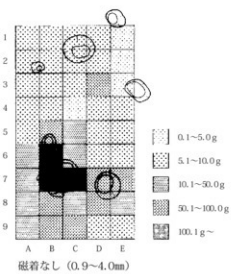
鍛造剥片（0.9～4.0mm）



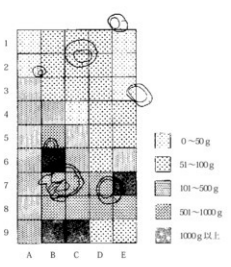
粒状滓（0.9～4.0mm）



磁着あり（0.9～4.0mm）



磁着なし（0.9～4.0mm）



残砂（～0.8mm）

粒状滓計測値

直径(mm)	出土総重量(g)	1個の重量(g)	個体数(個)	割合(%)
0.9～2.0	3.2	0.0016	2,000	98.4
2.1～4.0	1.6	0.0547	29	1.4
4.1～	0.6	0.1666	4	0.2

鍛造剥片計測値

大きさ(mm)	厚さ平均(mm)	出土総重量(g)	1個の重量(g)	個体数(個)	割合(%)
0.9～2.0	0.62	49.5	0.0007	70714	94.4
2.1～4.0	0.84	7.3	0.0174	4195	6.0
4.1～	0.96	0.6	0.1166	5	0

第34図　ＳＳ25鍛冶炉（２）

溝は炉内に向かって水平よりマイナス29°の角度で傾斜し、装着溝の下部先端より炉床までの深さは５㎝であり、推定される羽口の外径は10㎝前後である。本鍛冶炉に伴うと考えられるＰ１を北側に、Ｐ２を東側に検出している。遺物は椀型鍛冶滓、鍛冶滓、再結合滓、鍛造剥片、粒状滓、土師器破片、須恵器破片などが出土している。

本鍛冶炉の調査では、鍛冶炉を確認した基本層第Ⅲ層の途中から微細な遺物を含む土を25㎝の方眼で取り上げた。それを洗浄し、0.8㎜・2.0㎜・4.0㎜のふるいで選別し、さらに磁着するものしないものに分類した。また磁着するものから鍛造剥片・粒状滓を可能な限り選び出し、重量を計測した。鍛造剥片と粒状滓については大きさ別にサンプルを30点選び、重量から全体の個体数を割り出した。なお、4.1㎜以上の大きな遺物はＳＳ25検出以前に出土しているためグリット一括で取り上げをしている(第12表)。鍛造剥片・粒状滓の大きさ別構成比をみると0.9㎜～２㎜が圧倒的に多い。選別不可能であった0.8㎜以下の分量を含めるとさらに明らかである。また4.1㎜以上のＳＳ25を含むＬＳ61グリットでの鉄関連遺物の重量比では(第３表)鍛冶滓、椀形鍛冶滓が圧倒的に多くみられる。鉄製品と含鉄鉄滓も同程度みられる。

また出土遺物の分布状況をみるといずれもＢ６～８、Ｃ７・８に集中していることがわかる。鉄床石は検出できなかったが、遺物の広がりからＰ１が鉄床石を据えたピットの可能性が高い。羽口の挿入方向からフイゴの位置は炉の南西であり、以上からこの炉の作業空間は北西～南西であるといえる。

５．土坑

ＳＫ01(第35図)

ＬＲ62・63グリットに位置する。地山面で黒褐色土の落ち込みを確認した。径80㎝ほどの円形で、確認面からの深さは64㎝である。壁は底面から膨らみながら立ち上がり、底面は中央に向かって傾斜している。断面からは、本土坑は袋状土坑であった可能性が考えられる。

ＳＫ02(第35図)

ＬＱ・ＬＲ59・60グリットに位置する。地山面で黒褐色土の広がりとして確認し、ＳＫ05と重複しているが、本土坑が新しい。東から西に傾く斜面にＳＫ05を掘り込んだあと東側を拡張し、本土坑を掘り込んでいる。南北2.5m、東西1.4m以上の不整形をしており、確認面からの深さは50㎝ほどである。壁は東側でほぼ垂直に立ち上がり、底面には凹凸がある。

ＳＫ05(第35図)

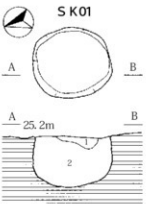
ＬＲ59・60の斜面に位置し、ＳＫ02と重複しているが、本土坑が古い。南北2.3m、東西1.7mの不整形をしており、確認面からの深さは中央で40㎝である。壁は斜面下方の西側で緩やで、斜面の上方の東側では急角度で立ち上がる。底面は凹凸が激しい。覆土は暗褐色土と地山土が互層に堆積しており、ＳＫ02を掘り込んだ際に、下に位置する本土坑が埋められたものと判断できる。

遺物は覆土中より土師器破片が10点出土している。

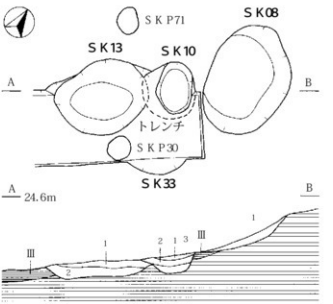
本土坑は覆土の堆積状況や形態から、ＳＫ02とともに古代の粘土採掘坑の可能性がある。

ＳＫ08(第35図)

ＬＲ・ＬＳ59グリットに位置する。確認調査時トレンチ内の地山面で暗褐色土の落ち込みを確認し



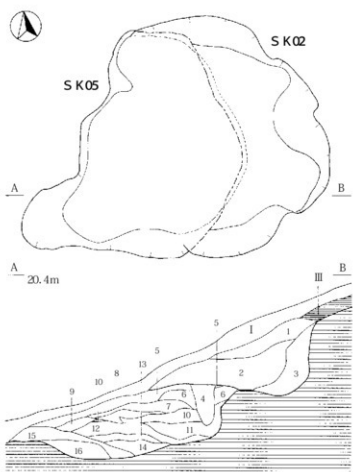
SK01
1　黒褐色土（10Y R2/2）
　シルト　しまりやや弱
　炭化物粒極小１％混入
2　暗褐色土（10Y R3/3）
　シルト　しまり中地山粒１％、
　にぶい黄褐色土（10Y R5/4）
　20%



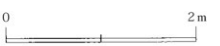
SK08
1　暗褐色土（10Y R3/3）しまり強
　粘性中

SK10
1　暗褐色土（10Y R3/4）
　しまり強
2　灰黄褐色土（10Y R4/2）～
　暗褐色土（10Y R3/3）しまり強
　粘性中　炭化物粒中２％混入
　焼土粒５％混入
3　暗褐色土（10Y R3/3）しまり弱
　粘性中～強炭化物粒中１％以下
　で混入

SK13
1　暗褐色土（10Y R3/3）シルト　しまり弱　粘性微弱
2　褐色土（7.5Y R4/3）シルト　しまり強　粘性中
　炭化物粒小１～２％混入　焼土塊極大25～30%混入
　地山３％混入
3　にぶい黄褐色土（10Y R4/3）しまり強　粘性中
　炭化物粒小１％混入



SK02・SK05
1　黒褐色土（10Y R2/2～10Y R2/3）しまりやや強　粘性弱
2　暗褐色土（10Y R3/3）～黒褐色土（10Y R3/2）
　しまりやや強　粘性中
3　褐色土（10Y R4/6）～黄褐色土（10Y R5/6）
　しまりきわめて強　粘性強　粘土質東側壁崩落土
4　暗褐色土（10Y R3/3）しまり中　粘性中～強
　地山粒２～３％混入　木根による攪乱
5　黒褐色土（10Y R2/2）しまり強　粘性弱～中
6　暗褐色土（10Y R3/3～10Y R3/4）しまりやや強　粘性中
7　褐色土（10Y R4/4）やや強　粘性中～強
　炭化物粒極小１％混入
8　黒褐色土（10Y R2/3）しまり強　粘性弱～中
　地山粒５％混入　炭化物粒極小１％混入
9　暗褐色土（10Y R3/3）しまり強　粘性弱～中
10　褐色土（10Y R4/6）しまり強　粘性弱～中
11　暗褐色土（10Y R3/3）やや強　粘性中　地山粒20%混入
12　暗褐色土（10Y R3/4）しまり強　粘性中～強
13　暗褐色土（10Y R3/3）地山粒１%混入
14　暗褐色土（10Y R3/4）地山粒１％未満混入
15　黒褐色土（10Y R2/2）しまり強　粘性強
16　褐色土（10Y R4/6）しまりきわめて強　粘性強



第35図　ＳＫ01・02・05・08・10・13土坑

た。南北1.17m、東西0.86mの楕円形を呈し、深さ35㎝である。壁は西側では、斜面下方のため失われているが、東側では外傾して立ち上がり、底面は平坦である。

遺物は覆土中から土師器破片４点が出土している。

ＳＫ10(第35図)

ＬＳ59グリットに位置する。確認調査時のトレンチ内の地山面で確認したが、60ラインに設定した東西の基本土層の観察から、Ⅲ層上面から掘り込まれていることがわかった。ＳＫ13と重複するが、本土坑が新しい。南北0.6m、東西0.32mの楕円形を呈し、深さ20㎝で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

本土坑の時期は、古代の遺物包含層であるⅢ層から掘り込まれていることから、古代と判断した。

ＳＫ13(第35図)

ＬＳ59グリットに位置する。確認調査時のトレンチ内の地山面で焼土の混入する落ち込みを確認したが、基本土層の観察からⅢ層上面から掘り込まれていることがわかった。ＳＫ10と重複するが、本土坑が古い。東西1.2m、南北0.85mの楕円形を呈し、深さ15㎝で、壁は緩やかに外傾してち上がる。

底面はほぼ平坦である。覆土２層には、焼土や炭化物が多量に含まれるが、これは北側にある鍛冶炉(ＳＳ25)に伴う可能性がある。遺物は覆土中より土師器破片数点と石錘１点が出土した。

本土坑の時期は、古代の遺物包含層であるⅢ層から掘り込まれていることから、古代と判断した。

ＳＫ23(第36図)

ＭＤ・ＭＥ53グリットに位置し、地山面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。長径（東西）0.76m、短径南北0.66mの楕円形を呈しており、確認面からの深さは30㎝である。壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は基本層Ⅲ層由来の暗褐色土層で、本土坑は縄文時代より新しく、古代以前のものと判断される。

ＳＫ26(第36図)

ＬＲ62グリットに位置し、地山面で褐色土の落ち込みとして確認した。西側が木根で失われているが長径(東西)1.2m以上、短径(南北)0.7mの楕円形を呈するものと推定される。確認面からの深さは30㎝で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で堅くしまっている。覆土２層は壁崩落土で、１層は基本層のⅣ層が埋め戻されたものである。遺物は覆土中から土師器破片15点が出土している。

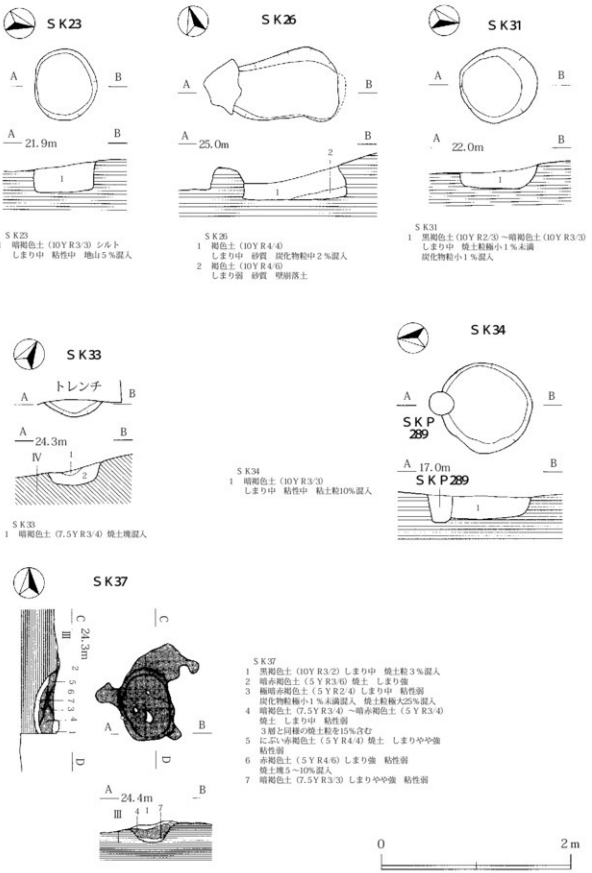
本土坑は、出土遺物から古代と判断する。

ＳＫ31(第33図)

ＭＥ53グリットに位置する。地山面で暗褐色土の落ち込みを確認した。東西－南北0.8×0.83mのほぼ円形をなす。確認面からの深さは28㎝。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は黒褐色土の１層である。人為堆積と考えられる。遺物は覆土中より土師器破片が１点出土している。

ＳＫ33(第35・36図)

ＬＲ・ＬＳ59グリットに位置し、確認調査時のトレンチ内Ⅳ層面で確認した。トレンチにより大部分が失われており、平面形や規模については不明であるが、検出した南側の状況からは、円形を呈していたものと判断される。確認面からの深さは24㎝で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、底面は中央に向かい緩やかに傾斜している。



第36図　ＳＫ23・26・31・33・34・37土坑

ＳＫ34（第35図）

ＭＨ41グリットに位置し、地山面で暗褐色土の落ち込みを確認した。ＳＫＰ289と重複するが、本土坑が古い。径１ｍほどの円形を呈し、確認面からの深さは15㎝である。壁は膨らみを持ちながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は地山を粒状に含むⅢ層由来の暗褐色土である。遺物は底面から弥生土器片（第50図10）が40点、覆土中から須恵器片、土師器片が数点出土した。

本土坑の時期は、覆土と出土遺物から弥生時代と判断する。

ＳＫ37（第36図）

ＬＳ・ＬＴ60・61グリットに位置し、第Ⅲ層上面で焼土の広がりを確認した。長径（南北）0.75m、短径（東西）0.55mの楕円形を呈する。確認面からの深さは20㎝で、壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央に向かってわずかに傾斜している。覆土は７層に分層し、７層の暗褐色土は基本層第Ⅲ層で、本土坑が使用中ないしは廃棄直後に堆積したもので、２～６層の焼土はその後に投げ込まれたものと判断した。焼土からは土師器破片70点（第53図41・42）と鍛冶滓・鉄製品（第67図21～23）が出土しており、焼土は北側にある鍛冶炉（ＳＳ25）に由来するものである。

ＳＫ43・44（第37図）

２基の土坑は、ＭＡ・ＭＢ51グリットに位置し、地山面で不整形な黒褐色土の落ち込みとして確認した。円形や楕円形、不整形の小さな土坑が多数重複しており、底面・壁ともに凹凸が激しい。覆土は黒褐色土に褐色土が塊状、板状に混入している。遺物は縄文土器片20点、弥生土器片50点、石器剥片224点、土師器片421点、鍛冶滓・羽口溶解物（第67図24・25）が出土している。

両土坑とも、形態や覆土と遺物の出土状況から、古代かそれ以降の粘土採掘坑と考えられる。

ＳＫ45（第38図）

ＬＳ61グリットに位置し、地山面で暗褐色土の不整形な落ち込みとして確認した。ＳＫＰ283と重複するが新旧関係は不明である。長径（東西）0.85m、短径（南北）0.3mの細長い楕円形を呈している。確認面からの深さは16㎝である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は斜面に沿って西側に傾斜している。覆土は基本層第Ⅲ層由来の暗褐色土で、本土坑の時期は縄文時代以降、古代以前と判断される。

ＳＫ47（第38図）

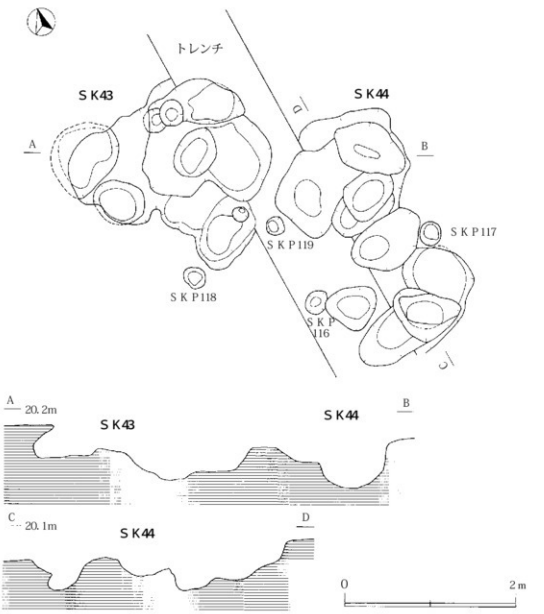
ＬＲ・ＬＳ60に位置し、ＳＤ19の底面精査時に暗褐色土の楕円形の落ち込みとして確認した。上面形は長径（南北）1.5m、短径（東西）1.2mの楕円形だが、底面は径１ｍの円形を呈している。確認面（ＳＤ19底面）からの深さは50㎝で、壁はやや外に膨らみながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は４層に分層したが、土師器破片・須恵器破片・鍛冶滓を含む暗褐色土（３層）と地山（２層）は、ＳＤ19を構築するために埋め戻されたものと判断した。遺物は覆土中より土師器破片、須恵器破片、鍛冶滓、羽口（第67図26・27）が出土している。

本土坑の時期は、古代もしくはそれ以前と考えられる。

ＳＫ48（第38図）

ＭＦ47・48グリットに位置し、範囲確認トレンチ内の地山面で暗褐色土の落ち込みを確認した。長径（南北）0.98m、短径（東西）0.77mの楕円形を呈している。確認面からの深さは30㎝で、底面は中央から緩やかに立ち上がる。底面の北東側に径15㎝範囲に被熱硬化した範囲が認められた。

遺物は底面より土師器破片１点と椀型鍛冶滓が２点出土していることから、本土坑の時期は古代



第37図　ＳＫ43・44土坑

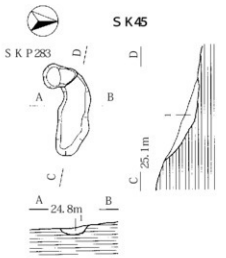
で、鍛冶炉（ＳＳ25）に関連する遺構と考えられる。

ＳＫ50（第37図）

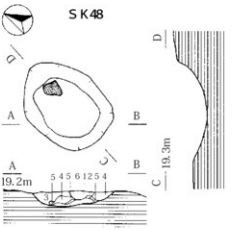
ＭＥ51グリットに位置し、ＳＩ17の精査中に黒褐色土の落ち込みとして確認したが、本土坑がＳＩ17より新しい。径0.48mの不整円形で、確認面からの深さは17㎝、壁は外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが中央部に向かい窪んでいる。

ＳＫ51（第37図）

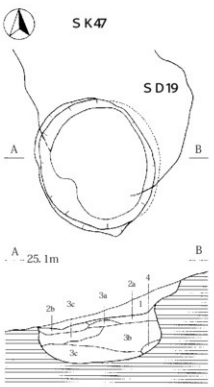
ＭＥ・ＭＦ51グリットに位置し、地山面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。長径（東西）0.72m、短径（南北）0.64mの楕円形を呈して、確認面からの深さは20㎝ほどである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中より石器剥片１点、弥生土器破片１点、須恵器破片１点が出土している。



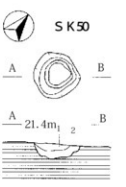
SK45
1　暗褐色土（10Y R3/3）
　しまり中強
　さらさらしている



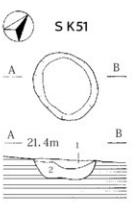
SK48
1　暗褐色土（7.5Y R3/3）
　しまり強　粘性中　炭化物粒極小～小３％
　焼土粒小～極大粒５％　地山粒混入
2　暗赤褐色土（５Y R3/6・70%、５Y R3/2・30%）
　粘性中　腐炭
3　暗褐色土（10Y R3/4）
　しまりきわめて強　炭化物粒極小１％
　焼土　粒極小～極大３％混入
4　暗褐色土（10Y R3/3）
　シルト　しまりきわめて強　炭化物粒小１％
　焼土粒極小１％未満　褐色土小～大10%混入
5　黒褐色土（10Y R3/2）
　しまり中　粘性中　炭化物粒小５％
　焼土粒小～大10%　地山粒１％混入
6　黄褐色土（10Y R5/6）70%
　黒褐色土（10Y R3/2）30%混入
　しまり中　粘性中　炭化物粒小１％
　焼土粒小～大10%



SK47・SD19
1　暗褐色土（10Y R3/3）しまり中　粘性弱
2 a　褐色土（10Y R4/6）しまり強　粘性弱
2 b　褐色土（10Y R4/4）しまり中　粘性弱
3 a　褐色土（7.5Y R3/4）・暗赤褐色（５Y R3/6）
　焼土の混合土　しまり中　粘性中
3 b　暗褐色土（10Y R3/3）しまり中　粘性弱
　地山粒25％混入焼土粒１％混入
3 c　暗褐色土（10Y R3/3）しまり中　粘性弱
　焼土塊　炭化物粒15～20%混入
　地山粒５％混入
4　　褐色土（10Y R4/6）しまり強　壁崩落土



SK50
1　黒褐色土（7.5Y R3/2）
　しまり弱　粘性中
2　褐色土（7.5Y R4/4）
　しまりや中強　粘性中
　地山粒20%礫（10～20mm）混入



SK51
1　黒褐色土（7.5Y R3/2）
　しまり弱　粘性中
　焼土粒（３mm以下）２％混入
2　褐色土（10Y R4/4）
　しまり強　粘性中
　粘土塊大１％混入
　南西側がやや明るい色である

第38図　ＳＫ45・47・48・50・51土坑

ＳＫ57(第38図)

ＭＥ・ＭＦ47グリットに位置し、地山面で暗褐色土の円形の落ち込みとして確認した。径1.1mほどの円形を呈し、確認面からの深さは14㎝である。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、基本層Ⅲ層由来の暗褐色土であり、本土坑の時期は縄文時代以降で、古代もしくはそれ以前と判断される。

ＳＫ69(第39図)

ＭＥ48グリットに位置し、暗褐色土と黄褐色土の円形の落ち込みを確認した。平面形は、径0.6mの円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは22㎝である。壁は底面から外傾して立ち上がり、底面は平坦である。

ＳＫ71(第39図)

ＭＥ43グリットに位置し、地山面で焼土粒・炭化粒を含む黒褐色土の落ち込みを確認した。長径(東西)1.4m、短径(南北)1.15mの楕円形を呈し、確認面からの深さは８㎝である。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺物は覆土中から土師器片(第53図41・42)、須恵器片、被熱した礫が出土している。

ＳＫ85(第39図、図版６)

ＮＨ46グリットに位置する。ＳＩ36の精査中に、炭化物を含む暗褐色土の半円状の広がりを確認し、ＳＩ36より本土坑が新しい。平面形は、一部調査区外であるが、長径(南北)１m、短径(東西)0.8m以上の楕円形を呈するものと推定される。確認面からの深さは12㎝で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。覆土１層と３層には土師器片が多量に混入しており、２層と５層には炭化物層で、底面は被熱のため赤色硬化している。遺物は土師器壺(第55図58)、土師器甕の口縁部片(第55図56)、体部破片182点・底部破片が出土した。

本土坑の時期は、１・２層が基本層の第Ⅲ層に由来することから古代もしくはそれ以前と考えられ、遺物の出土状況からは土器焼成遺構と考えられる。

ＳＫ86(第39図)

ＬＴ46グリットに位置し、地山面で黒褐色土の円形の落ち込みを確認した。径50㎝の円形を呈し、確認面からの深さは16㎝ほどである。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。覆土は炭化物や焼土、地山を粒状に含む黒褐色土である。

ＳＫ87(第36図)

ＭＡ46グリットに位置する。地山面で不整楕円形の黒褐色土の落ち込みを確認し、ＳＫＰ251・255と重複しているが、本土坑はＳＫＰ255より古く、ＳＫＰ251より新しい。長径(東西)0.88m、短径(南北)0.44mの楕円形を呈し、確認面からの深さは22㎝ほどである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は東側に傾斜している。覆土は基本層の第Ⅱ層で、遺物はフレイク、弥生土器片、土師器片が出土している。

ＳＫ92(第26図)

ＭＢ49・50、ＭＣ50グリットに位置する。ＳＩ88の床面精査中に、ＳＩ88の床面で確認し、本土坑がＳＩ88より古い。長径(南北)3.93m、短径(東西)1.2mの細長い楕円形を呈し、確認面(ＳＩ88床面)からの深さは10～40㎝で、壁は外傾しながら立ち上がり、底面は北側に向かって傾斜している。覆土

１層は、基本層第Ⅲ層の黒褐色土に炭化物・地山粒が多量に混入しており、ＳＩ88構築時に埋め戻されものと判断される。遺物は石器剥片２点のほか、土師器破片18点が出土している。

ＳＫ93（第26図）

ＭＣ49グリットに位置する。ＳＩ88の床面精査中に、ＳＩ88の床面で確認し、本土坑がＳＩ88より古い。長径（東西）0.8m、短径（南北）0.6mの楕円形を呈し、確認面（ＳＩ88の底面）からの深さは22㎝である。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

覆土は炭化物、地山粒が多量に混入した暗褐色土で、ＳＩ88構築時に埋め戻されたものと判断される。

ＳＫ94（第26図）

ＭＡ49・50グリットに位置する。ＳＩ62の精査中、床面で暗褐色土の楕円形の落ち込みを確認し、ＳＩ62よりも本土坑が古い。長径（東西）1.2m、短径（南北）0.78mの楕円形を呈し、確認面（ＳＩ62床面）からの深さは42㎝である。壁はやや外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦で堅くしまっている。

遺物は覆土中から土師器破片９点、須恵器破片３点が出土している。

ＳＫ101（第24図）

ＭＤ44グリットに位置する。ＳＩ67床面精査時に焼土を含む黒褐色土の楕円形プランを確認し、ＳＩ67との新旧関係は明らかでないが同時期か、本土坑が古いと考えられる。長径（東西）0.6m、短径（南北）0.45mの楕円形を呈し、確認面（ＳＩ67床面）からの深さは16㎝である。壁は外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺物は覆土中から石器剥片４点が出土している。

ＳＫ102（第24図）

ＭＤ44グリットに位置する。ＳＩ67床面査時に褐色土の楕円形のプランを確認したが、ＳＩ67との新旧関係は不明である。長径（南北）0.95m、短径（東西）0.47mの楕円形を呈し、確認面（ＳＩ67床面）からの深さは29㎝である。壁はやや外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺物は覆土中からフレイクが３点出土している。

ＳＫ103（第22図）

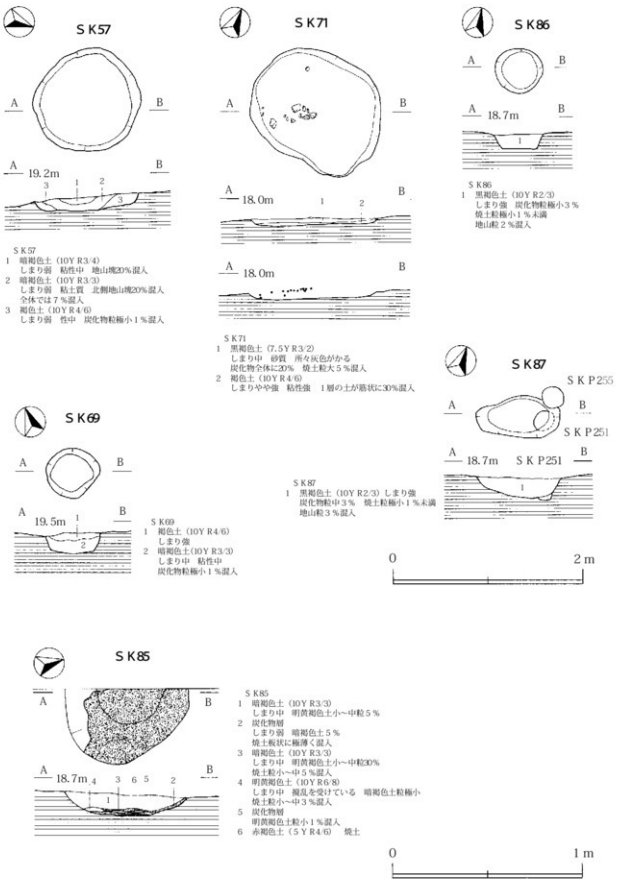
ＭＣ48グリットに位置する。ＳＩ64床面精査時に暗褐色土の楕円形プランを確認し、ＳＩ64よりも本土坑が古い。長径（南北）1.16m、短径（東西）0.59mの楕円形を呈し、確認面（ＳＩ64床面）からの深さは16㎝である。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。本土坑は、ＳＩ64構築時に暗褐色土（８層）で埋め戻され、その上に地山土（７層）が貼られたものと判断される。

遺物は覆土中から土師器破片が出土している。

ＳＫ104（第30図）

ＭＥ42グリットに位置する。地山面で不整形の黒褐色土の落ち込みとして確認し、ＳＢ98のＰ１と重複するが、本土坑が古い。長径（東西）1.1m以上、短径（南北）0.66mの楕円形を呈し、確認面からの深さは17㎝である。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がり、底面には凹凸がある。

遺物は覆土中から弥生土器破片１点・石器剥片２点が出土している。



第39図　ＳＫ57・69・71・85・86・87土坑

６　焼土遺構

ＳＮ04(第40図)

ＬＴ60グリットに位置する。第Ⅲ層上面で赤褐色焼土の広がりを確認した。焼土の広がりは南北0.５m、東西0.42mの不整形で、確認面からの深さ４㎝ほどまで赤色硬化している。焼土中からの遺物の出土はなかったが、付近から土師器破片16点、鍛冶滓１点が出土している。

ＳＮ32(第40図)

ＬＳ61グリットに位置する。第Ⅲ層上面で赤褐色焼土の広がりを確認したが、ＳＤ28と重複し、本焼土遺構が新しい。焼土の広がりは南北0.７m、東西0.３mの不整形で、確認面から深さ６㎝ほどまで赤変している。遺物は土師器破片26点、鍛冶滓が２点出土している。焼土３㎏を洗浄選別し重量を測定した結果、磁着したものは砂鉄も含め37ｇ、そのうち鍛造剥片と確認できるものは0.９～２㎜の大きさで0.１ｇであった。

ＳＮ59(第40図)

ＭＡ・ＭＢ48グリットに位置する。地山面で明赤褐色焼土の広がりを確認した。焼土の広がりは南北0.55m、東西0.45mの不整形で、確認面からの焼土の厚さは８㎝である。

ＳＮ74(第40図)

ＬＴ60グリットに位置する。第Ⅲ層上面で赤褐色焼土の広がりを確認した。確認調査時のトレンチで一部が失われているが、焼土の広がりは、南北0.７m以上、東西0.３mの不整形と推定できる。確認面から深さ16㎝まで赤変している。

ＳＮ77(第40図)

ＬＴ60グリットに位置する。第Ⅳ層で暗赤褐色土の広がりを確認した。焼土の広がりは径0.４mほどの円形を呈し、確認面から深さ10㎝まで赤変している。

ＳＮ79(第40図)

ＬＴ60グリットに位置する。第Ⅱ層掘り下げ時に赤褐色焼土の広がりを確認した。焼土の広がりは長径(南北)0.４m、短径(東西)0.２mの楕円形を呈し、確認面から深さ８㎝まで赤変している。

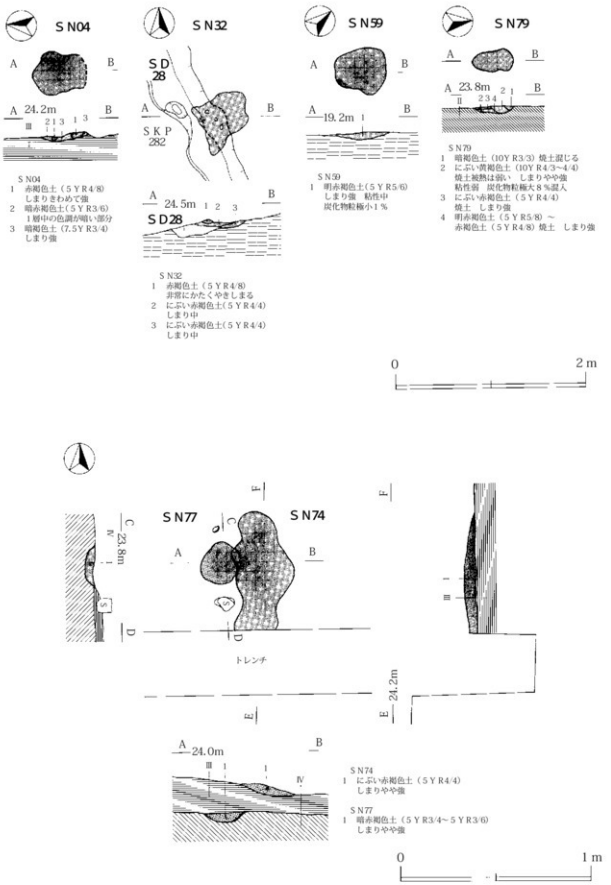
７　溝跡

ＳＤ19(第41図)

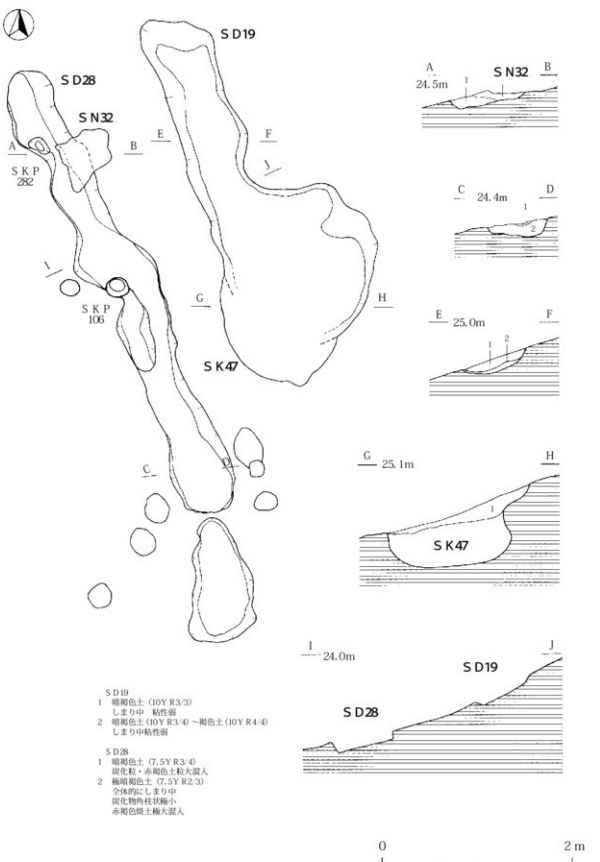
ＬＲ・ＬＳ60・61グリットに位置する。地山面で不整形な暗褐色土の落ち込みを確認し、ＳＫ47と重複するが、本溝跡が新しい。長さ(北北西－南南東)3.８m、幅は0.６～1.５mで、等高線に平行する。壁は、斜面上方である東側は急激に立ち上がるが、西側では明確に認められない。底面は東から西へ緩やかに傾斜する。遺物は、土師器破片37点、須恵器高台付坏１点、石器剥片１点のほか羽口１点、鍛冶滓10点、椀型鍛冶滓１点、含鉄鉄滓１点(第67・68図37～38)が出土している。

ＳＤ28(第41図)

ＬＳ59・60・61グリットに位置する。地山面で暗褐色土に炭化物・焼土が粒状に混入する落ち込みを確認し、ＳＮ32、ＳＫＰ106・282と重複するが、本溝跡が古い。長さ(北北西－南南西)6.４m、幅0.４～0.６mで、ＳＤ19と平行する。確認面からの深さは８～18㎝で、壁は急激に立ち上がり、底面には凹凸がある。遺物は土師器破片42点、土製支脚(第52図26)、須恵器坏(第52図25)、鍛冶滓４点、椀



第40図　S N04・32・59・74・77・79焼土遺構



第41図　ＳＤ19・28溝跡

型鍛冶滓５点(第67図35～39)が出土している。

ＳＤ39(第42図)

ＭＢ53、ＭＣ・ＭＤ52・53グリットに位置する。地山面で暗褐色土の「コ」の字形の落ち込みを確認した。長さは北側5．7m、西側4．4m、南側1．5mで、幅20～36cm、深さは10～16cmで、南西コーナーが隅丸であるのに対して、南東のコーナーは直角に近く折れ曲がっている。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は平坦である。溝で囲まれた内側には、柱穴様のピットが多数あるが、住居や建物跡の柱穴と考えられる規則的な配置を示すピットが無く、本溝跡の性格も不明である。

ＳＤ41(第42図)

ＬＳ・ＬＴ57、ＬＳ58グリッドに位置している。北から南に緩く傾斜する地山上面で、黒褐色の環状の溝を確認した。西北と南側を大きく欠くが、残存部から推定すると直径4．2mほどの環状を呈すると思われる。溝の上面幅は50～35cmで、深さは15cm、底面はほぼ平坦である。覆土はⅡ層に由来する単一層で、部分的に暗褐色土のブロックが混入する。本溝跡は、東側でＳＢ96の北東隅柱と重複するが、本遺構確認時には北東隅柱のプランは確認されなかったことから、本遺構がＳＢ96よりも新しいものと判断した。しかしながら、土師器と須恵器が出土していることや、覆土が基本層のⅡ層に由来することから、本遺構の時期はＳＢ96とそれほど時間差が無いものと考えられる。

遺物は土師器片、須恵器片が23点、縄文土器６点が出土している。

ＳＤ46(第43図)

ＬＳ・ＬＴ52グリットで、ＳＩ30とＳＩ14の間に位置する。地山面で黒褐色土の落ち込みを確認し、ＳＩ30と重複するが本溝跡が古い。東側が削平されているが現状では長さ(東西)3．8m以上の弧状を呈すると考えられる。壁は緩やかに外傾している。

ＳＤ70(第44図)

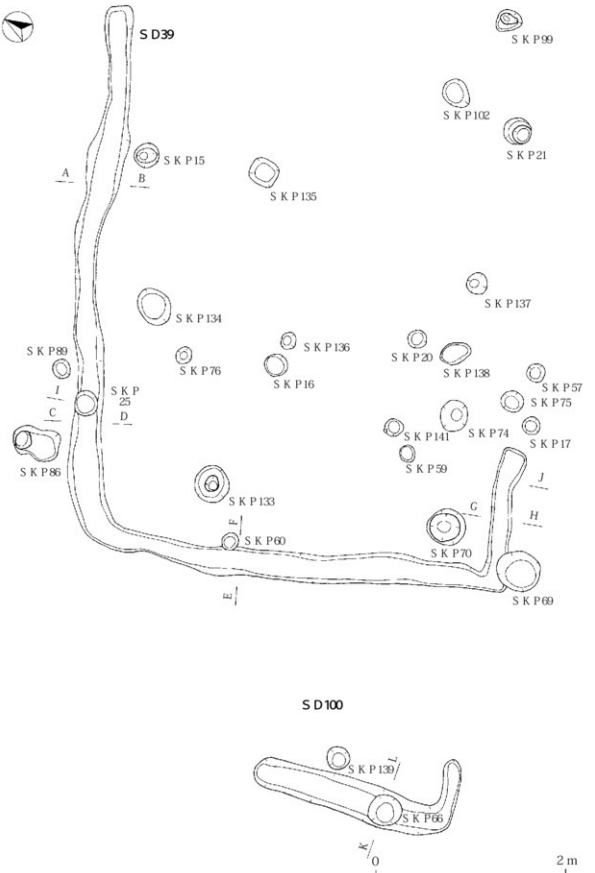
ＭＥ・ＭＦ50グリットに位置する。地山面で褐色土の落ち込みを確認した。長さ(北西－南西)1．88m、幅10～16cm、深さ約８cmである。断面は「Ｕ」字形をしている。

ＳＤ80・83(第45図)

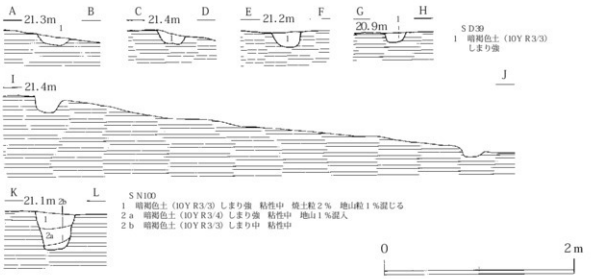
ＭＡ・ＭＢ・ＭＣ・ＭＤ47・48グリットに位置する。地山面で暗褐色土の溝状の落ち込みを確認した。長さ東西12．5mの溝(ＳＤ83)の西側で、南北4．8mの溝(ＳＤ80)が直角にとりつく。幅７cmで、確認面からの深さは４cmであり、断面形は「Ｕ」字形を呈している。ＳＩ64、ＳＫＰ302と重複するが、本溝跡が古い。本溝跡は、ＳＩ64など古代の竪穴住居跡よりも古いが、覆土からはそれほど時間差が無いものと判断されるが、性格は不明である。

ＳＤ100(第42図)

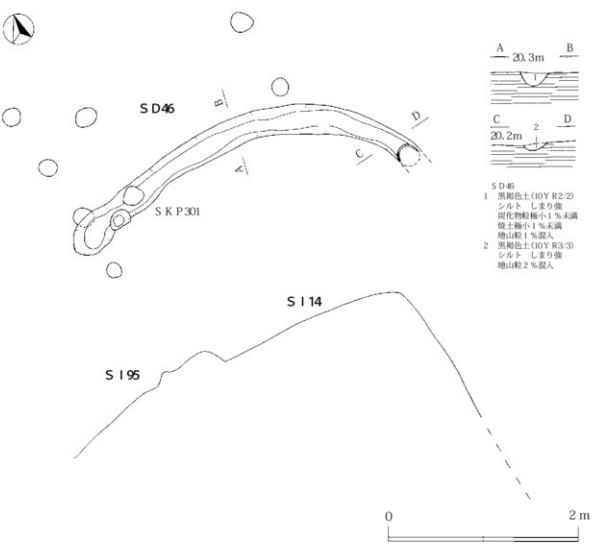
ＭＤ51・52グリットに位置する。地山面で暗褐色土の「Ｌ」字形の落ち込みを確認し、ＳＫＰ66と重複するが、本溝跡が新しく、東側のＳＤ39と平行している。南北2．16m、東西0．84mでコーナーはＳＤ39と同じように直角に折れ曲がる。幅20～45cm、確認面からの深さは10～25cmである。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。



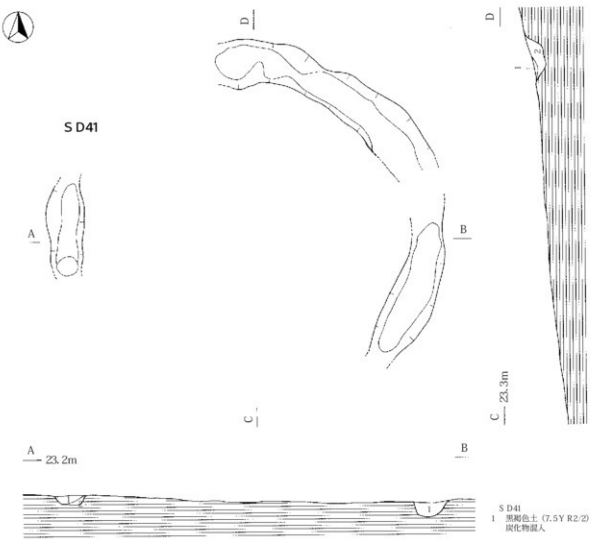
第42図　ＳＤ39・100溝跡（１）

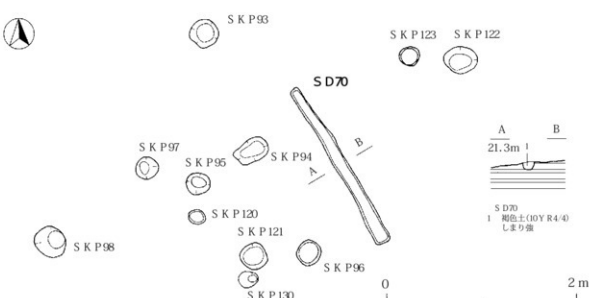


第43図　ＳＤ39（２）

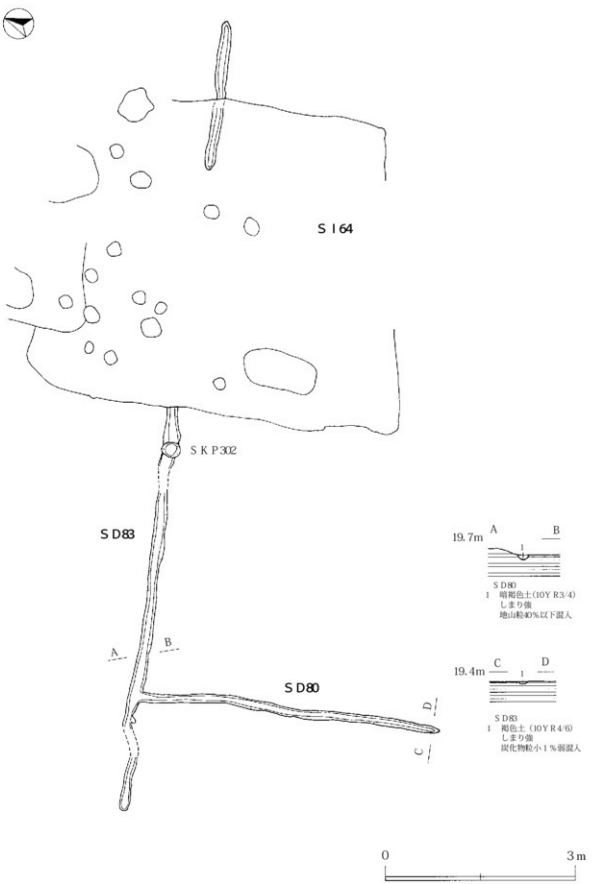


第44図　ＳＤ46溝跡





第45図　ＳＤ41・70溝跡



第46図　ＳＤ80・83溝跡

８　柱穴様ピット

柱穴様ピットは調査区全体で計270基を検出した。特に調査区中央部で、ＳＩ17・36、ＳＤ39の周辺に集中してみられる。また、ＳＩ67の南側のピット群には住居と方向が等しく、規則的な配列が一部みられるが、明確な遺構の柱穴とは認めることができなかった。柱穴様ピットについては第３～７表に位置・形態・規模等の一覧を掲載する。

第３表　柱穴様ピット一覧（１）

番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物	備　考
1	ＬＰ61	円形	34×30	24×20	22.5	27.12		
2	ＬＱ61	円形	24×18	16×14	10.8	27.05		
3	ＬＳ54	円形	20×18	14×12	11.2	21.23		
4	ＬＳ54	円形	22×22	18×16	12.8	20.88		
5	ＬＳ54	円形	32×30	26×20	15.6	20.75		
6	ＬＳ54	円形	14×14	14×12	17.4	20.97		
7	ＭＡ54	略円形	20×17	13×11	27.9	20.91	土師器片３点	
8	ＭＡ54	楕円形	20×17	15×11	13.7	21.01		
9	ＭＢ56	円形	17×17	10×10	9.9	23.58		
10	ＭＣ55	略円形	21×18	14×13	9.5	23.28		
11	ＭＣ55	楕円形	23×19	24×24	21.3	22.84		
12	ＭＢ55	楕円形	20×17	14×12	5.0	23.01		
13	ＭＢ55	略円形	18×17	15×14	13.5	22.59		
14	ＭＤ･ＭＣ53	円形	22×20	14×11	13.6	21.57		
15	ＭＣ53	略円形	26×24	7×6	37.9	20.62		
16	ＭＣ52	円形	25×24	18×17	36.1	20.61		
17	ＭＣ52	円形	19×18	13×11	13.7	20.54		
18	ＬＳ60	円形	18×16	18×14	8.2	24.18	土師器片１点	ＳＫＰ19と重複
19	ＬＳ60	略円形	44×28	20×14	62.4	23.64	土師器片８点	ＳＫＰ18と重複
20	ＭＣ52	円形	19×18	13×12	28.3	20.48		
21	ＭＢ52	円形	29×28	15×14	18.4	20.29		
22	ＭＢ52	略円形	26×24	12×10	34.7	19.69		
23	ＭＡ54	略円形	19×18	15×13	8.7	21.00		
24	ＭＡ54	略円形	22×20	17×15	15.5	21.22	土師器片３点	
25	ＭＣ53	方形	26×26	21×20	16.7	21.14	土師器片１点	
26	ＭＣ53	円形	18×17	13×9	9.9	21.38		
27	ＬＳ60	略円形	24×20	20×16	15.0	24.11		
28	欠番							
29	欠番							
30	ＬＳ59	円形	26×24	18×16	19.3	23.64		
31	欠番							
32	ＭＡ58	楕円形	26×22	11×10	25.9	23.43		
33	ＭＡ58	略円形	24×20	16×14	19.4	23.48		
34	欠番							
35	ＭＡ58	楕円形	25×16	11×8	23.9	23.51		
36	欠番							
37	ＭＡ58	略円形	20×18	12×10	11.4	23.59		
38	ＭＡ58	楕円形	32×30	22×16	13.6	23.49		
39	ＬＴ58	略円形	26×22	24×22	23.1	23.14		
40	ＬＳ61	円形	22×18	14×10	20.0	24.20		
41	ＬＳ61	略円形	35×30	20×13	10.1	24.25		
42	ＬＳ61	円形	14×10	6×6	6.8	24.23		
43	ＬＳ61	楕円形	28×20	22×14	4.8	24.28		
44	欠番							
45	欠番							
46	ＭＣ50	略円形	27×23	12×11	28.5	19.58		
47	欠番						ＳＩ20－Ｐ１	
48	欠番						ＳＩ20－Ｐ２	
49	欠番						ＳＩ20－Ｐ３	
50	欠番						ＳＩ20－Ｐ４	
51	欠番						ＳＩ20－Ｐ５	

第４表　柱穴様ピット一覧（２）

番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物	備　考
52	ＭＣ51	円形	20×22	15×14	11.1	19.63		
53	ＭＤ51	略円形	22×19	16×15	16.4	20.57		
54	ＭＤ51	楕円形	21×18	18×13	18.1	20.67		
55	ＭＤ51	円形	18×17	14×11	8.4	20.80		
56	ＭＤ51	円形	16×14	11×10	10.3	20.77		
57	ＭＣ52	略円形	20×18	13×10	15.3	20.49		
58	ＭＣ51	円形	19×18	12×11	7.5	20.39		
59	ＭＣ52	円形	17×15	13×12	12.9	20.72		
60	ＭＤ52	楕円形	18×15	13×11	11.5	20.96		
61	ＭＤ51	楕円形	26×20	10×10	31.0	20.67		
62	ＭＥ51	円形	29×27	15×14	33.7	20.72		
63	ＭＤ51	楕円形	45×25	19×18	36.5	20.58		ＳＫＰ64と重複
64	ＭＤ51	略円形	30×25	21×18	43.3	20.55		ＳＫＰ64と重複
65	ＭＤ51	楕円形	43×33	18×12	32.2	20.68	石器製品１点	
66	ＭＤ51	楕円形	42×34	21×19	37.8	20.60		
67	ＭＤ52	円形	36×34	13×11	17.1	20.88		
68	ＭＤ52	略円形	30×28	18×12	13.9	20.98		
69	ＭＣ51	楕円形	46×40	32×27	38.2	20.29		
70	ＭＣ52	略円形	40×37	15×13	29.5	20.50		
71	ＬＳ59	楕円形	28×22	18×12	32.2	23.59	土師器片１点	
72	欠番							
73	ＬＳ61	円形	22×20	16×12	10.2	24.27		
74	ＭＣ52	略円形	33×30	12×11	41.8	20.36		
75	ＭＣ52	円形	24×22	15×14	15.4	20.53		
76	Ｃ52・５	円形	12×11	8×7	11.0	21.02		
77	ＭＥ53	円形	23×20	13×12	12.1	21.45		
78	ＭＥ52	円形	20×17	10×9	13.1	21.35		
79	ＭＥ51	方形	41×30	14×13	50.5	20.47		
80	ＭＥ50	楕円形	38×30	28×23	25.9	20.47		
81	ＭＤ51	楕円形	28×20	21×12	21.9	20.70	石器片１点	
82	ＭＥ52	円形	27×25	17×14	30.1	20.89		
83	ＭＤ52	楕円形	50×28	40×19	26.9	20.89		
84	ＭＥ52	円形	22×20	11×10	11.2	21.37		
85	ＭＥ53	円形	23×22	11×9	33.2	21.25	石器片３点	
86	ＭＤ53	楕円形	50×33	44×23	29.5	21.01		
87	欠番							
88	欠番							
89	ＭＣ53	円形	20×17	15×9	11.8	21.19		
90	ＭＣ53	円形	34×26	11×10	60.9	20.86		
91	ＭＣ53	楕円形	25×21	12×8	26.3	21.09		
92	ＭＦ51	楕円形	28×22	16×16	12.1	21.14		
93	Ｆ50・５	円形	30×30	20×19	11.4	21.14		
94	ＭＦ50	楕円形	38×23	25×14	14.7	20.97		
95	ＭＦ50	円形	19×18	17×11	26.8	20.80		
96	ＭＦ50	円形	27×24	22×20	17.0	21.76	須恵器片１点	
97	ＭＦ50	円形	24×24	14×9	24.1	20.87		
98	ＭＦ50	円形	32×32	18×18	31.4	20.73		
99	ＭＢ52	略円形	27×23	8×4	20.1	20.03		
100	ＭＢ52	略円形	32×25	20×17	9.9	20.15		
101	ＭＢ52	略円形	32×27	19×17	10.9	20.24		
102	ＭＢ52	楕円形	34×26	20×19	8.3	20.15		
103	欠番							
104	欠番							
105	欠番							
106	ＬＳ60	円形	24×20	16×12	20.2	23.96	土師器片１点	
107	ＬＴ59	略円形	15×13	10×8	13.4	23.24		ＳＫＰ108と重複
108	ＬＴ59	略円形	23×18	9×8	20.1	23.17		ＳＫＰ108・109と重複
109	ＬＴ59	略円形	22×17	10×8	22.4	23.15		ＳＫＰ108と重複
110	ＬＴ58	楕円形	32×21	10×9	25.2	23.06		

第５表　柱穴様ピット一覧（３）

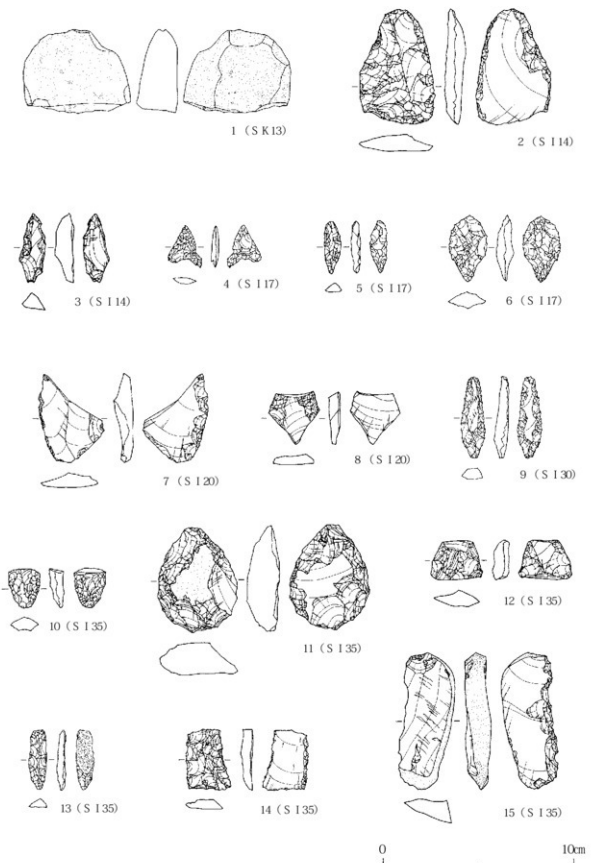
番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物	備　考
111	ＬＴ58	円形	15×14	4×4	16.3	23.14		
112	ＬＳ60	円形	22×18	16×12	28.5	23.83	縄文１点 須恵器３点	
113	ＬＴ59	円形	13×11	5×4	14.7	23.31		
114	ＬＴ59	円形	15×13	8×5	16.1	23.26		
115	ＬＴ59	円形	20×20	8×7	29.1	23.14		
116	Ａ・ＭＢ５	円形	28×26	14×10	32.2	19.32	石器片１点	
117	ＭＡ51	円形	30×24	22×16	13.8	19.66		
118	ＭＢ51	円形	28×22	16×16	24.0	19.58		
119	ＭＢ51	円形	22×20	14×12	38.5	19.29		
120	ＭＦ50	円形	18×14	15×11	17.9	20.86		
121	ＭＦ50	円形	28×27	22×20	16.4	20.78		
122	ＭＥ50	円形	34×29	23×16	24.0	20.84		
123	ＭＥ50	円形	20×20	18×18	17.7	20.94		
124	ＭＥ50	円形	22×18	18×15	11.7	20.67		
125	ＭＤ50	略円形	27×23	15×13	13.3	19.81		
126	ＭＤ50	略円形	25×22	18×17	12.6	19.72		
127	ＭＤ49	円形	22×19	11×10	23.4	19.54		
128	ＭＤ49	円形	32×30	20×16	11.9	19.66		
129	ＭＤ49	円形	20×19	10×9	32.6	19.37		
130	ＭＦ50	円形	21×16	9×8	13.7	20.77		
131	ＭＥ51	円形	24×23	17×15	7.5	21.03		
132	ＭＥ51	楕円形	54×41	14×13	44.5	20.67		
133	ＭＣ52	略円形	40×36	10×9	66.3	20.42		
134	ＭＣ53	楕円形	42×32	29×24	18.1	21.94		
135	ＭＣ53	略円形	33×28	20×17	10.7	21.63		
136	ＭＣ52	楕円形	18×15	9×8	20.5	20.70		
137	ＭＣ52	楕円形	34×23	10×7	39.8	20.28		
138	ＭＣ52	楕円形	34×21	33×17	19.7	20.54	土師器片１点	
139	ＭＤ52	円形	25×24	15×13	21.5	20.81		
140	ＭＤ52	略円形	32×26	18×17	12.8	20.96		
141	ＭＣ52	楕円形	22×19	12×11	52.6	20.28		
142	ＭＧ48	円形	22×20	12×12	16.7	18.78		
143	ＭＧ48	円形	35×31	24×23	31.4	18.74		
144	ＭＧ48	円形	18×16	10×9	24.5	18.85		
145	ＭＦ48	円形	30×28	16×15	14.2	19.12		
146	ＭＦ48	円形	32×28	20×18	30.7	19.03		
147	ＭＦ48	円形	20×19	14×12	12.6	19.30		
148	ＭＦ48	楕円形	34×23	30×18	7.0	19.11		
149	ＭＦ49	略円形	46×39	33×26	27.7	19.24		
150	ＭＥ48	円形	27×25	15×13	30.3	19.93		
151	ＭＥ48	方形	24×20	15×13	16.3	19.26		
152	欠番							
153	ＭＥ48	楕円形	29×21	16×13	28.7	19.10		
154	ＭＧ49	円形	27×24	17×15	17.0	19.66		
155	ＭＧ48	円形	35×34	23×20	16.1	19.21		
156	ＭＧ48	円形	11×10	7×6	22.7	18.96		
157	Ｆ・ＭＧ４	円形	32×27	21×17	10.3	19.10		
158	ＭＢ51	円形	28×26	20×18	41.4	19.50		
159	ＭＣ51	円形	30×26	18×17	28.8	19.92		
160	Ｇ47・４	楕円形	22×15	9×8	25.3	18.64		
161	ＭＧ47	円形	27×24	15×14	21.5	18.62		
162	ＭＨ45	円形	30×27	25×21	16.4	18.06		
163	ＭＨ45	略円形	29×21	22×19	30.4	17.88	土師器片１点	
164	ＭＨ45	円形	35×28	30×26	8.0	18.09		
165	ＭＨ45	楕円形	15×10	11×9	14.3	18.02		
166	ＭＨ45	円形	22×20	19×18	18.4	17.97		
167	ＭＦ46	円形	25×25	18×16	13.2	18.26		
168	Ｆ45・４	略円形	33×25	22×18	12.1	18.26		
169	ＭＦ45	円形	28×27	21×19	18.5	18.15		
170	Ｆ・ＭＧ４	円形	27×23	16×15	12.1	18.19		

第６表　柱穴様ピット一覧（４）

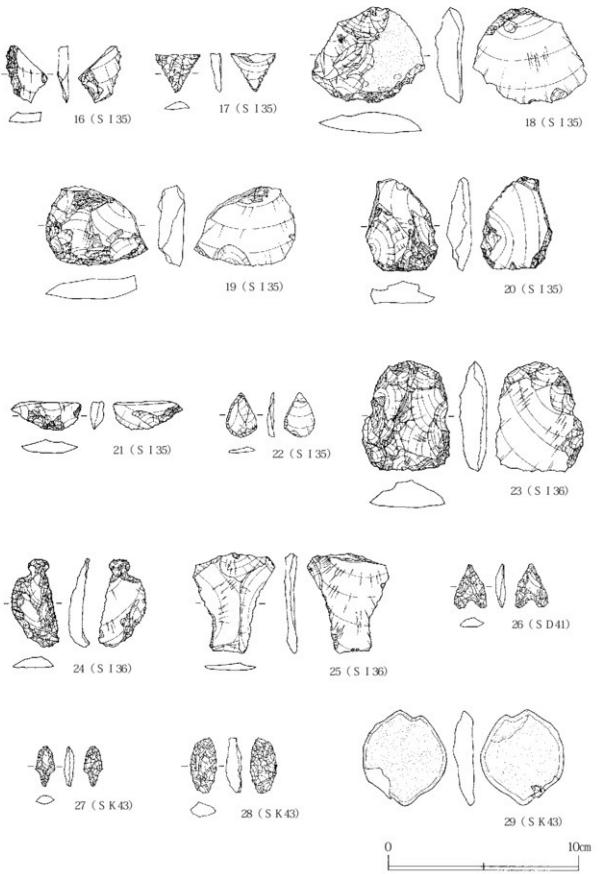
番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物	備　考
171	ＭＧ45	円形	19×18	14×13	12.0	18.02		
172	ＭＦ47	円形	34×32	25×24	13.7	18.82		
173	ＭＦ47	楕円形	64×33	23×22	26.4	18.66		
174	ＭＦ47	円形	28×21	18×12	14.9	18.76		
175	ＭＦ46	楕円形	65×39	26×18	28.4	18.35	石器片１点	
176	ＭＦ47	円形	23×20	15×13	16.2	18.94		
177	ＭＦ48	円形	19×18	9×8	23.7	18.91		
178	ＭＦ48	円形	24×22	10×10	44.9	18.74		
179	ＭＦ48	円形	22×21	13×11	31.5	18.92		
180	ＭＧ45	円形	22×21	11×9	22.6	18.13		
181	ＭＧ45	楕円形	54×43	20×19	48.7	17.82		
182	ＭＧ45	円形	45×39	20×18	10.5	18.06		ＳＫＰ183と切りあう
183	ＭＧ45	円形	40×35	19×14	4.3	18.10		ＳＫＰ182と切りあう
184	ＭＧ45	円形	24×23	15×10	12.1	18.08		
185	ＭＧ45	円形	25×21	15×14	17.4	18.08		
186	ＭＧ45	円形	25×19	20×13	12.2	18.17		
187	ＭＧ45	円形	25×24	10×9	30.5	18.01		
188	ＭＧ45	円形	34×30	23×23	21.5	18.08		
189	ＭＧ45	円形	34×33	24×18	21.1	18.07		
190	ＭＧ45	略円形	47×35	32×22	13.2	18.17		
191	ＭＦ47	円形	18×16	10×10	11.8	18.67		
192	ＭＥ47	円形	26×25	18×18	10.9	18.87		
193	ＭＦ47	円形	27×23	15×15	18.5	18.85		
194	ＭＦ46	略円形	34×30	21×15	8.1	18.49		
195	ＭＦ47	円形	21×18	10×9	35.2	18.44		
196	ＭＧ47	円形	31×29	18×17	42.4	18.37		
197	ＭＦ46	円形	17×16	11×10	12.6	18.61		
198	Ｆ46・４	円形	20×19	15×8	6.0	18.71		
199	ＭＦ47	円形	20×19	15×13	7.5	18.73		
200	ＭＧ45	円形	38×34	25×20	12.1	18.04		ＳＫ76と重複
201	ＭＧ45	楕円形	50×40	34×21	30.1	17.93		
202	ＭＧ45	楕円形	58×45	32×27	35.2	17.96		
203	ＭＦ47	円形	19×17	9×9	14.5	18.60		
204	ＭＦ47	円形	24×21	16×15	21.8	18.52		
205	ＭＥ47	円形	22×20	14×13	16.0	18.98		
206	ＭＥ47	円形	25×23	18×17	15.1	19.06		
207	ＭＥ46	略円形	25×21	20×14	7.2	18.65	石器片１点	
208	ＭＥ46	円形	21×19	15×11	15.1	18.48		
209	ＭＥ46	円形	28×23	20×15	9.9	18.43		
210	ＭＥ47	円形	21×20	15×14	8.9	19.06		
211	欠番							
212	ＭＥ47	楕円形	65×33	10×9	24.9	18.78		
213	ＭＣ47	円形	34×32	13×9	25.2	18.94		
214	欠番							ＳＢ96
215	欠番							ＳＢ96
216	ＭＦ46	円形	26×25	21×19	8.3	18.51		
217	ＭＧ44	楕円形	38×29	32×22	13.2	17.75		
218	ＭＦ44	略円形	29×22	18×12	19.1	17.74	土師器片１点	
219	欠番							ＳＢ96
220	ＭＨ44	円形	34×28	21×15	21.4	17.75		
221	ＭＨ44	円形	32×29	27×22	14.7	17.76		
222	ＭＧ44	円形	25×20	18×12	8.2	17.60		
223	Ｇ43・４	円形	26×24	18×15	21.8	17.33		
224	ＭＧ42	円形	23×19	11×9				
225	ＭＨ42	円形	26×25	17×15	15.3	16.75		
226	ＭＨ41	円形	26×25	19×12	15.2	16.92		
227	ＭＨ41	円形	35×30	27×20	20.1	16.87		
228	ＭＧ41	円形	25×23	18×16	12.0	16.79		
229	ＬＳ60	円形	25×24	18×18	11.3	23.83		
230	ＬＴ59	楕円形	30×24	14×8	20.3	23.66		

第７表　柱穴様ピット一覧（５）

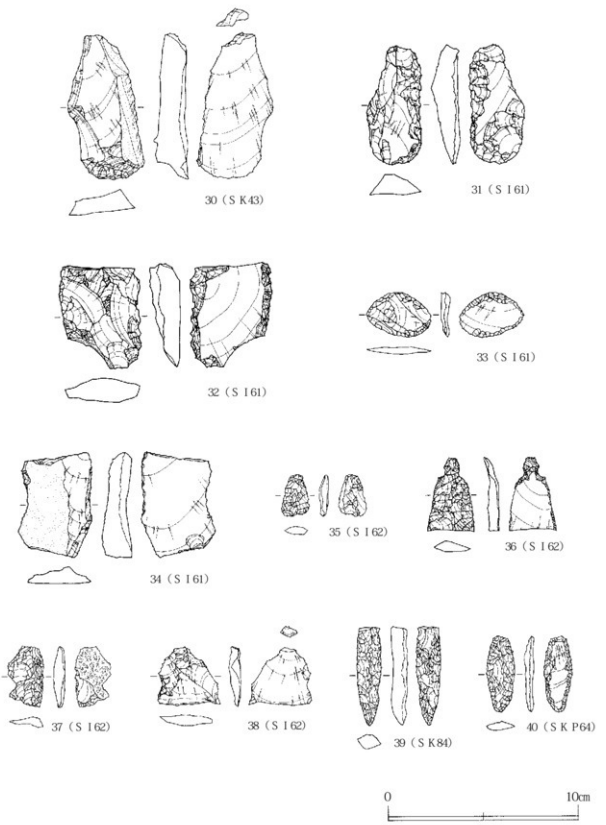
番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物	備　考
231	ＬＴ60	円形	24×20	18×16	41.6	23.44		
232	ＬＴ59	楕円形	14×８	８×４	8.5	23.59		
233	ＬＴ59	楕円形	24×16	16×10	18.8	23.49		
234	ＭＧ40	円形	19×15	14×10	9.6	16.65		
235	ＭＧ41	円形	21×18	15×14	13.0	16.83		
236	ＬＲ53	円形	30×28	20×18	33.2	20.29		
237	ＬＳ54	略円形	34×24	16×13	30.5	20.57		
238	ＭＢ44	円形	20×20	15×13	13.8	18.10		
239	Ａ・ＭＢ４	円形	23×21	20×18	19.3	18.07		
240	ＭＢ45	円形	19×16	13×12	11.7	18.29		
241	ＭＡ45	円形	22×18	17×13	7.7	18.27		
242	ＬＳ60	円形	30×24	22×20	29.4	23.60		
243	ＬＳ60	楕円形	32×22	26×16	16.9	23.79		
244	欠番							ＳＢ96
245	欠番							ＳＢ96
246	欠番							ＳＢ96
247	欠番							ＳＢ96
248	欠番							ＳＢ96
249	ＭＡ46	円形	28×25	15×14	31.1	18.11		
250	ＬＴ46	円形	19×17	13×12	11.1	18.33		
251	ＭＡ46	円形	22×20	15×14	11.6	18.25		
252	ＬＴ47	円形	27×26	23×22	14.6	18.57		
253	ＬＴ47	円形	19×17	８×７	8.5	18.58		
254	Ｓ・ＬＴ４	円形	15×14	12×９	13.0	19.49		
255	ＭＡ46	円形	24×23	20×18	8.7	18.43		
256	ＭＤ53	楕円形	43×33	30×25	42.8	21.04		
257	ＭＦ48	略円形	51×43	37×27	32.3	18.79		
258	欠番							ＳＢ96
259	ＭＦ42	楕円形	36×28	14×12	14.4	17.41		
260	ＭＦ42	円形	38×36	20×14	21.3	17.30		
261	ＭＦ42	円形	32×28	22×18	18.2	17.29		
262	Ｆ41・４	楕円形	22×16	18×12	23.6	17.22		
263	ＭＥ42	円形	32×30	16×12	15.3	17.49		
264	ＭＤ42	楕円形	48×28	26×20	41.8	17.26		
265	Ｄ・ＭＥ４	楕円形	42×30	36×26	15.4	17.61		
266	ＭＥ42	略円形	26×20	14×12	31.4	17.48		
267	ＭＤ42	円形	28×26	22×20	15.5	17.67		
268	ＭＥ42	円形	26×24	20×14	29.2	17.46		
269	ＭＥ43	楕円形	80×24	20×16	45.1	17.29		
270	ＭＥ43	円形	34×32	30×22	14.4	17.56		
271	ＭＦ43	円形	44×40	26×24	7.1	17.62		
272	Ｅ・ＭＦ４	円形	28×26	24×22	7.3	17.64		
273	ＭＦ43	円形	20×18	16×14	5.9	17.67		
274	ＭＦ43	楕円形	38×28	30×16	13.9	17.57		
275	ＭＦ43	円形	18×16	14×12	7.2	17.63		
276	ＭＦ43	円形	42×38	34×30	40.2	17.36		
277	ＭＦ43	円形	24×20	20×16	34.2	17.47		
278	欠番							
279	欠番							
280	ＭＦ44	円形	31×29	18×18	17.0	18.23		ＳＩ35と重複
281	欠番							
282	ＬＳ61	楕円形	15×24	５×10	6.1	24.08	なし	ＳＤ28と重複
283	ＬＳ61	楕円形	32×26	20×14	35.1	24.21		ＳＫ45と重複
284	ＬＴ60	円形	29×32	26×28	27.1	23.60		
285	ＬＴ60	楕円形	20×14	14×10	26.7	23.61		
286	ＬＴ60	楕円形	20×16	14×12	39.6	23.47		
287	ＬＴ60	円形	22×20	14×12	31.8	23.70		
288	ＬＴ60	定楕円	推定	推定	37.8	23.48		一部調査区外
289	ＭＨ41	円形	26×26	20×19	30.3	16.46		ＳＫ34と重複
290	ＬＱ61	楕円形	64×34	18×10	31.0	26.81		
291	ＭＤ43	円形	22×20	18×16	15.6	17.91		
292	ＭＥ43	方形	26×26	22×22	20.8	17.71		
293	ＭＥ４	楕円形	26×30	20×24	24.0	17.68		
294	ＭＧ45	方形	53×56	43×44	39.5	17.76		
295	ＭＧ46	方形	32×36	20×24	35.8	18.25		
296	ＭＤ４	円形	22×22	16×14	10.9	17.91		
297	ＭＥ４	楕円形	38×29	27×22	22.0	17.72		ＳＩ35と重複
298	ＬＳ53	楕円形	24×20	14×14	17.9	20.48		
299	ＬＳ53	楕円形	44×24	22×22	16.6	20.52		
300	ＭＦ47	楕円形	63×34	11×11	32.3	18.70		
301	ＬＴ52	楕円形	23×20	18×16	18.1	19.9		ＳＤ46と重複
302	ＭＣ48	楕円形	28×24	18×17	12.7	19.33		ＳＤ83と重複



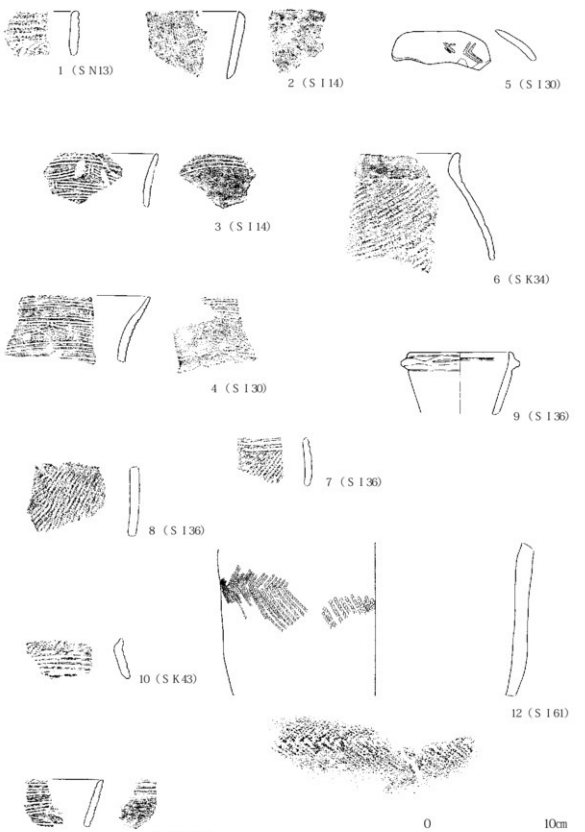
第47図　遺構内出土石器（１）



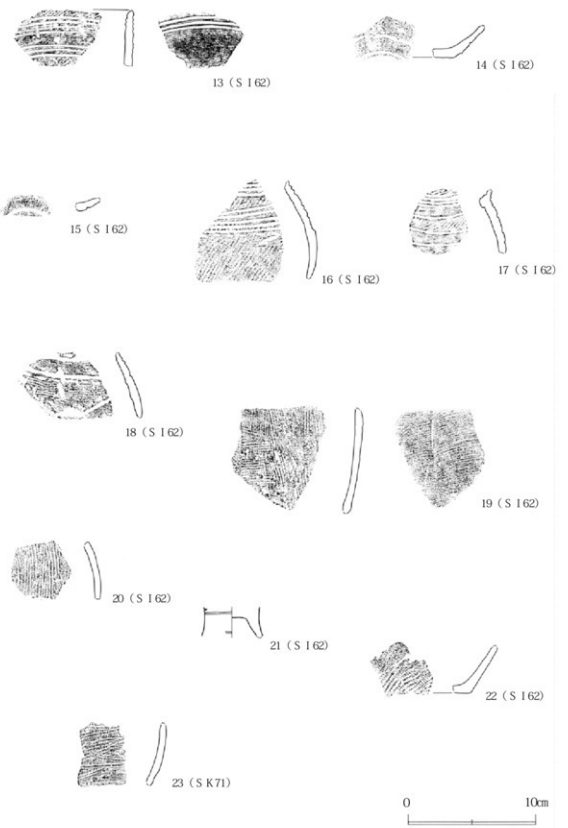
第48図　遺構内出土石器（２）



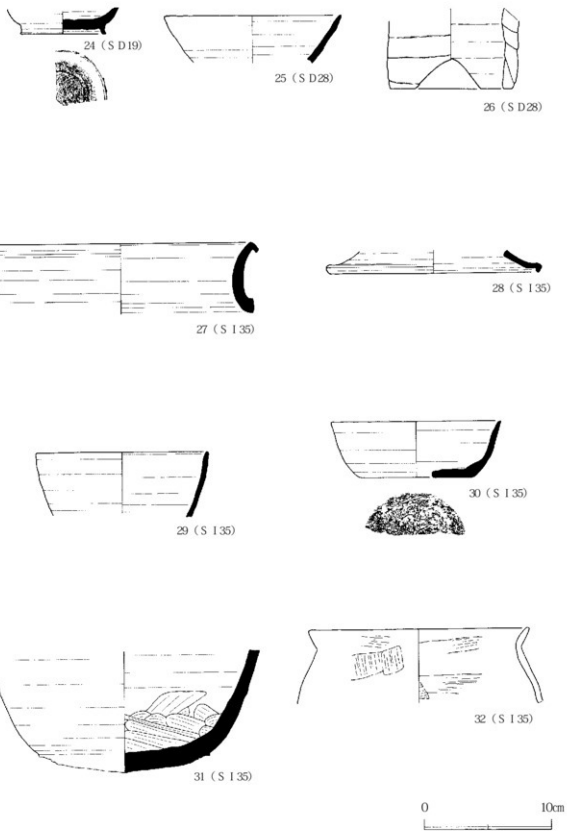
第49図　遺構内出土石器（３）



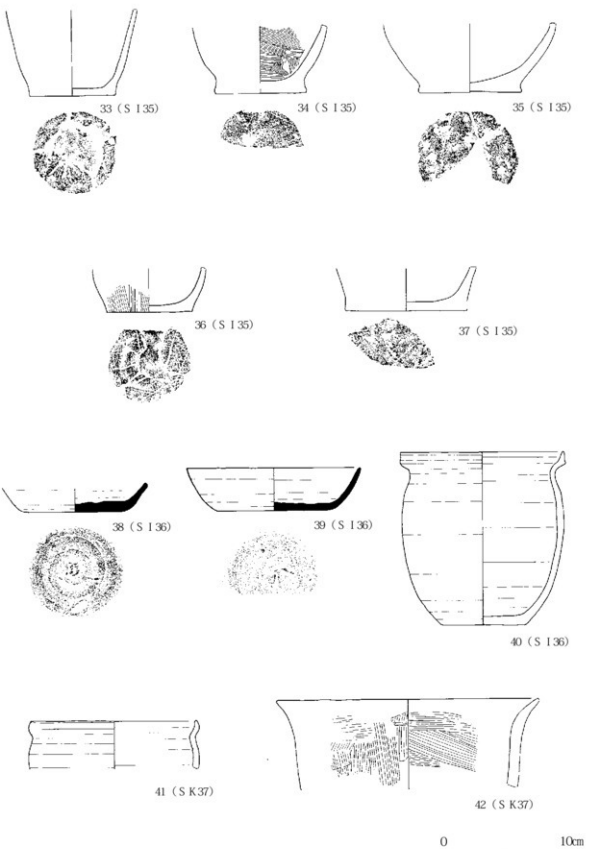
第50図　遺構内出土土器（縄文・弥生）（１）



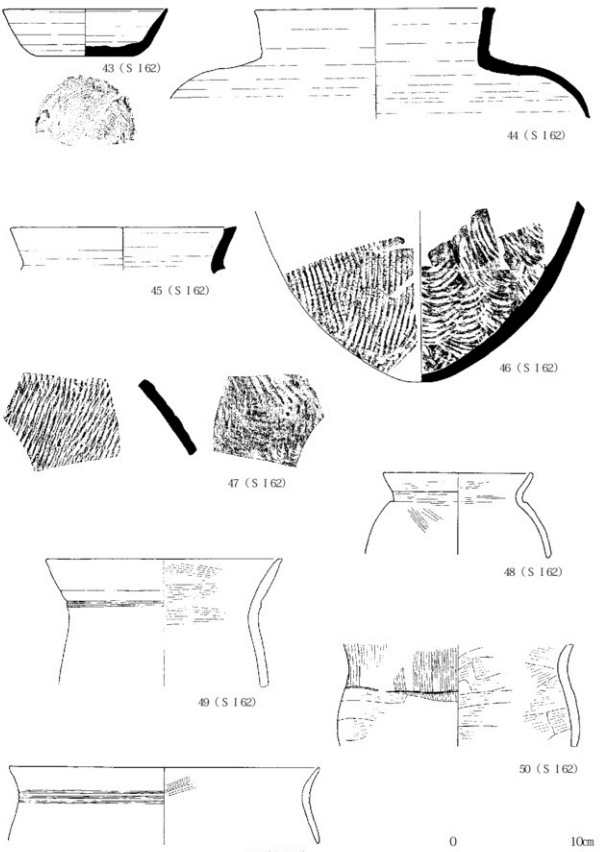
第51図　遺構内出土土器（縄文・弥生）（２）



第52図　遺構内出土遺物（古代）（１）



第53図　遺構内出土遺物（古代）（２）



第54図　遺構内出土遺物（古代）（３）

52（S I64）

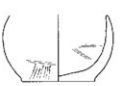
53（S I64）

54（S I64）

55（S K71）

56（S K85）

57（S K71）



58（S K85）

59（S K94）

61（S B98）

60（S B98）

第55図　遺構内出土遺物（古代）（４）

第８表　遺構内出土石器一覧

挿図番号	図版番号	遺構	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質
47－1	9－40	ＳＫ13	石錘	6.6	8.4	3.2	217.2	輝石安山岩
47－2	9－36	ＳＩ14	石錐	6.1	3.9	1.0	24.9	珪質頁岩
47－3		ＳＩ14	掻器	3.6	1.4	1.0	3.9	珪質頁岩
47－4	9－15	ＳＩ17	石鏃	2.2	1.8	0.4	0.9	黒曜石
47－5		ＳＩ17	石錐	2.7	0.9	0.5	1.1	珪質頁岩
47－6		ＳＩ17	石錐	3.5	2.0	0.9	4.5	珪質頁岩
47－7		ＳＩ20	掻器	4.7	3.4	1.0	10.0	珪質頁岩
47－8		ＳＩ20	掻器	2.8	2.7	0.6	4.2	珪質頁岩
47－9		ＳＩ30	石鏃	4.3	1.3	0.8	4.0	珪質頁岩
47－10		ＳＩ35	石槍	2.1	1.7	0.8	2.3	珪質頁岩
47－11		ＳＩ35	石錐	5.5	4.1	1.7	43.5	珪質頁岩
47－12		ＳＩ35	石錐	2.1	2.9	0.9	5.4	珪質頁岩
47－13		ＳＩ35	石錐	3.2	1.0	0.5	1.3	珪質頁岩
47－14		ＳＩ35	石匙	3.2	2.3	0.6	4.6	珪質頁岩
47－15		ＳＩ35	掻器	7.3	3.0	1.4	28.7	珪質頁岩
48－16		ＳＩ35	掻器	3.0	2.3	0.6	3.1	珪質頁岩
48－17		ＳＩ35	掻器	2.1	2.3	0.6	1.8	珪質頁岩
48－18		ＳＩ35	掻器	5.1	6.0	1.5	37.3	珪質頁岩
48－19		ＳＩ35	掻器	4.3	5.4	1.4	31.9	珪質頁岩
48－20		ＳＩ35	掻器	3.8	4.9	1.3	19.2	珪質頁岩
48－21		ＳＩ35	掻器	1.5	3.7	0.7	3.8	珪質頁岩
48－22		ＳＩ35	掻器	2.4	1.2	0.4	1.0	珪質頁岩
48－23		ＳＩ36	石錐	5.8	4.6	1.5	41.3	流紋岩
48－24		ＳＩ36	石匙	4.6	2.2	0.8	7.1	珪質頁岩
48－25		ＳＩ36	ＵＦ	5.3	4.3	0.7	10.3	珪質頁岩
48－26		ＳＤ41	石鏃	2.3	1.7	0.5	1.6	珪質頁岩
48－27		ＳＫ43	石鏃	2.1	1.0	0.5	0.8	珪質頁岩
48－28		ＳＫ43	石鏃	2.9	1.4	0.8	3.0	珪質頁岩
48－29		ＳＫ43	石錘	7.5	6.6	1.6	74.7	輝石安山岩
49－30		ＳＫ43	掻器	7.7	3.6	1.8	42.3	珪質頁岩
49－31		ＳＩ61	石錐	6.3	2.8	1.2	21.5	珪質頁岩
49－32		ＳＩ61	掻器	5.5	4.3	1.6	35.3	珪質頁岩
49－33		ＳＩ61	掻器	2.4	3.4	0.5	3.4	珪質頁岩
49－34		ＳＩ61	ＵＦ	5.6	3.7	1.9	26.8	珪質頁岩
49－35		ＳＩ62	石鏃	2.2	1.4	0.5	1.6	珪質頁岩
49－36		ＳＩ62	石匙	3.9	2.5	0.8	4.7	珪質頁岩
49－37		ＳＩ62	ＲＦ	3.2	1.9	0.6	2.9	珪質頁岩
49－38		ＳＩ62	ＵＦ	3.1	3.3	0.7	5.7	珪質頁岩
49－39		ＳＫ84	石錐	5.2	1.3	0.9	7.0	珪質頁岩
49－40		ＳＫＰ64	石錐	4.0	1.5	0.5	3.3	珪質頁岩

第９表　遺構内出土縄文・弥生土器一覧

掲図番号	図版番号	出土位置	時代	器　種	部　位	色　調 外　面	色　調 内　面	備　考
50－1		S N13	縄文	深鉢	口縁部	7.5Y R5／2 灰褐	10Y R4／2 灰黄褐	
50－2		S 114	弥生	甕	口縁部	2.5Y4／1 黄灰	2.5Y R3／1 黒褐	内外ハケ目
50－3		S 114	弥生	浅鉢	口縁部	10Y R6／3 にぶい黄橙	10Y R5／6 黄褐	変形工字文・列点文
50－4	10－50	S 130	弥生	浅鉢	口縁部	2.5Y5／2 暗黄褐	2.5Y R5／1 黄灰	変形工字文・列点文
50－5		S 130	弥生	甕	肩部	10Y R6／4 にぶい黄橙	10Y R5／2 灰黄褐	磨滅・変形工字文か
50－6	10－61	S 134	弥生	甕	口縁部	10Y R6／4 にぶい黄橙	10Y R7／4 にぶい黄橙	口縁部に１条の沈線 体部ＬＲ縄文
50－7		S 136	弥生	甕	肩部	7.5Y R7／4 にぶい橙	10Y R7／4 にぶい黄橙	口縁部に２条以上の沈線 体部ＬＲ縄文
50－8		S 136	弥生	甕	体部	10Y R4／2 灰黄褐	10Y R4／2 灰黄褐	ＬＲ縄文
50－9		S 136	縄文			10Y R5／3 にぶい黄褐	10Y R6／2 にぶい黄橙	
50－10		S K43	弥生	甕	肩部	10Y R7／4 にぶい黄橙	10Y R7／4 にぶい黄橙	４条の沈線文の下位に横列点文 体部ＬＲ縄文
50－11		S K44	弥生	浅鉢	口縁部	10Y R6／2 灰黄褐	10Y R4／1 褐灰	工字部に縄文体部に変形工字文
50－12	7－1	S 161	縄文	深鉢形	体部	7.5Y R5／8 明褐	7.5Y R6／8 橙	
51－13	10－51	S 162	弥生	浅鉢	口縁部	10Y R6／3 にぶい黄橙	10Y R6／3 にぶい黄橙	ＬＲ縄文→平行沈線→沈線間磨消縄文
51－14	10－60	S 162	弥生	浅鉢	体～底部	5Y R6／6 橙	5Y R6／6 橙	平行沈線間にハケ目を残す （15と同一個体）
51－15		S 162	弥生	浅鉢	体～底部	5Y R6／6 橙	5Y R6／6 橙	平行沈線間にハケ目を残す （14と同一個体）
51－16	10－58	S 162	弥生	甕	肩部	10Y R5／2 灰黄褐	10Y R5／2 灰黄褐	ＬＲ縄文→平行沈線→横列点文
51－17	10－52	S 162	弥生	甕	肩部	10Y R7／3 にぶい黄橙	10Y R6／3 にぶい黄橙	ＬＲ縄文→平行沈線→沈線間磨消縄文
51－18		S 162	弥生	甕	肩部	10Y R7／4 にぶい黄橙	7.5Y R5／2 灰褐	変形工字文列点文内部に輪積み痕
51－19		S 162	弥生	甕	体部	10Y R3／1 黒褐	10Y R7／4 にぶい黄橙	内外面ハケ目
51－20		S 162	弥生	甕	体部	10Y R5／3 にぶい黄褐	10Y R8／4 浅黄橙	内外面ハケ目
51－21		S 162	弥生	高坏	脚部	10Y R4／2 灰黄褐	10Y R4／1 褐灰	平行沈線
51－22		S 162	弥生	甕	体～底部	10Y R4／1 褐灰	10Y R7／4 にぶい黄橙	ＬＲ縄文
51－23		S K71	弥生	甕	体	10Y R4／1 褐灰	10Y R7／4 にぶい黄橙	外面ハケ目

第10表　遺構内出土須恵器・土師器一覧

掲図番号	図版番号	遺構	種別	器　種	部　位	内外面調整	底部切り離し	備　考
52－24		S D19	須恵器	高台付坏	底部	ロクロ調整	回転糸切り	転用硯？
52－25		S D28	須恵器	坏	口縁部	ロクロ調整		
52－26	7－5	S D28	支脚			輪積み痕		
52－27		S 130	須恵器	甕	口縁部	ロクロ調整		
52－28		S 135	須恵器	蓋	口縁部	ロクロ調整		
52－29		S 135	須恵器	坏	口縁部	ロクロ調整		
52－30	8－9	S 135	須恵器	坏	口縁～底部	ロクロ調整	回転糸切り	
52－31		S 135	須恵器	甕	底部	底部ヘラナデ		
52－32		S 135	土師器	甕	口縁部	内面ナデ	外面ハケ目	
53－33		S 135	土師器	甕	底部	摩滅	木葉痕	
53－34		S 135	土師器	甕	底部	内面ハケ目　外面摩滅	木葉痕	
53－35	8－18	S 135	土師器	甕	底部	摩滅	木葉痕	
53－36		S 135	土師器	甕	底部	内面黒色処理　外面ハケ目	木葉痕	
53－37	8－17	S 135	土師器	甕	底部	外面ケズリ→ナデ	木葉痕	
53－38		S 136	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転ヘラ切り	
53－39	8－10	S 136	須恵器	坏	口縁～底部	ロクロ調整	回転ヘラ切り	
53－40	7－3	S 136	土師器	甕		ロクロ調整		
53－41		S K37	土師器	甕	口縁部	ロクロ調整		
53－42		S K47	土師器	甕	口縁部	内外面ハケ目		
54－43		S 162	須恵器	坏	口縁～底部	ロクロ調整		
54－44	8－11	S 162	須恵器	甕	口縁部	ロクロ調整		
54－45		S 162	須恵器	甕	口縁部	ロクロ調整		
54－46		S 162	須恵器	甕	底部	外面タタキ目内面アテ具痕		
54－47		S 162	須恵器	甕	肩部	外面タタキ目内面アテ具痕		
54－48	8－15	S 162	土師器	甕	口縁部	内外面ナデ		口縁部段あり
54－49	8－13	S 162	土師器	甕	口縁部	内外面ハケ目		口縁部沈線あり
54－50	8－14	S 162	土師器	甕	口縁部	外面ナデ　内面ハケメ		口縁部段あり
54－51	8－12	S 162	土師器	甕	口縁部	摩滅		口縁部沈線あり
55－52		S 164	須恵器	蓋	口縁部	ロクロ調整		
55－53	8－8	S 164	須恵器	蓋	口縁部	ロクロ調整		
55－54		S 164	土師器	甕	胴部	外面タタキ目　内面アテ具痕		
55－55	8－16	S K71	土師器	甕	口縁部	外面ヘラケズリ・ナデ　内面ナデ		口縁部段あり
55－56		S K85	土師器	甕	口縁部	外面口縁ナデ・体部ヘラ削り 内面ナデ		
55－57		S K71	土師器	甕	口縁部	外面ヘラケズリ・ナデ　内面ナデ		口縁部段あり
55－58	7－4	S K85	土師器	椀	ほぼ個体	外面ナデ→ヘラケズリ　内面ナデ		
55－59		S K94	須恵器	坏	口縁～底部	ロクロ調整		
55－60		S B98	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転ヘラ切り	
55－61		S B98	須恵器	坏	底部	ロクロ調整		

第３節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製品、土製品、鉄関連遺物である。縄文時代と弥生時代の遺物が、古代の遺構覆土に相当数含まれており、本来あった両時代の包含層は、古代の遺構群の築造時に削平を受けたものと判断できる。

１　縄文時代と弥生時代の遺物

（１）石器（第56～58図）

石器には石鏃、石槍、石篦、石錐、石匙、掻器のほかに剥片がある。石質は、黒曜石である石鏃２以外はすべて頁岩である。

石鏃（１～13）：無茎（１～７）と有茎（８～13）のものがある。１～３は基部が直線的で、１・２では両面に先行剥離面を広く残すが、３は両面に細かな押圧剥離が行われる。４～７は基部が湾曲するもので、先行剥離面を両面に残す４を除けば、両面に細かな押圧剥離が行われる。10～13は最大幅が鏃身のほぼ中央にある棒状を呈した石鏃である。

石槍（14）：両面に二次調整を行い、先端部を薄く作り出し、断面が菱形の石槍である。

石篦（15～20）：素材剥片を主に短冊形にし、背面に二次調整を加えている。主要剥離面には広く先行剥離面を残し、側縁に浅い二次調整を施す。素材剥片の打面側を側縁とするが、打瘤の厚みを除去する作業が行われている。

石錐（21～23）：両面に細かな二次調整を行い、刃部を菱形に作り出した棒状の石錐で、二次調整は全体に及んでいる。21・22の刃部の先端は、使用により摩耗して丸みを帯びている。

石匙（24～29）：いずれも縦形で、主要剥離面にはつまみ部と側縁に二次調整を行うだけで、先行剥離面を広く残している。26を除く５点は素材剥片の打面側をつまみ部としている。

掻器（30～34）：素材剥片の末端ないしは側縁にのみ二次調整を行い刃部を作出したもので、両面に先行剥離面や礫面を広く残している。

（２）縄文時代の土器（第59・60図）

縄文時代の土器には、前期と中期の土器がある。

前期の土器（１～10）：１～３は表裏縄文で、前段多条のＬＲ縄文が施され、胎土に径２㎜以下の砂粒を含むが、繊維は含まない。早稲田５・６類に並行する土器である。

４～10は、わずかに外反する口縁部に、縄文原体の側面圧痕や絡条体圧痕が施され、体部には羽状縄文や斜縄文が付される。胎土は緻密で、繊維は含まない。円筒下層ｄ式である。

中期の土器（11・12）：深鉢形土器の波状口縁部の橋状把手部分で、同一個体である。波頂部から「八」の字に広がる隆帯は、口縁部文様帯と体部を区画するものである。波頂部の内面には隆帯により渦巻文が付される。新崎・真保式などの北陸系土器の影響を受けた土器である。

（３）弥生時代の土器（第60～62図）

弥生土器には蓋、高坏形土器、浅鉢形土器、鉢形土器、壺形土器、甕形土器がある。

蓋（13）：外面に平行沈線で同心円を描き、内面にはミガキを行っている。厚さ４㎜ほどだが、端部がわずかに肥厚する。直径９㎝ほどの蓋になるものである。

高杯形土器(14・15・17)：14は高坏形土器の脚部である。脚端部を巡る沈線と脚体部に施されるＬＲ縄文の間に刺突列が一条巡る。また、脚部と杯部の屈曲部には、列点文を施している。15・17は大きく外反する杯部の体部下半と口縁部で、平行沈線で無文部とＬＲ縄文部を区画している。

壺形土器(18・24・26)：18は器面全面に平行沈線で変形工字文が描かれるものであろう。26は大形壺形土器の体部破片で、器面全体にミガキを行った後に、左右を短沈線で挟んだ３本一組の平行沈線が垂下する。

鉢形土器(27・28・30～32)：内湾する口縁部から膨らみのある体部に至る器形で、無文の口縁部と縄文のある体部とは２ないしは３条の平行沈線で画される。体部の縄文は、ＬＲ縄文原体の横位回転による。32は口縁部下端の平行沈線から、体部上半に２条１組の沈線が「八」の字状に施される。

甕形土器(19～23・25・29・33～41)：外反する口縁から、上半に最大径をもつ膨らみのある体部に至る器形である。鉢形土器と同様に、無文の口縁部と縄文が施される体部とは、やはり２ないし３条の平行沈線で画される。体部の縄文もＬＲ縄文原体の横位から斜位回転で施されている。

２．古代の遺物

（１）須恵器(第63・64図)

須恵器には、蓋、杯、高台付杯、高台付皿、壺、甕がある。

蓋(46)：端部をわずかに折り返した蓋で、色調が褐色から茶褐色を呈している。

杯(47～57)：底部から直線的に立ち上がる器形で、底部の切り離しは回転糸切(51～53)とヘラ切(54～57)があり、底径は後者が大きい。54の底部には墨書がある。

高台付杯(59～61)：体部下端に丸みのある杯に、わずかに開く高台部の付くものである。

高台付皿(58)：水平に近い底部から大きく外反する体部に至る皿に、外開きの高台が付く。

壺(62・64・65)：62は小形の短頸壺で、直立する短い頸部から水平に張り出した肩部が特徴的である。64は丸みある肩部破片で、65は高台付壺の高台部と考えられ、全体的に緑黄色の自然釉が見られる。

甕(63・66・67)：「く」の字形に屈曲する口縁から上半に最大径のある体部に至る器形である。

（２）土師器(第65・66図)

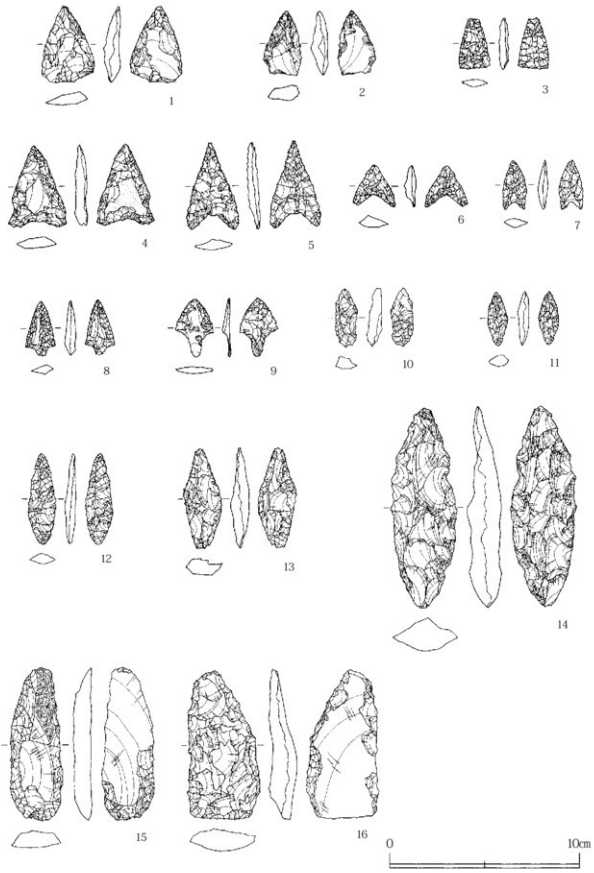
土師器には坏と甕がある。

杯(23・24)：外反する口縁から膨らみのある底部に至る器形で、内面が黒色処理されている。

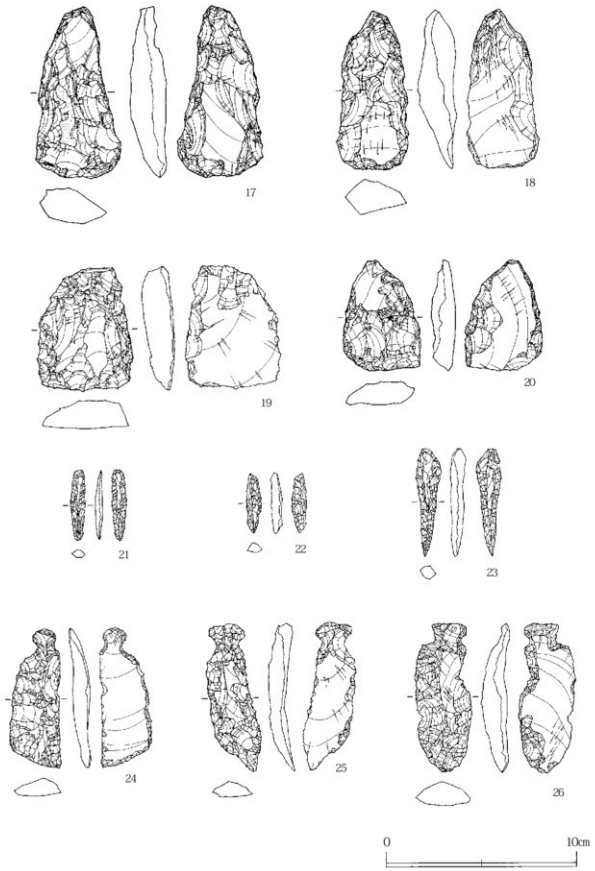
甕(70～82)：70～72・75の口縁は幅があり大きく外反していて、長胴の甕と思われる。70は体部全面に縦方向のハケ目が残り、口縁と体部の境に段がある。71の外面にはタタキ目が残る。74・76は外反する口縁に、平坦で外傾する口唇部のある小形の甕である。77・78も小形の甕であるが、口縁部はわずかに内湾し、口唇部は丸みを帯びている。

（３）紡錘車(第66・83・84図)

83は土製の、84は石製の紡錘車で、84の上面は極めて光沢がある。

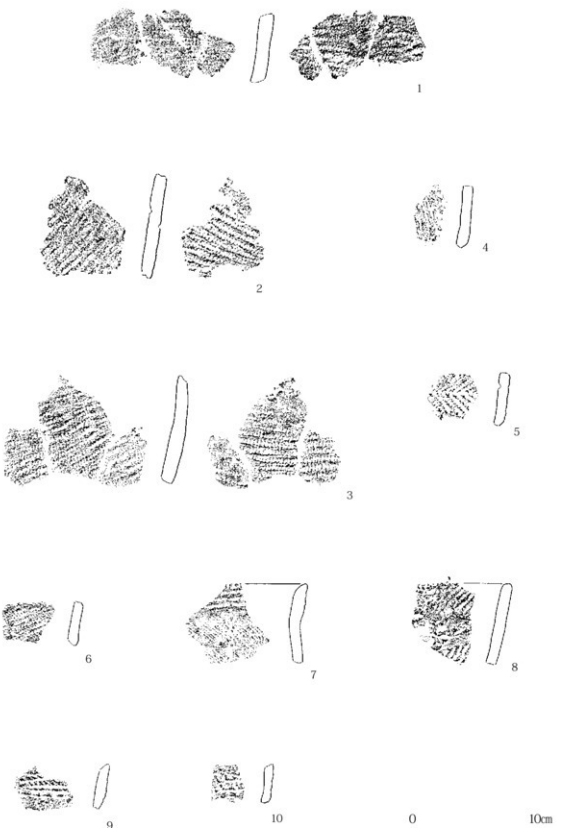


第56図　遺構外出土石器（１）

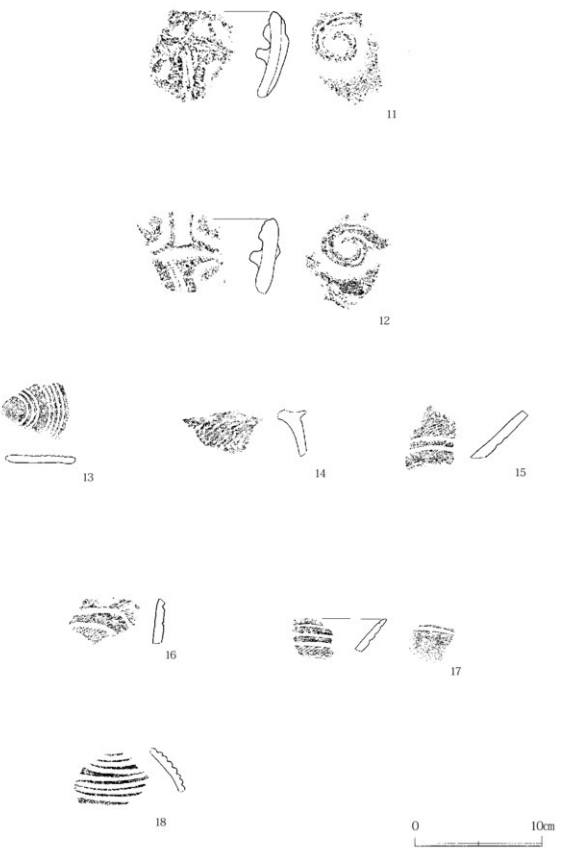


第57図　遺構外出土石器（２）

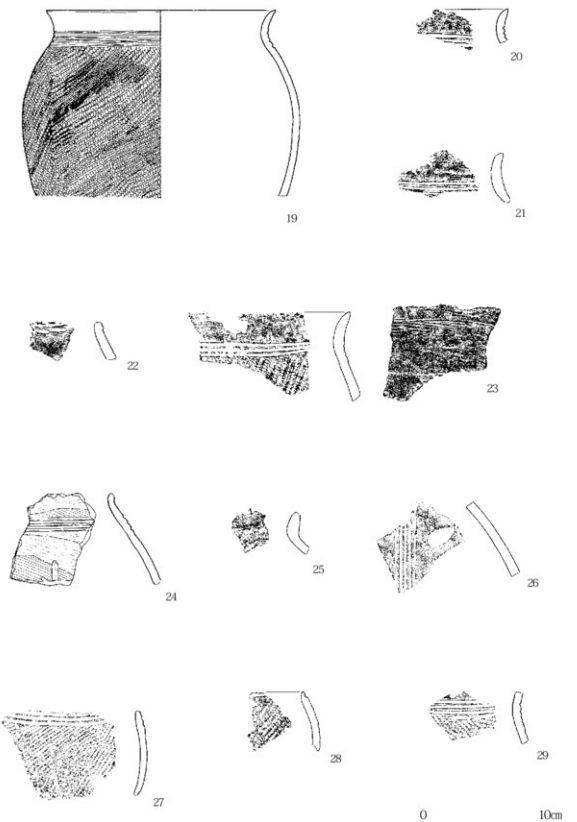
第58図　遺構外出土石器（３）



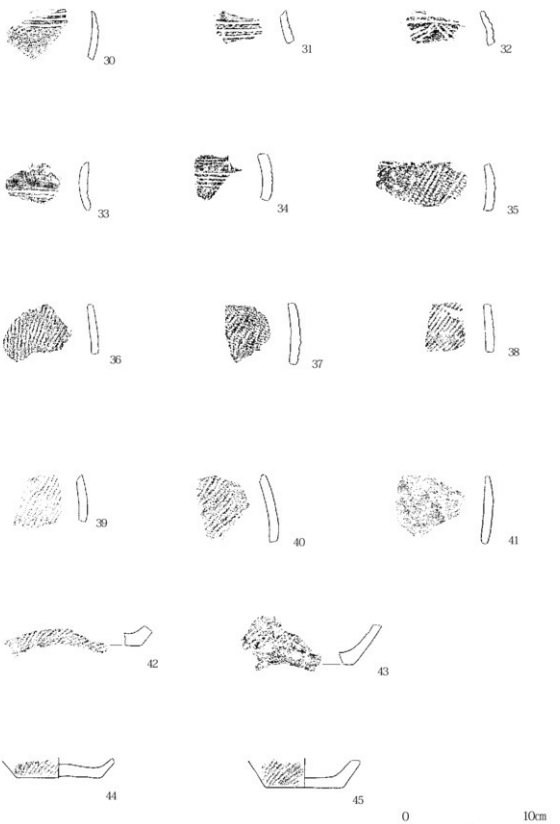
第59図　遺構外出土土器（縄文・弥生）（１）



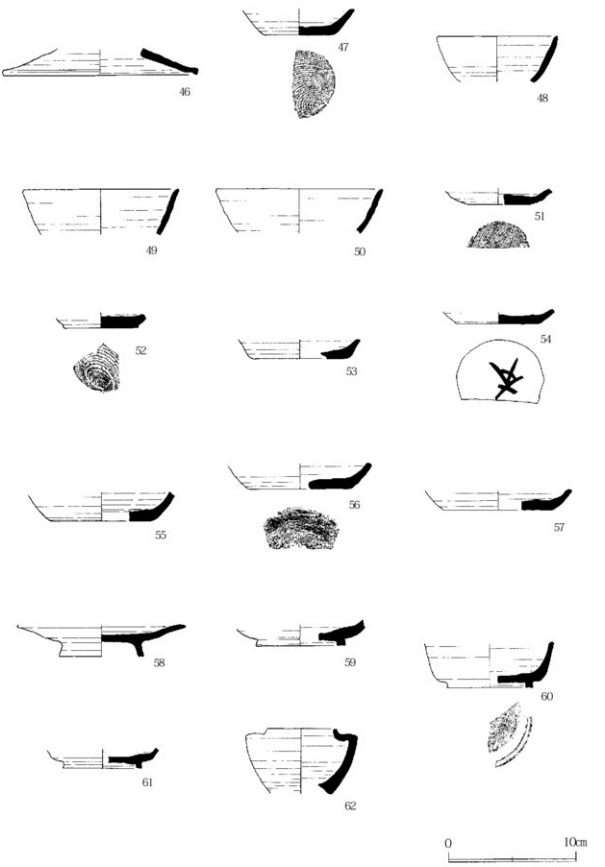
第60図　遺構外出土土器（縄文・弥生）（２）



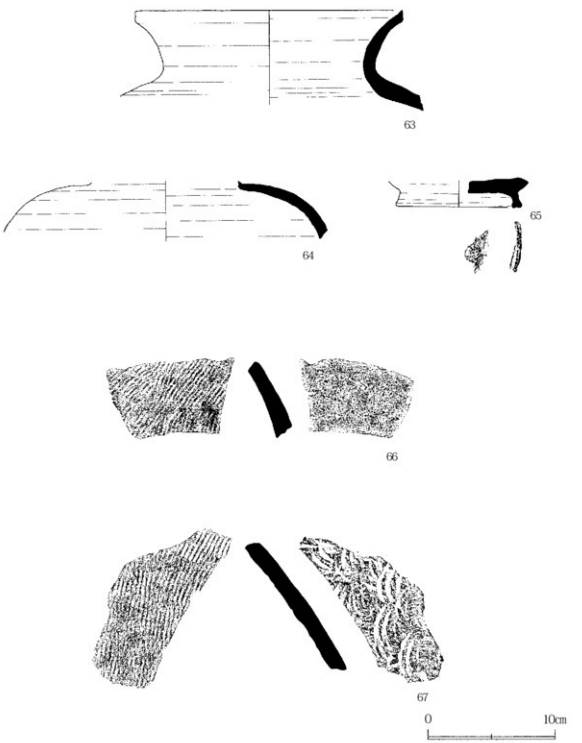
第61図　遺構外出土土器（縄文・弥生）（３）



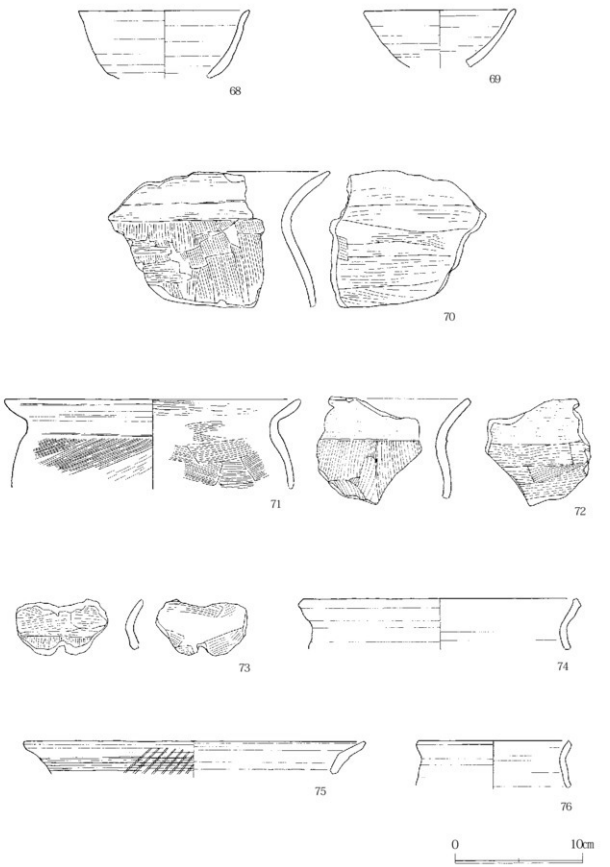
第62図　遺構外出土土器（縄文・弥生）（４）



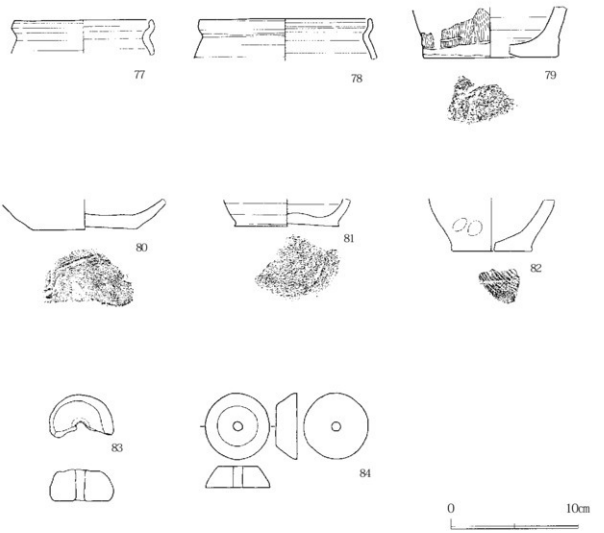
第63図　遺構外出土遺物（古代）（１）



第64図　遺構外出土遺物（古代）（２）



第65図　遺構外出土遺物（古代）（３）



第66図　遺構外出土遺物（古代）（４）

第11表　遺構外出土石器一覧

挿図番号	図版番号	出土位置	器　種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質
56－1		ＭＥ46	石鏃	4.0	2.7	0.9	8.5	珪質頁岩
56－2		４Ｔ	石鏃	3.4	2.0	0.9	4.8	珪質頁岩
56－3		表採	石鏃	2.6	1.6	0.4	1.8	珪質頁岩
56－4		表採	石鏃	4.2	3.0	0.7	7.1	珪質頁岩
56－5	5	ＭＡ49	石鏃	4.6	2.7	0.6	4.7	珪質頁岩
56－6	4	ＬＴ57	石鏃	2.2	2.2	0.6	1.3	珪質頁岩
56－7		表採	石鏃	2.5	1.3	0.4	1.5	珪質頁岩
56－8	3	ＬＳ56	石鏃	3.0	1.6	0.6	1.9	珪質頁岩
56－9	2	ＬＴ56	石鏃	3.1	2.0	0.3	1.2	黒曜石
56－10	8	表採	石鏃	3.1	1.1	0.7	2.5	黒曜石
56－11		表採	石鏃	2.9	1.1	0.6	1.7	珪質頁岩
56－12	6	表採	石鏃	4.8	1.5	0.6	3.3	珪質頁岩
56－13	7	ＭＥ52	石鏃	5.3	1.9	0.9	8.4	珪質頁岩
56－14	9	ＭＡ58	石槍	10.6	3.5	1.8	50.7	珪質頁岩
56－15	17	ＬＲ51	石錐	8.1	2.8	1.0	25.0	珪質頁岩
56－16	15	ＭＥ42	石錐	7.8	3.8	1.4	41.6	珪質頁岩
57－17	19	ＬＴ58	石錐	9.0	4.5	1.9	66.5	珪質頁岩
57－18	16	ＬＲ55	石錐	8.4	3.8	2.1	60.5	珪質頁岩
57－19		ＭＡ50	石錐	6.5	5.1	1.7	65.0	珪質頁岩
57－20		ＭＥ42	石錐	5.9	4.0	1.3	30.2	珪質頁岩
57－21		ＬＴ59	石錐	3.8	0.8	0.4	1.2	珪質頁岩
57－22		表採	石錐	3.2	0.8	0.6	1.5	珪質頁岩
57－23		ＬＲ54	石錐	5.6	1.3	0.7	4.5	珪質頁岩
57－24	12	ＭＥ43	石匙	7.3	2.7	1.1	17.2	珪質頁岩
57－25	11	ＬＲ53	石匙	7.8	2.4	1.1	17.2	珪質頁岩
57－26	10	ＭＥ54	石匙	7.9	3.0	1.5	27.5	珪質頁岩
58－27	13	ＭＡ59	石匙	5.4	2.6	0.9	8.7	珪質頁岩
58－28	14	ＭＤ40	石匙	3.9	4.9	0.7	7.5	珪質頁岩
58－29		ＬＴ56	石匙	3.3	3.2	0.7	4.8	珪質頁岩
58－30		ＬＴ51	スクレイパー	4.1	2.3	1.0	8.4	珪質頁岩
58－31		ＭＣ53	スクレイパー	4.2	2.9	1.0	10.5	珪質頁岩
58－32	21	ＬＴ60	スクレイパー	5.0	5.3	1.8	53.1	黒曜石
58－33	20	ＭＥ52	スクレイパー	4.5	3.9	1.6	27.9	珪質頁岩
58－34		ＭＥ50	スクレイパー	13.5	5.5	2.9	136.1	珪質頁岩

第12表　遺構外出土縄文・弥生土器一覧（１）

挿図番号	図版番号	出土位置	時代	器種	部位	色調 外面	色調 内面	備考
59－1	24	ＬＴ60	縄文		体部	7.5Ｙ Ｒ6/6 橙	10Ｙ Ｒ6/6 明黄褐	表裏縄文
59－2		ＬＴ60	縄文		体部	7.5Ｙ Ｒ6/4 にぶい橙	10Ｙ Ｒ4/2 灰黄褐	表裏縄文
59－3	25	ＬＴ60	縄文		体部	10Ｙ Ｒ5/3 にぶい黄褐	10Ｙ Ｒ5/2 灰黄褐	表裏縄文
59－4		ＬＴ57	縄文		体部	10Ｙ Ｒ4/1 褐灰	10Ｙ Ｒ5/2 灰黄褐	
59－5	28	ＬＴ60	縄文		体部	2.5Ｙ3/1 黒褐	2.5Ｙ3/1 黒褐	
59－6	29	ＬＴ57	縄文		体部	2.5Ｙ3/1 黒褐	2.5Ｙ3/1 黒褐	
59－7	26	ＬＴ60	縄文	深鉢	口縁部	7.5Ｙ Ｒ5/4 にぶい褐	10Ｙ Ｒ5/3 にぶい黄褐	
59－8		ＬＲ55	縄文		体部	7.5Ｙ Ｒ6/4 にぶい橙	10Ｙ Ｒ6/4 にぶい黄橙	
59－9	27	ＬＴ58	縄文		体部	7.5Ｙ Ｒ7/4 にぶい橙	5Ｙ Ｒ6/6 橙	
59－10		ＭＦ46	縄文		体部	7.5Ｙ Ｒ6/4 にぶい橙	10Ｙ Ｒ5/3 にぶい黄褐	
60－11	30	ＬＴ58	縄文		体部	7.5Ｙ Ｒ6/3 にぶい褐	10Ｙ Ｒ5/2 灰黄褐	
60－12	31	ＬＴ60	縄文		体部	10Ｙ Ｒ4/2 灰黄褐	10Ｙ Ｒ4/1 褐灰	
60－13	41	ＬＳ52	弥生	蓋		10Ｙ Ｒ4/1 褐灰	10Ｙ Ｒ4/1 褐灰	
60－14		12Ｔ	弥生	高坏	脚部	10Ｙ Ｒ4/1 褐灰	10Ｙ Ｒ5/2 灰黄褐	
60－15	39	ＭＲ50	弥生	浅鉢	体～底部	2.5Ｙ3/1 黒褐	2.5Ｙ4/2 暗灰黄	
60－16		ＭＢ50	弥生	浅鉢	底部	10Ｙ Ｒ5/4 にぶい黄褐	10Ｙ Ｒ3/1 黒褐	
60－17		ＭＢ50	弥生	浅鉢	口縁部	10Ｙ Ｒ3/2 黒褐	10Ｙ Ｒ4/1 褐灰	
60－18	36	ＭＦ41	弥生	壺	体部	10Ｙ Ｒ5/2 灰黄褐	10Ｙ Ｒ5/2 灰黄褐	
61－19		ＬＴ52	弥生	甕	口～体部	10Ｙ Ｒ5/2 灰黄褐	10Ｙ Ｒ7/4 にぶい黄橙	
61－20		ＬＴ54	弥生	甕	口縁部	10Ｙ Ｒ6/4 にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ7/4 にぶい黄橙	

第13表　遺構外出土縄文・弥生土器一覧（２）

挿図番号	図版番号	出土位置	時代	器種	部　位	色　調		備　考
						外　面	内　面	
61－21		ＬＲ53	弥生	甕	口縁部	10Ｙ Ｒ5/2　灰黄褐	10Ｙ Ｒ6/3　にぶい黄橙	
61－22		ＭＡ50	弥生	甕	肩部	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	
61－23	35	ＬＲ53	弥生	甕	口縁部	10Ｙ Ｒ5/3　にぶい黄褐	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	
61－24	45	ＬＴ59	弥生	甕	肩部	10Ｙ Ｒ6/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ6/4　にぶい黄橙	
61－25		ＭＩ40	弥生	甕	肩部	7.5Ｙ Ｒ5/4　にぶい褐	7.5Ｙ Ｒ6/4　にぶい橙	
61－26	37	ＬＲ53	弥生	甕	肩部	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ6/3　にぶい黄橙	
61－27		12Ｔ	弥生	甕	肩部	7.5Ｙ Ｒ6/6　橙	7.5Ｙ Ｒ6/6　橙	
61－28		ＬＲ53	弥生	甕	肩部	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ4/1　褐灰	
61－29		ＬＳ60	弥生	甕	肩部	10Ｙ Ｒ6/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ6/4　にぶい黄橙	
62－30		ＭＡ51	弥生	甕	肩部	10Ｙ Ｒ3/1　黒褐	10Ｙ Ｒ6/4　にぶい黄橙	
62－31		ＬＲ54	弥生	甕	頭部	10Ｙ Ｒ6/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ3/1　黒褐	
62－32		表採	弥生	甕	肩部	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	
62－33		ＬＱ53	弥生	甕	首部	10Ｙ Ｒ5/2　灰黄褐	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	
62－34		ＬＱ53	弥生	甕	肩部	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ6/4　にぶい黄橙	
62－35		ＬＱ53	弥生	甕	肩部	10Ｙ Ｒ7/6　明黄褐	10Ｙ Ｒ6/3　にぶい黄橙	
62－36		ＬＲ54	弥生	甕	体部	7.5Ｙ Ｒ6/6　橙	7.5Ｙ Ｒ6/6　橙	
62－37		ＬＲ53	弥生	甕	体部	10Ｙ Ｒ7/3　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	
62－38		ＭＥ41	弥生	甕	体部	7.5Ｙ Ｒ4/1　褐灰	7.5Ｙ Ｒ5/4　にぶい褐	
62－39		ＬＲ62	弥生	甕	体部	10Ｙ Ｒ6/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ5/4　にぶい黄褐	
62－40		ＭＡ49	弥生	甕	体部	10Ｙ Ｒ3/1　黒褐	10Ｙ Ｒ6/3　にぶい黄橙	
62－41		ＭＡ50	弥生	甕	体部	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ7/4　にぶい黄橙	
62－42		ＭＲ49	弥生	甕	体～底部	10Ｙ Ｒ6/2　灰黄褐	10Ｙ Ｒ6/3　にぶい黄橙	
62－43		ＭＲ62	弥生	甕	体～底部	10Ｙ Ｒ6/4　にぶい黄橙	10Ｙ Ｒ5/3　にぶい黄褐	
62－44		ＭＲ53	弥生	甕	底部	5Ｙ Ｒ7/6　橙	7.5Ｙ Ｒ6/6　橙	
62－45		ＬＲ54	弥生	甕	底部	7.5Ｙ Ｒ5/3　にぶい褐	10Ｙ Ｒ5/3　にぶい黄褐	

第14表　遺構外出土須恵器・土師器

挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	内外面調整	底部	備考
63－46		ＭＥ41	須恵器	蓋	口縁部	ロクロ調整		
63－47		ＬＲ58	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転糸切り	
63－48		ＭＢ51	須恵器	坏	口縁部	ロクロ調整		
63－49		ＭＡ50	須恵器	坏	口縁部	ロクロ調整		
63－50		ＭＢ45	須恵器	坏	口縁部	ロクロ調整		
63－51	58	ＬＴ58	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転糸切り	
63－52		ＬＴ59	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転糸切り	
63－53		ＭＤ53	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転糸切り	
63－54	57	25Ｔ	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転ヘラ切り→ナデ　底部墨書「本」	
63－55		ＬＴ50	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転ヘラ切り→ナデ	
63－56	56	ＭＤ48	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転ヘラ切り	
63－57		16Ｔ	須恵器	坏	底部	ロクロ調整	回転ヘラ切り	
63－58	55	ＬＴ58	須恵器	高台付皿	底部	ロクロ調整	回転糸切り	
63－59		ＭＦ47	須恵器	高台付坏	底部	ロクロ調整		
63－60		ＭＡ46	須恵器	高台付坏	底部	ロクロ調整		
63－61		ＭＨ44	須恵器	高台付坏	底部	ロクロ調整	回転ヘラ切	
63－62		ＬＴ56	須恵器	甕	口縁～胴部	ロクロ調整		
64－63	59	ＭＡ49	須恵器	甕	口縁部	ロクロ調整		
64－64		ＬＴ50	須恵器	甕	体部	ロクロ調整		
64－65		ＭＡ48	須恵器	甕	体部	外面タタキ目		
64－66	60	ＭＤ48	須恵器	甕	体部	外面タタキ目　内面アテ具痕		
64－67		ＭＥ44	須恵器	甕	底部	ロクロ調整		自然釉
65－68	68	ＬＴ60	土師器	坏	口縁部	ロクロ調整　内面黒色処理		
65－69	69	ＬＴ60	土師器	高台付坏	口縁部	ロクロ調整　内面黒色処理		
65－70	75	16Ｔ	土師器	甕	口縁部	外面口縁ナデ・体部ハケ目 内面一ハケ目		
65－71	70	16Ｔ	土師器	甕	口縁部	外面口縁ナデ 内面口縁ナデ・体部ハケ目		
65－72	73	ＬＴ60	土師器	甕	口縁部	外面口縁ナデ・体部ハケメ 内面口縁ナデ・体部ハケメ	口何部凹線状	
65－73		ＬＳ60	土師器	甕	口縁部	外一口縁ナデ・体部ハケメ 内一口縁ナデ・体部ハケメ		
65－74		ＬＴ60	土師器	甕	口縁部	内外面ナデ		
65－75		ＬＴ59	土師器	甕	口縁部	外面アテ具痕→ナデ・内面ナデ		
65－76	72	ＬＴ60	土師器	甕	口縁部	内外面ナデ		
66－77	71	ＬＳ58	土師器	甕	口縁部	ロクロ調整		
66－78		ＬＳ61	土師器	甕	口縁部	ロクロ調整		
66－79		ＬＴ60	土師器	甕	底部	外面ハケ目　内面ナデ	木葉痕	
66－80		ＬＴ60	土師器	甕	底部	外面ハケ目　内面ナデ	回転糸切り	
66－81	74	ＬＳ61	土師器	甕	底部	ロクロ調整	回転糸切り	
66－82		ＬＳ60	土師器	甕	底部	ロクロ調整	回転糸切り	
66－83	49	表採	工製紡錘車					
66－84	50	表採	石製紡錘車					

第４節　鉄関連遺物

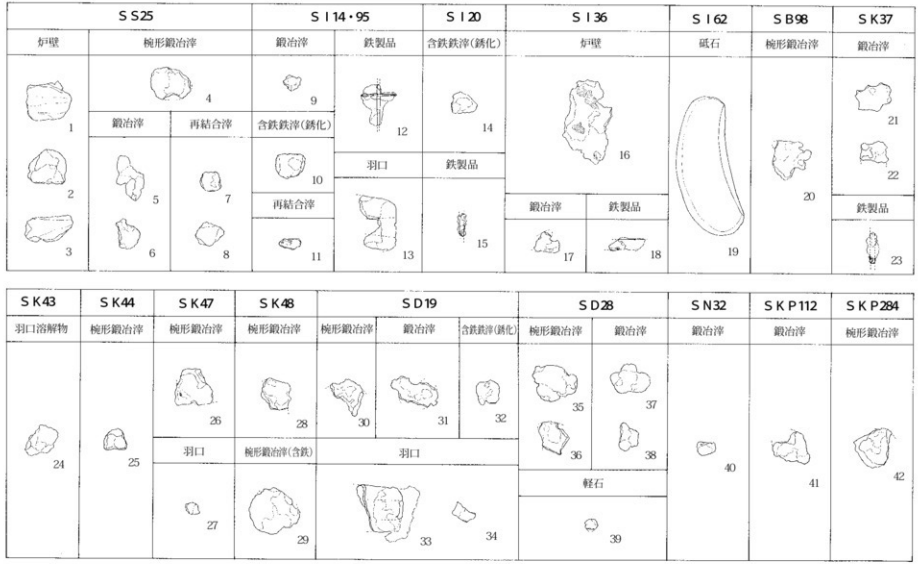
本遺跡からは、鍛冶炉１基のみの検出であったが住居内も含め303点の鉄関連遺物が出土している。すべての遺物について大きさ・重量・磁着度・メタル度を計測したものが第15表である。そのうち、98点は構成図を作成した。メタル度は埋蔵文化財用特殊金属探知機ＭＲ－50Ｂ（基準値設定者穴澤義功）を用いた。金属の残留度の高い方から特Ｌ・Ｌ・Ｍ・Ｈと表示している。鉄は含んでいるもののすでに酸化したものについては△で表示している。磁着度は方眼台紙に６㎜を１単位とする同心円を10本以上描き、標準磁石（フェライト磁石）を糸につり下げて広い側面側を台紙の中心に合わせる。遺物を手に持ち外側のランクから順次接近させて磁石が急激に動き始める瞬間の数字を記録したものである。

構成図は、本遺跡から出土した鉄関連遺物をまとめたものである。ＳＳ25では炉壁の他に再結合滓があることから一定期間継続的に作業が行われていた可能性を示している。竪穴住居跡では、ＳＩ14から紡錘車、釘、ＳＩ20から釘、ＳＩ36から刀子といった鉄製品、ＳＩ62から砥石がそれぞれ出土している。土坑、溝跡では、全般に鍛冶滓が見られ、羽口片がやや多く、いずれも小破片で少量である。遺構外では、全体の傾向としては遺構内と同じであり、鍛冶滓が多く、刀子などの鉄製品、金床石として利用された石、砥石等が出土している。これらの他に、器形は不明であるが鋳造品と思われる遺物（構成遺物番号84）がある。

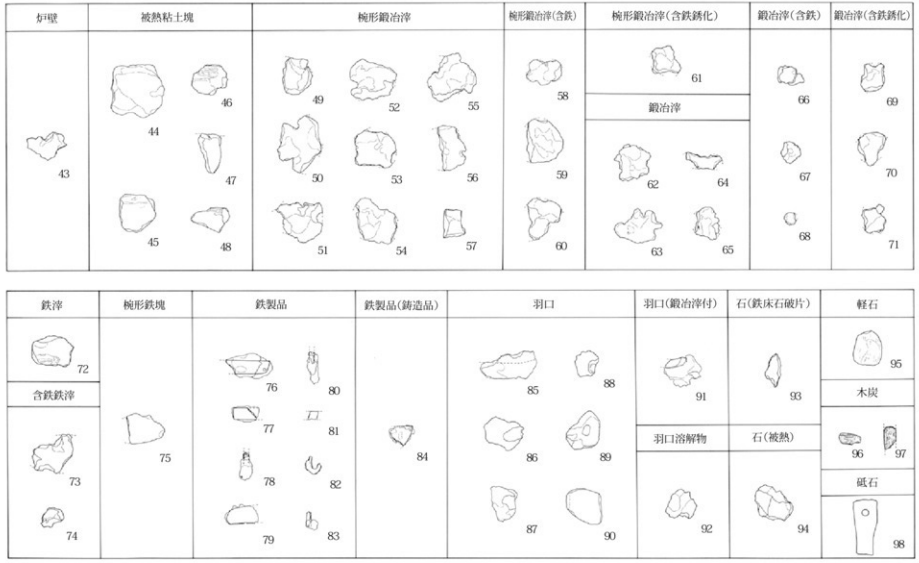
本遺跡では出土遺物から鍛冶が行われていたものと判断される。これは、遺跡の広範囲にわたって鍛冶滓が出土していることから見ても明らかである。多くの竪穴住居内には袖や天井の構築材が残存するカマドがないが、焼土が見られ、鍛冶滓が出土していることから、これら住居内において鍛冶作業が行われていた可能性は十分考えられる。羽口は送風孔の径が小さいことから鍛冶炉に使用されたものであろう。また、鋳造品については、鋳型などといった関連遺物がないことから、搬入品とみたい。

第15表　鉄関連遺物構成比

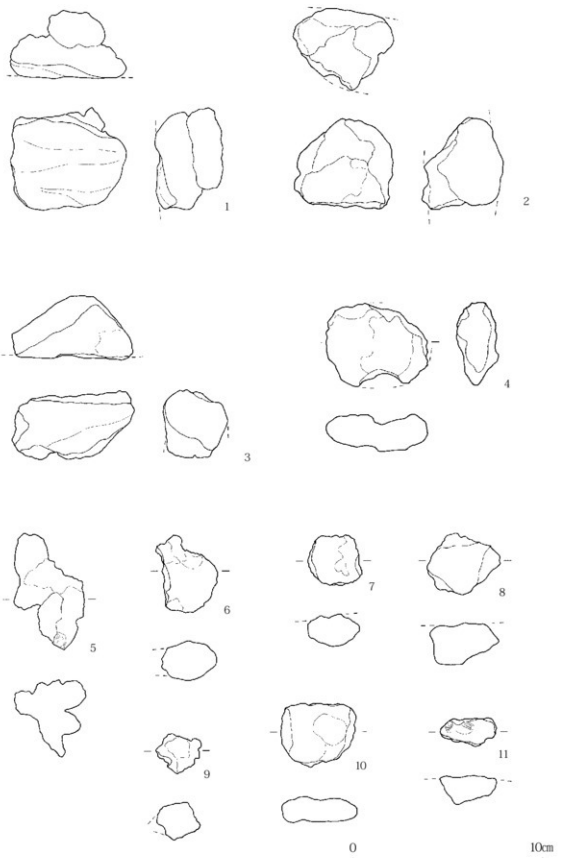
		ＳＳ25		60グリット以北遺構内		60グリット以北全体	
番号	遺物名	重量（ｇ）	構成比（％）	重量（ｇ）	構成比（％）	重量（ｇ）	構成比（％）
1	炉壁	171.1	35.8	171.1	11.7	200.6	5.2
2	炉壁溶解物			4.4	0.3	13.6	0.4
3	鍛冶滓	166.6	34.9	511.3	34.9	1228.4	31.7
4	椀形鍛冶滓	63.6	13.3	416.5	28.4	1243	32.1
5	再結合滓	60.8	12.7	60.8	4.2	61.9	1.6
6	含鉄鉄滓			26.1	1.8	61.2	1.6
7	鉄滓				0	99.5	2.6
8	鉄製品			10.8	0.7	97.4	2.5
9	羽口	15.5	3.3	261.1	17.8	792.9	20.5
10	羽口溶解物				0	34.4	0.9
11	軽石			2.2	0.2	2.2	0.1
12	石					27.8	0.7
	総重量	477.6		1464.3		3862.9	



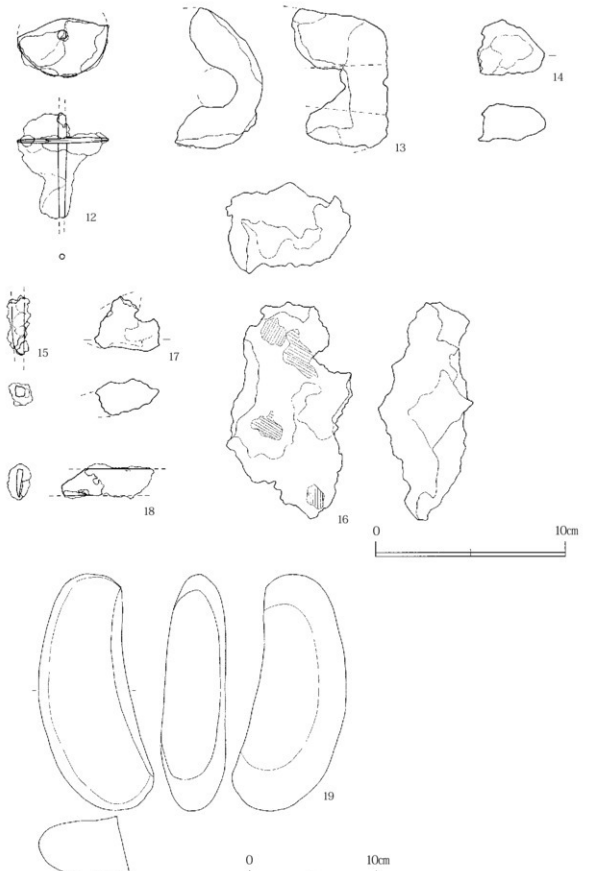
第67図　鉄関連遺物構成図（遺構内）



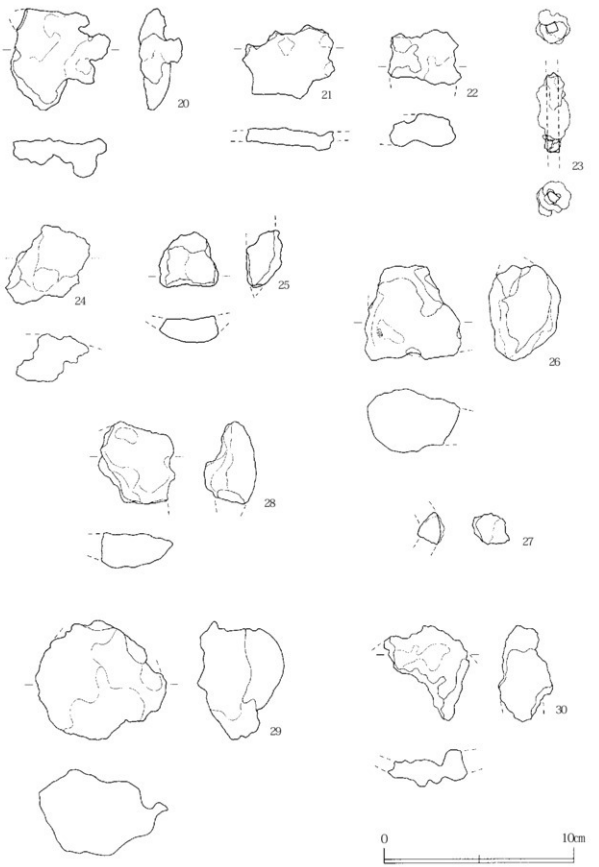
第68図　鉄関連遺物構成図（遺構外）



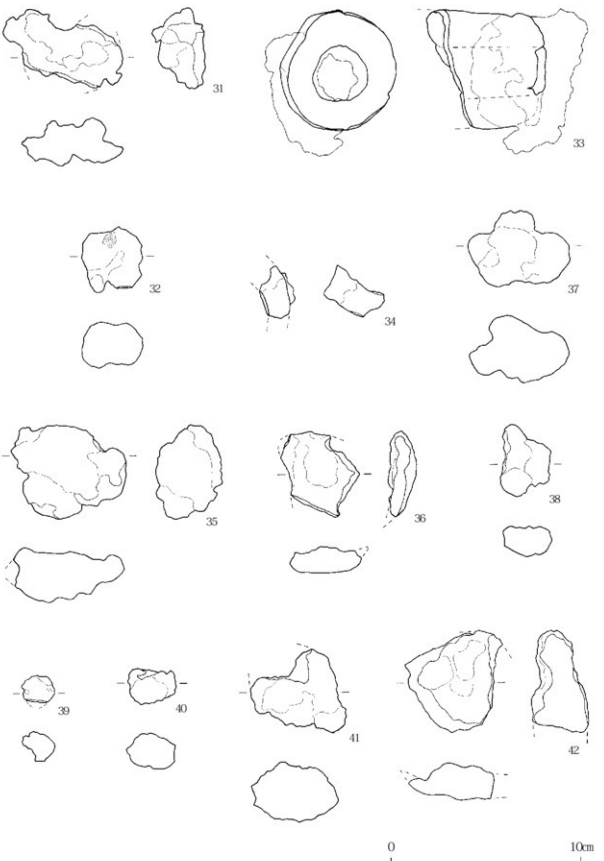
第69図　鉄関連遺物（１）



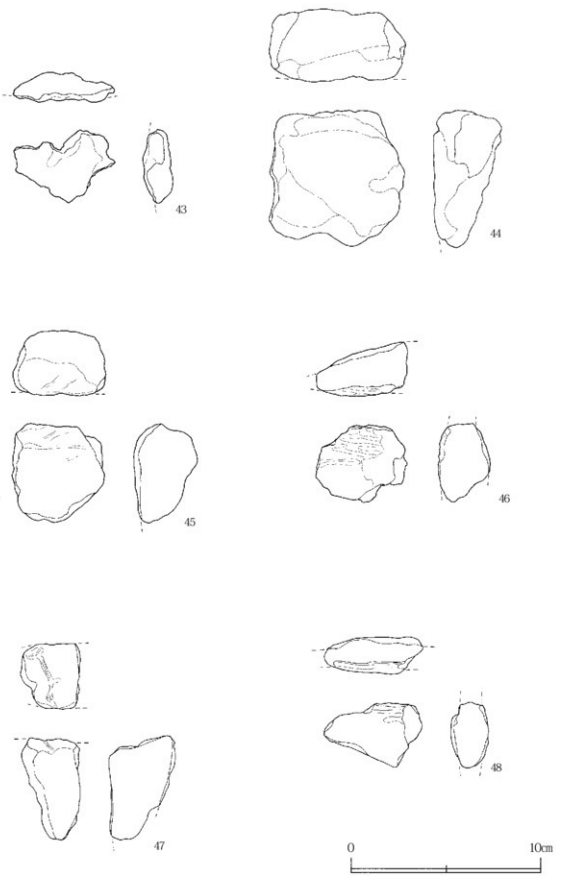
第70図　鉄関連遺物（２）



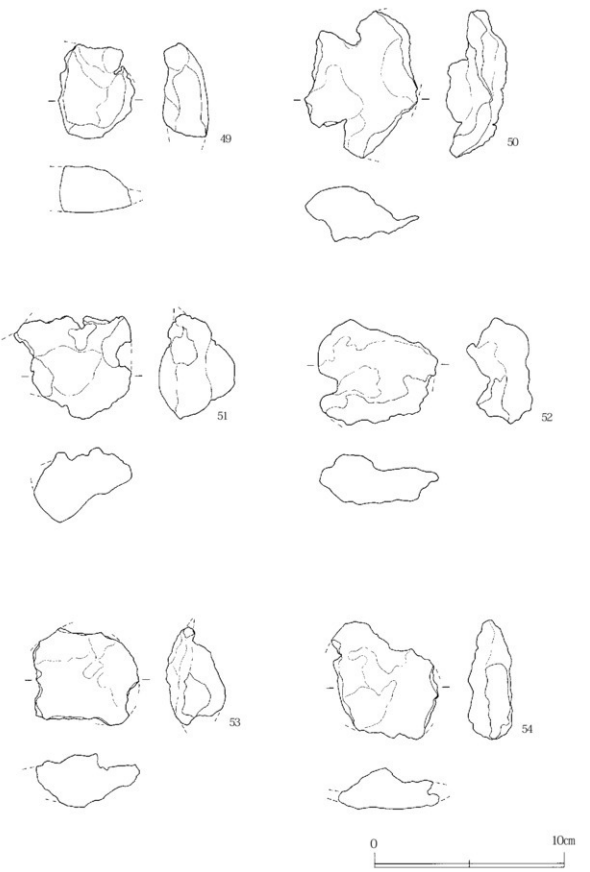
第71図　鉄関連遺物（３）



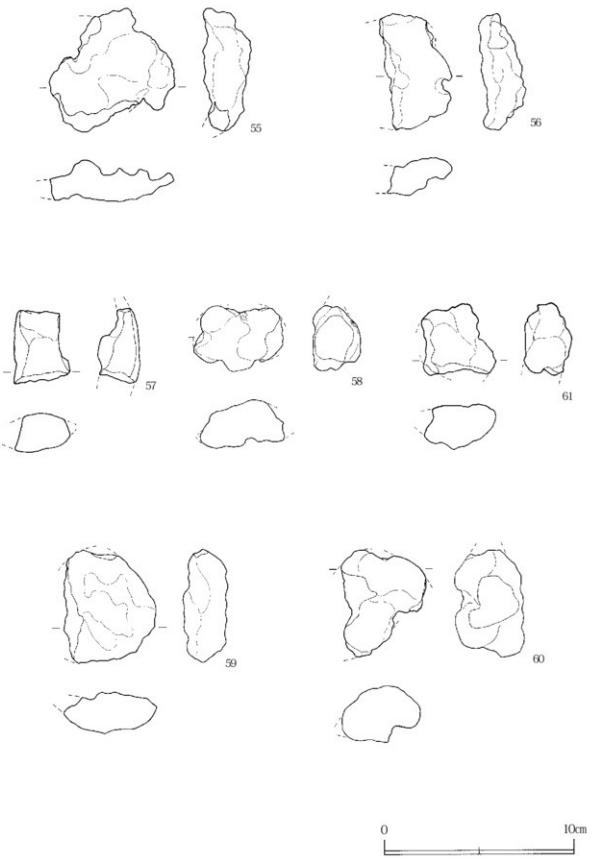
第72図　鉄関連遺物（４）



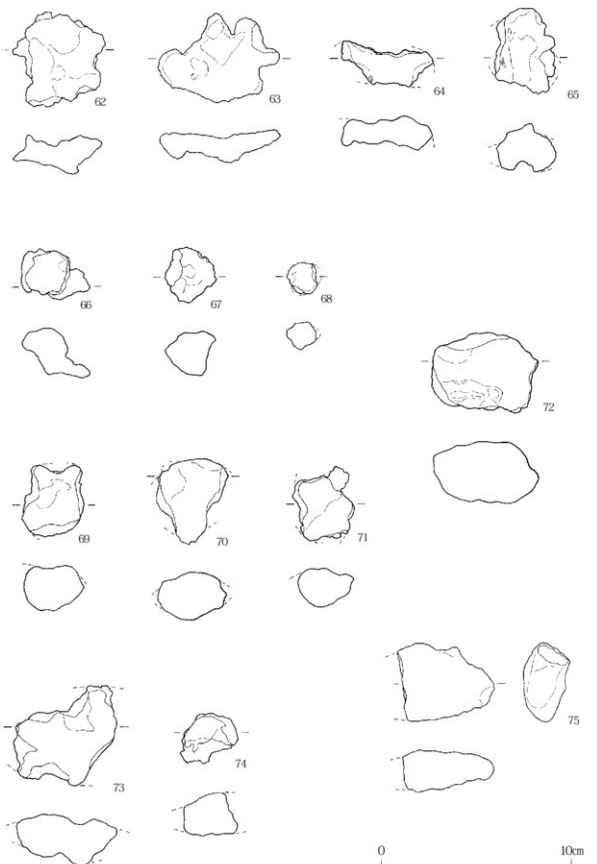
第73図　鉄関連遺物（５）



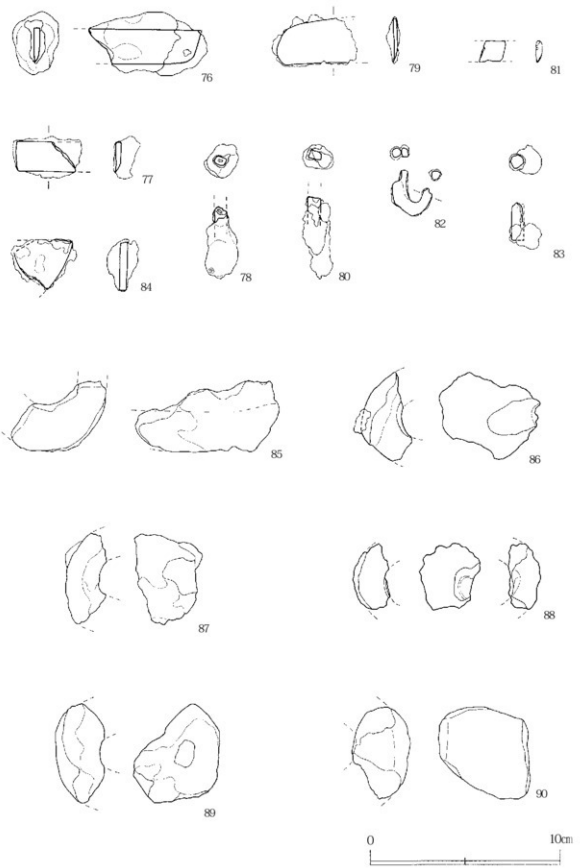
第74図　鉄関連遺物（６）



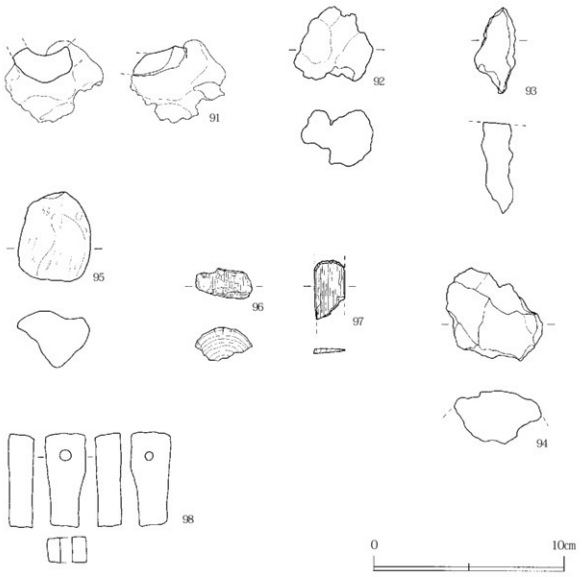
第75図　鉄関連遺物（７）



第76図　鉄関連遺物（８）



第77図　鉄関連遺物（９）



第78図　鉄関連遺物（10）

第５章　自然科学分析

株式会社古環境研究所

第１節　西野遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

１　試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№１	ＳＮ04内　焼土遺構	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№２	ＳＩ14・95内　竪穴住居跡内底面（北側）	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№３	ＳＩ17内　竪穴住居跡内底面	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№４	ＳＤ28内　溝跡内	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№５	ＳＩ30内　竪穴住居跡内土坑	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№６	ＳＩ35内　竪穴住居跡内	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№７	ＳＫ37内　土坑	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№８	ＳＫ41内　土坑内底面	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№９	ＳＩ62内　竪穴住居跡内床面	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№10	ＳＫ85内　焼土遺構	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
№11	ＬＴ60　Ⅳ層	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）

2　測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定No.（Beta－）
No.1	1260±40	－26.5	1240±40	交点：Cal AD　780 1σ：Cal AD　710～　810, Cal AD　840～　860 2σ：Cal AD　680～　890	147895
No.2	1020±40	－26.5	1000±40	交点：Cal AD 1020 1σ：Cal AD 1000～1030 2σ：Cal AD　980～1060, Cal AD 1080～1150	147896
No.3	1000±40	－25.8	990±40	交点：Cal AD 1020 1σ：Cal AD 1010～1040 2σ：Cal AD　990～1160	147897
No.4	1200±40	－26.6	1170±40	交点：Cal AD　880 1σ：Cal AD　790～　900 2σ：Cal AD　770～　980	147898
No.5	970±50	－25.5	960±50	交点：Cal AD 1030 1σ：Cal AD 1020～1160 2σ：Cal AD　990～1190	147899
No.6	1480±40	－24.6	1490±40	交点：Cal AD　580 1σ：Cal AD　540～　620 2σ：Cal AD　460～　480, Cal AD　520～　650	147900
No.7	1210±40	－25.3	1210±40	交点：Cal AD　790 1σ：Cal AD　770～　880 2σ：Cal AD　700～　900	147901
No.8	1410±40	－24.9	1410±40	交点：Cal AD　650 1σ：Cal AD　620～　660 2σ：Cal AD　580～　680	147902
No.9	1430±40	－25.6	1420±40	交点：Cal AD　640 1σ：Cal AD　620～　660 2σ：Cal AD　570～　670	147903
No.10	1240±40	－25.3	1240±40	交点：Cal AD　780 1σ：Cal AD　710～　810, Cal AD　840～　860 2σ：Cal AD　680～　890	147904
No.11	5610±50	－26.4	5590±50	交点：Cal BC 4440 1σ：Cal BC 4460～4360 2σ：Cal BC 4510～4340	147905

（１）^{14}Ｃ年代測定値

試料の^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比から、単純に現在(1950年ＡＤ)から何年前かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は5,568年を用いた。

（２）δ^{13}Ｃ測定値

試料の測定^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比(^{13}Ｃ／^{12}Ｃ)。この値は、標準物質(ＰＤＢ)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

（３）補正^{14}Ｃ年代値

δ^{13}Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}Ｃ／^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

（４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動に対する補正により、暦年代(西暦)を算出した。具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの詳細な測定、サンゴのＵ－Ｔｈ年代と^{14}Ｃ年代の比較により補正曲線を作成して暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3))により、約19,000年ＢＰまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年ＢＰ以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}Ｃ年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ(68％確率)・２σ(95％確率)は、補正^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

（５）測定№

測定は、Beta Analytic Inc.(Florida, U.S.A)において行われた。Beta－は同社の測定№を意味する。

第２節　西野遺跡出土炭化材の樹種同定

１　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

２　試料

試料は、西野遺跡の竪穴住居跡内や焼土遺構等より出土した炭化材11点である。

３　方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面(木材の横断面、放射断面、接線断面)を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４　結果

結果は表１に、主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　図版14－１

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版14・15－２・３・４

横断面：大型の道管が、年輪のはじめに１～数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材部から晩材部にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cm程度であるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性が強く水湿にもよく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など、広く用いられる。

サクラ属　*Prunus*　バラ科　図版15－５

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

カエデ属　*Acer*　カエデ科　図版15－６

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～４個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で１～６細胞幅である。道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデなどがあるり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木

で、大きいものは高さ20m、径１mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

不明　unknown

粉状炭化物で木材の形質を呈していないため、木材と断定できない。

５　所見

同定の結果、西野遺跡出土の炭化材は、スギ３、クリ５、サクラ属１、カエデ属１、不明１であった。スギは、温帯に広く分布し、特に温帯中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。クリは、温帯に広く分布し、乾燥した台地上などに生育し、二次林要素でもある。縄文時代においては、北日本で多用される。サクラ属やカエデ属は温帯に分布し、陽当たりのよい斜面などに生育する落葉高木である。いずれの材も良材であり、本遺跡周辺に分布し、容易に採取できたと推定される。

《参考文献》

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20－48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49－100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

第16表　西野遺跡における樹種同定結果

試料番号	試料内容	備　考	結　果	
No.1	ＳＮ04内	焼土遺構	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc
No.2	ＳＩ14内	竪穴住居跡内床面（北側）	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc
No.3	ＳＩ17内	竪穴住居跡床面	カエデ属	Acer
No.4	ＳＫ28内		クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc
No.5	ＳＩ30内	竪穴住居跡内土坑	サクラ属	Prunus
No.6	ＳＩ35内	竪穴住居跡内	スギ	Cryptomeria japonica D. Don
No.7	ＳＫ37内	Ⅱ層	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc
No.8	ＳＫＦ41内	フラスコ状土坑内底面	スギ	Cryptomeria japonica D. Don
No.9	ＳＩ62内	竪穴住居跡内底面	スギ	Cryptomeria japonica D. Don
No.10	ＳＮ85内	焼土遺構	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc
No.11	ＬＴ60内	Ⅳ層	不明（粉状炭化物のため木材と断定できず）	

第6章　まとめ

西野遺跡は、出土遺物から縄文時代前期・中期、弥生時代、平安時代に営まれた遺跡であることがわかる。しかしながら、縄文時代と弥生時代の遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡１軒だけで、遺物の多くは、平安時代の竪穴住居跡覆土から出土している。このことは、本来存在していた縄文時代と弥生時代の遺構や包含層は、平安時代の大規模な整地作業によって失われ、その後に集落が造営されたものと判断される。

平安時代の遺構には竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡２棟、鍛冶炉１基、竪穴状遺構１基などであるが、竪穴住居跡に重複があることからも、これら遺構群が同時期に存在していたとは考えられない。しかし、ＳＩ36出土の須恵器杯の時期が８世紀後半～９世紀前半で、その他の竪穴住居跡出土の遺物も同時期と考えられることから、西野遺跡は８世紀後半～９世紀前半に営まれた集落といえる。

西野遺跡の平安時代の竪穴住居には、平面形が方形あるいは長方形で、１辺が７m以上の大形の住居があること、またカマドが設けられないか、設けられたとしても、ＳＩ17・36で認められた天井部を持たない構造のカマドがあることなどの特徴がある。

西野遺跡から南２kmにある大平遺跡では、８世紀～９世紀前半とされる竪穴住居跡が５軒検出されおり、１辺が４～５mほどの方形でカマドが確認されている。また、両遺跡の間にも平安時代の竪穴住居が確認された後山遺跡と元木山根Ⅱ遺跡が位置する。後山遺跡の竪穴住居は一辺が３mほどの方形で、斜面を削り出した狭い平坦面に１軒確認されており、元木山根Ⅱ遺跡でも１辺が3.5mと５mほど方形の竪穴住居が各々１軒確認されている。一方の西野遺跡から北へ6.2kmには、官衙的性格を持つ遺跡としての中谷地遺跡あり、この間には、平安時代の竪穴住居跡がそれぞれ１軒確認された鹿来館跡と古間Ⅱ遺跡がある。両遺跡の住居は１辺が3.5mと3.7mの方形で、カマドを有している。
これら周辺の遺跡には、西野遺跡の竪穴住居の特徴を持つ竪穴住居跡が確認された例が無く、むしろ、竪穴住居がわずかに１軒だけ存在する遺跡が多い。８世紀後半から９世紀前半にかけて、西野遺跡を含む南秋田郡地域では、西野遺跡のように比較的大きな集落や中谷地遺跡など特徴のある遺跡があり、これらの遺跡を繋ぐように小規模な遺跡が存在していたことがうかがえるのであり、これは723年(天平５年)に出羽柵が高清水に移転したことと無関係ではないと考えられるのである。

平安時代の秋田城以北の様相は未だ明確には語れない部分が多い中で、西野遺跡は８世紀後半から９世紀前半の同地域を研究する上での貴重な遺跡といえる。

《参考文献》

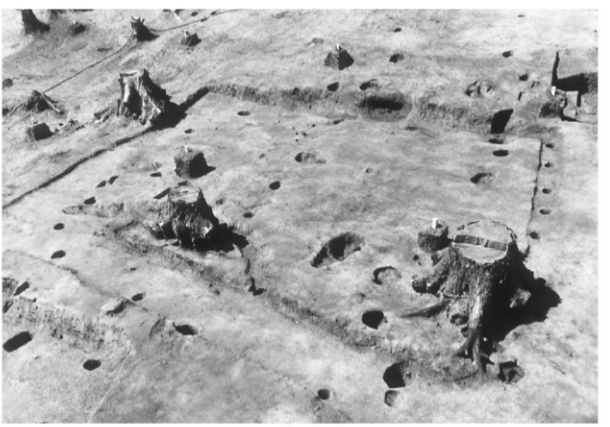
秋田市教育委員会『秋田城出土文字資料集』1984（昭和59）年
三浦隆義・庄司昭男「男鹿市小谷地遺跡の墨書土器」『秋田県立博物館研究報告　第12号』1987（昭和62）年
古代城柵官衙遺跡検討会『北日本における律令期の土器様相』1993（平成５）年
高橋学「秋田県内出土の墨書土器、箆書・刻書土器」秋田県埋蔵文化財センター『研究紀要　第10号』1995（平成７）年
日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会『蝦夷・律令国家・日本海』1997（平成９）年
伊藤武士「出羽における10・11世紀の土器様相」北陸古代土器研究会『北陸古代土器研究　第７号』1997（平成９）年

秋田県教育委員会『元木山根Ⅱ遺跡・毘沙門遺跡・六ツ館沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ－』秋田県文化財調査報告書第309集　2000（平成12）年
秋田県教育委員会『中谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告ⅤⅡ－』秋田県文化財調査報告書第316集　2001（平成13）年
秋田県教育委員会『古開Ⅱ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告ⅤⅢ－』秋田県文化財調査報告書第317集　2001（平成13）年
秋田県教育委員会『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告Ⅹ－』秋田県文化財報告書第329集　2001（平成13）年
秋田県教育委員会『鹿来館跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅠ－』秋田県文化財報告書第332集　2002（平成14）年
秋田県教育委員会『後山遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅡ－』秋田県文化財報告書第340集　2002（平成14）年

調査前（南▷北）

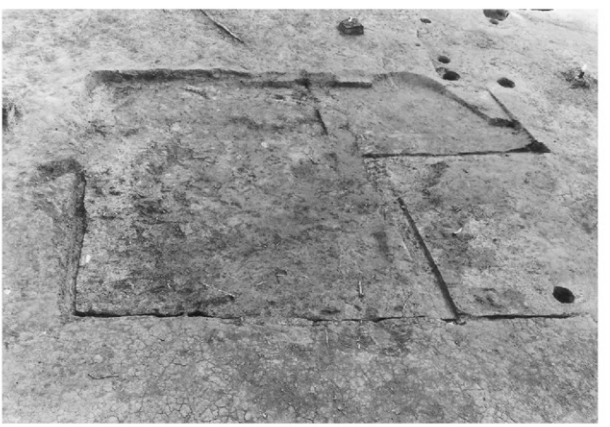
調査風景（北▷南）

S I 61竪穴住居跡（北▷南）



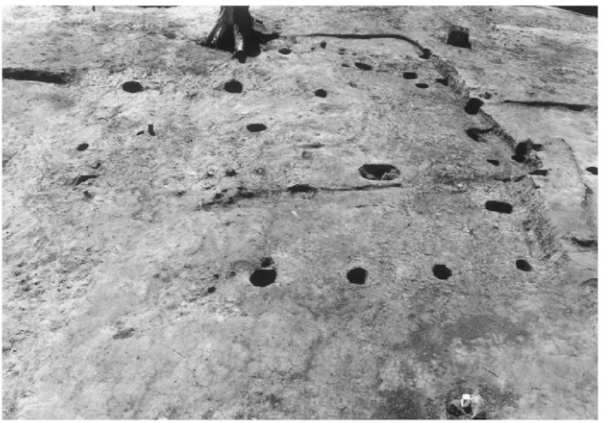
S I 30竪穴住居跡（東▷西）

SI35竪穴住居跡（南▷北）



SI35竪穴住居跡（北▷南）

図版4



SI14竪穴住居跡（南▷北）

SI36竪穴住居跡（南▷北）

ＳＩ78竪穴住居跡（北▷南）

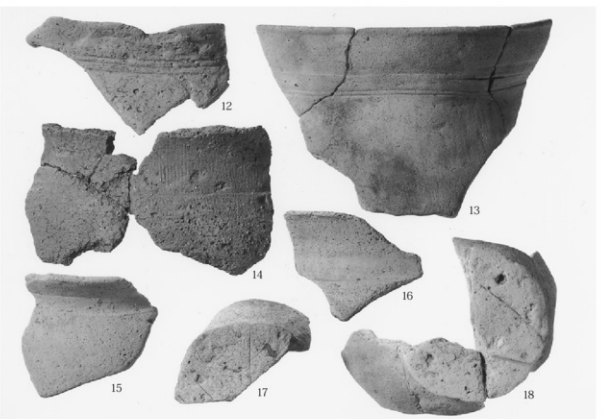
ＳＫＩ42竪穴状遺構（西▷東）

図版6

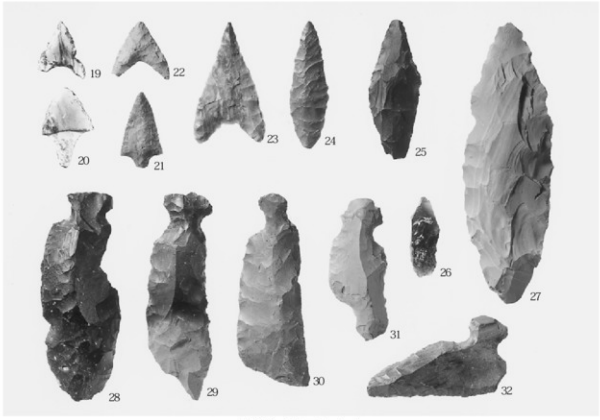
ＳＳ25鍛冶炉（西▷東）

ＳＫ85土坑（東▷西）

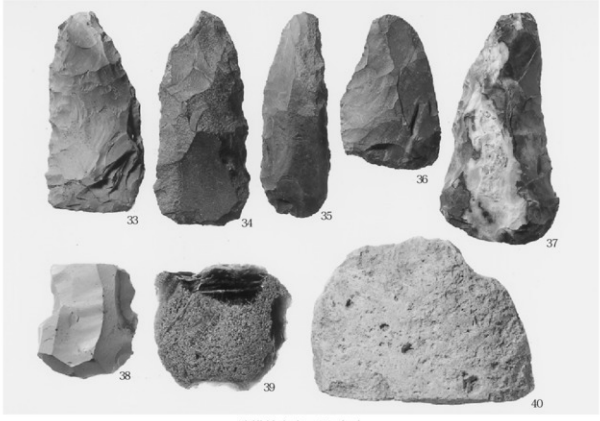
遺構内出土土器（1）



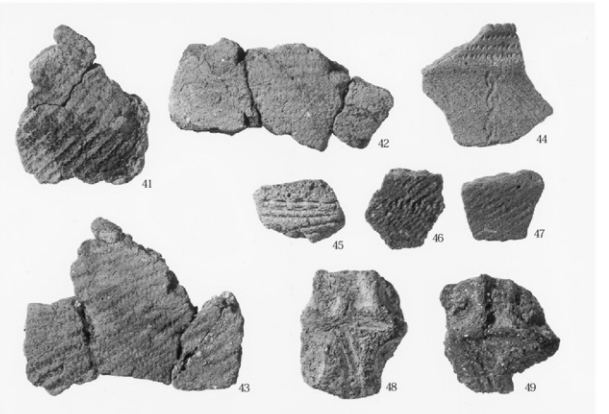
遺構内出土土器（2）



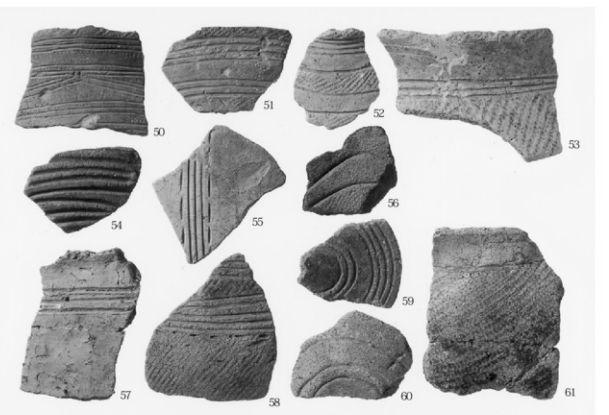
遺構外出土石器（1）



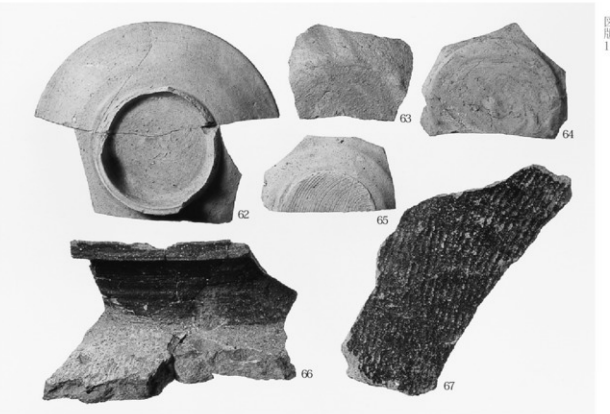
遺構外出土石器（2）



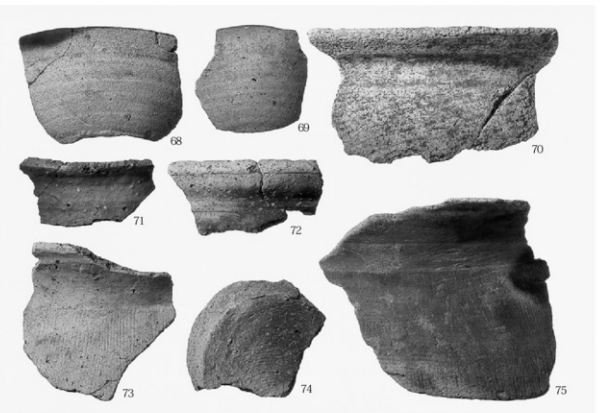
遺構外出土縄文土器



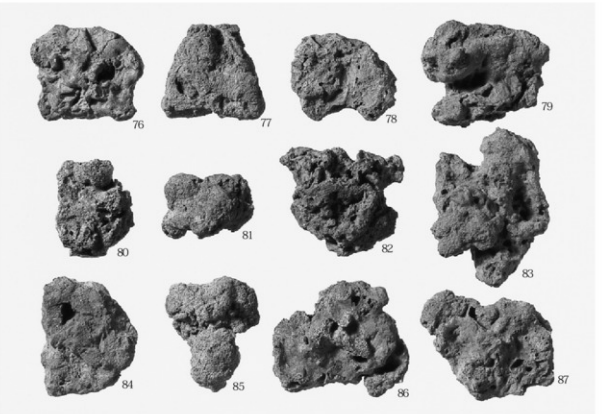
遺構外出土弥生土器



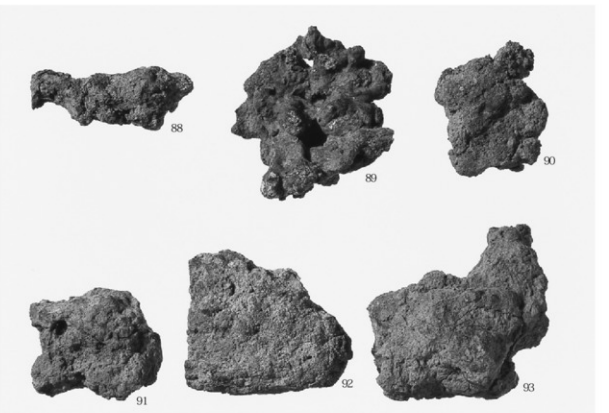
遺構外出土須恵器



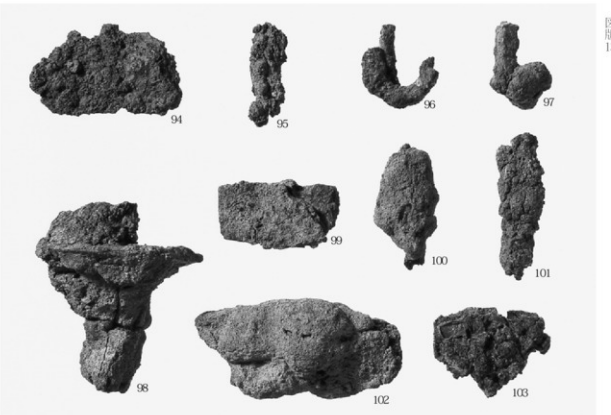
遺構外出土土師器



椀形鍛冶滓



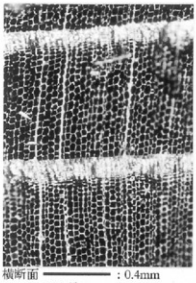
鍛冶滓

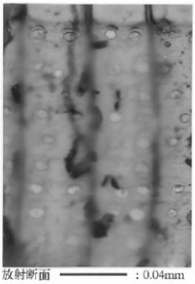


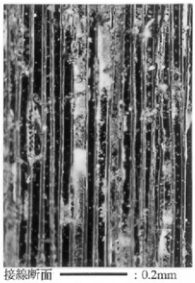
鉄製品

羽口・砥石

図版14


横断面 ——— ：0.4mm


放射断面 ——— ：0.04mm


接線断面 ——— ：0.2mm

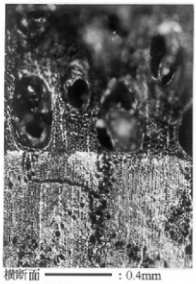
1．№6スギ

横断面 ——— ：0.4mm

放射断面 ——— ：0.4mm

接線断面 ——— ：0.2mm

2．№2クリ

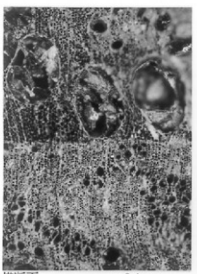

横断面 ——— ：0.4mm

放射断面 ——— ：0.4mm

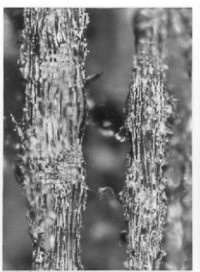
接線断面 ——— ：0.2mm

3．№4クリ

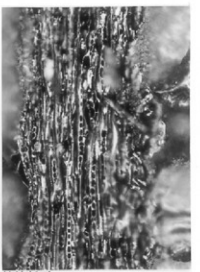
西野遺跡の木材Ⅰ



横断面 ——— ：0.4mm

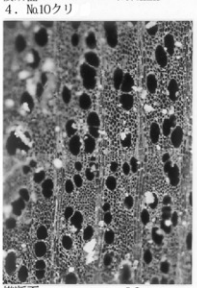


放射断面 ——— ：0.2mm

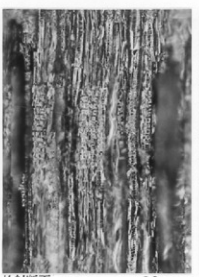


接線断面 ——— ：0.2mm

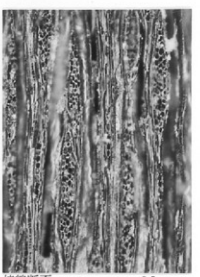
4．No.10クリ



横断面 ——— ：0.2mm

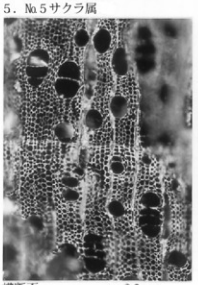


放射断面 ——— ：0.2mm

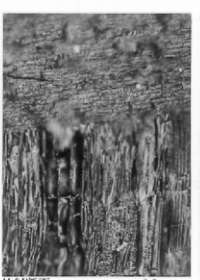


接線断面 ——— ：0.2mm

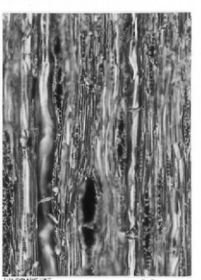
5．No.5サクラ属



横断面 ——— ：0.2mm



放射断面 ——— ：0.2mm



接線断面 ——— ：0.2mm

6．No.3カエデ属

西野遺跡の木材II

報告書抄録

ふりがな	にしのいせき
書名	西野遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XVII
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第360集
編著者名	半田あきほ・高橋忠彦
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
発行年月日	西暦2003年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にしのいせき 西野遺跡	あきたけんみなみあきた 秋田県南秋田 ごんしょうわまちとよかわ 郡昭和町豊川 やまだあざいえのうえ 山田字家ノ上 117－１ほか	05362		39° 52′ 21″	140° 6′ 5″	19990604 ～ 19990611 20000515 ～ 20000811	150㎡ 2750㎡	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
西野	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代	竪穴住居跡　17 竪穴状遺構　1 掘立柱建物跡　2 柱穴様ピット　270 鍛冶炉　1 土坑　32 焼土遺構　6 溝跡　9	縄文土器 弥生土器 石器 土師器 須恵器 土製品 石製品 土製品	竪穴住居は縄文時代後期のものが１軒、古代のものが16軒、掘立柱建物跡は古代のものが２軒が確認された集落跡

秋田県文化財調査報告書第360集
西野遺跡
－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ－

印刷・発行　平成15年３月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話(0187)69－3331　FAX(0187)69－3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580　秋田市山王３丁目１番１号
電話(018)860－5193　FAX(018)860－5886
印　　刷　秋田協同印刷株式会社